青森市埋蔵文化財調査報告書 第96集

葛 野 遺 跡 群

発掘調査報告書

平成 19 年度

青森市教育委員会

序

現在、青森市内の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）は約400ヶ所を数え、各種公共事業や民間土木工事に際しては、慎重を期すとともに記録保存を前提とした発掘調査が実施されております。

このたび、市道金浜小畑沢線道路改良工事に伴い、平成18・19年度の二ヵ年に亘って、工事予定地内における葛野遺跡群の三遺跡（葛野（１）・（２）・（３）遺跡）が発掘調査されました。調査の結果、平安時代の竪穴住居跡、土坑、焼土遺構、小ピット、溝状遺構や該期の土器（土師器・須恵器）等が検出され、葛野地区に平安時代の集落跡があったことが明らかになりました。

本書は、その発掘調査成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財保護ならびに調査・研究に活用されることを願ってやみません。

本書の刊行にあたり、ご理解とご協力を賜った関係機関・関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成20年３月

青森市教育委員会

教育長　**角　田　詮二郎**

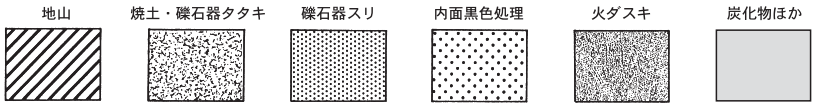
例　　言

1．本書は、青森市教育委員会が発掘調査を実施した青森市大字大別内字葛野に所在する葛野遺跡群（葛野（１）遺跡・葛野（２）遺跡・葛野（３）遺跡）の発掘調査報告書である。
2．本書に記載される内容は、平成18年度（葛野（１）・（２）遺跡）および平成19年度（葛野（３）遺跡）に実施した市道金浜小畑沢線道路改良工事に係る発掘調査成果をまとめたものである。
3．本遺跡群は、青森県埋蔵文化財包蔵地台帳に遺跡番号01217（葛野（１）遺跡)、01218（葛野（２）遺跡)、01308（葛野（３）遺跡）として登録されている。
4．本書の執筆ならびに編集は、青森市教育委員会が行った。執筆分担は各文末に記した。
5．出土遺物および記録図面、写真関係資料は青森市教育委員会が保管している。
6．引用・参考文献は巻末にまとめた。
7．発掘調査および報告書の作成にあたって、次の各機関・各位からご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。(敬称略・順不同)

青森県教育庁文化財保護課、青森市都市整備部道路建設課、工藤一彌

凡　　例

1．挿図番号および表番号、写真番号は一冊を通じて連続するものとし、「第○図」、「第○表」、「写真○」とした。
2．遺構の略称は、ＳＩ＝竪穴住居跡、ＳＫ＝土坑、ＳＮ＝焼土遺構、ＳＰ＝小ピット、ＳＤ＝溝状遺構とした。また、竪穴住居跡内の遺構に関しては、土坑（ＳＫ）・ピット（Pit）と表記した。
3．遺物図版には、括弧内に出土遺構あるいは出土グリッドを明記した。
4．図中・文中で使用したアルファベットを用いた略称は、以下の通りである。
　Ｐ…土器　Ｓ…石　ＬＢ…ロームブロック　Ｂ－Ｔｍ…白頭山－苫小牧火山灰
5．挿図の縮尺は各図毎に示した。また、写真図版の縮尺は統一していない。
6．土層の注記は、『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄1993）に準拠した。
7．遺物実測図・遺物写真図版の縮尺は、土器・石器：１/３、土製品・銭貨：１/２である。
8．図中で使用したスクリーントーンは以下の通りである。なお、須恵器断面は黒ベタで示した。



目　　次

序
例言・凡例
目次
図表・写真目次
第Ⅰ章　調査の概要……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査要項……1
　第３節　調査方法……3
　第４節　調査経過……3
第Ⅱ章　遺跡群の概要……7
　第１節　地理的・歴史的環境……7
　第２節　周辺の遺跡……9
　第３節　基本層序……10
第Ⅲ章　葛野（1）遺跡……13
　第１節　検出遺構と出土遺物……13
　　１．竪穴住居跡……13
　　２．土坑……18
　　３．小ピット……18
　　４．溝状遺構……20
　第２節　遺構外出土遺物……20
　　１．縄文土器……20
　　２．土師器……22
　　３．須恵器……22
第Ⅳ章　葛野（2）遺跡……27
　第１節　検出遺構と出土遺物……27
　　１．竪穴住居跡……27
　　２．土坑……31
　　３．小ピット……33
　　４．溝状遺構……33
　第２節　遺構外出土遺物……33
　　１．須恵器……33
第Ⅴ章　葛野（3）遺跡……39
　第１節　検出遺構と出土遺物……39
　　１．竪穴住居跡……39
　　２．土坑……39
　　３．焼土遺構……42

４．小ピット……44
５．溝状遺構……44
第２節　遺構外出土遺物……46
１．縄文土器……46
２．縄文石器……46
３．須恵器……46
４．銭貨……46
まとめ……49
引用・参考文献……50
写真図版……51
報告書抄録

図表・写真目次

挿図

第１図　遺跡群の位置……２
第２図　葛野（１）・（２）遺跡　グリッド設定図……４
第３図　葛野（３）遺跡　グリッド設定図……５・６
第４図　周辺の遺跡……８
第５図　葛野（１）遺跡　基本層序……10
第６図　葛野（２）遺跡　基本層序……11
第７図　葛野（３）遺跡　基本層序……11
第８図　葛野（１）遺跡　遺構配置図……12
第９図　葛野（１）遺跡　ＳＩ01……14
第10図　葛野（１）遺跡　ＳＩ02……14
第11図　葛野（１）遺跡　ＳＩ03……15
第12図　葛野（１）遺跡　ＳＩ04……16
第13図　葛野（１）遺跡　ＳＩ05……17
第14図　葛野（１）遺跡　ＳＩ06……17
第15図　葛野（１）遺跡　ＳＫ・ＳＰ……19
第16図　葛野（１）遺跡　ＳＤ……21
第17図　葛野（１）遺跡　ＳＩ出土遺物……23
第18図　葛野（１）遺跡　ＳＩ・遺構外出土遺物……24
第19図　葛野（２）遺跡　遺構配置図……25・26
第20図　葛野（２）遺跡　ＳＩ01……28
第21図　葛野（２）遺跡　ＳＩ02……29
第22図　葛野（２）遺跡　ＳＩ03……30
第23図　葛野（２）遺跡　ＳＫ・ＳＤ……32
第24図　葛野（２）遺跡　ＳＰ……34
第25図　葛野（２）遺跡　出土遺物（１）……35
第26図　葛野（２）遺跡　出土遺物（２）……36
第27図　葛野（３）遺跡　遺構配置図……37・38
第28図　葛野（３）遺跡　ＳＩ01出土土玉……39
第29図　葛野（３）遺跡　ＳＩ01……40
第30図　葛野（３）遺跡　ＳＩ01出土遺物……41
第31図　葛野（３）遺跡　ＳＫ・ＳＮ……43
第32図　葛野（３）遺跡　ＳＰ・ＳＤ……45
第33図　葛野（３）遺跡　遺構外出土銭貨……46
第34図　葛野（３）遺跡　ＳＫ・ＳＮ・遺構外出土遺物……47

表

第１表　周辺の遺跡……８
第２表　葛野（１）遺跡　小ピット観察一覧……18
第３表　葛野（１）遺跡　出土遺物観察一覧……22
第４表　葛野（２）遺跡　小ピット観察一覧……33
第５表　葛野（２）遺跡　出土遺物観察一覧……34
第６表　葛野（３）遺跡　小ピット観察一覧……44
第７表　葛野（３）遺跡　出土遺物観察一覧……48

写真

写真１　葛野（１）遺跡　検出遺構（１）……52
写真２　葛野（１）遺跡　検出遺構（２）……53
写真３　葛野（１）遺跡　検出遺構（３）……54
写真４　葛野（１）遺跡　出土遺物（１）……55
写真５　葛野（１）遺跡　出土遺物（２）……56
写真６　葛野（２）遺跡　検出遺構（１）……57
写真７　葛野（２）遺跡　検出遺構（２）……58
写真８　葛野（２）遺跡　検出遺構（３）……59
写真９　葛野（２）遺跡　出土遺物（１）……60
写真10　葛野（２）遺跡　出土遺物（２）……61
写真11　葛野（３）遺跡　検出遺構（１）……62
写真12　葛野（３）遺跡　検出遺構（２）……63
写真13　葛野（３）遺跡　検出遺構（３）……64
写真14　葛野（３）遺跡　出土遺物（１）……65
写真15　葛野（３）遺跡　出土遺物（２）……66

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

青森市都市整備部道路建設課（以下、道路建設課）は、青森市大字大別内字葛野に所在する市道金浜小畑沢線の拡幅工事を計画し、平成15年７月８日、青森市教育委員会文化財課に道路改良工事に係る「埋蔵文化財（遺跡）等協議書」を提出した。埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の位置関係を照合した結果、工事予定地が葛野（１）・（２）・（３）遺跡に該当していたことから、平成17年９月１日～９月30日の日程で確認調査を実施することとした。確認調査は、工事予定地内に任意のトレンチを76ヶ所設定し（葛野（１）遺跡：８、葛野（２）遺跡：27、葛野（３）遺跡：41）、人力による掘削および鋤簾がけを行った。調査面積は2,149㎡（葛野（１）遺跡：237㎡、葛野（２）遺跡：715㎡、葛野（３）遺跡：1,197㎡）である。

確認調査の結果、葛野（１）遺跡では平安時代の竪穴住居跡３軒、溝状遺構１条、葛野（２）遺跡では竪穴住居跡１軒、土坑２基、葛野（３）遺跡では土坑２基が検出された（青森市教育委員会2006ｃ）。その後、道路建設課と協議を行い、平成18・19年度の２ヶ年計画で、北側の葛野（１）遺跡から順に発掘調査を実施することとなった。平成18年度は、９月12日～10月27日の日程で葛野（１）遺跡、10月30日～11月30日の日程で葛野（２）遺跡を調査した。続いて平成19年度は、８月23日～11月６日の日程で葛野（３）遺跡を調査した。

第２節　調査要項

１．調査の目的

道路改良工事に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域における文化財の活用に資する。

２．遺跡名及び所在地

葛野（１）遺跡（青森県埋蔵文化財包蔵地台帳番号　０１２１７）
葛野（２）遺跡（青森県埋蔵文化財包蔵地台帳番号　０１２１８）
葛野（３）遺跡（青森県埋蔵文化財包蔵地台帳番号　０１３０８）
青森市大字大別内字葛野

３．発掘調査期間　平成18年９月12日～10月27日（葛野（１）遺跡）
平成18年10月30日～11月30日（葛野（２）遺跡）
平成19年８月23日～11月６日（葛野（３）遺跡）

４．調査面積　葛野（１）遺跡　589㎡
葛野（２）遺跡　711㎡
葛野（３）遺跡　2,887㎡

５．調査委託者　青森市都市整備部道路建設課

６．調査受託者　青森市教育委員会事務局文化財課

７．調査担当機関　青森市教育委員会事務局文化財課

８．調査指導機関　青森県教育庁文化財保護課

第１図　遺跡群の位置

(S＝1:50,000)

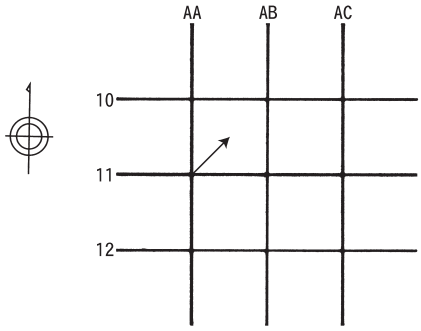
９．調 査 体 制　調査事務局　青森市教育委員会

教　育　長	角田詮二郎	文化財主事	小野　貴之
教育部長	古山　善猛	〃	児玉　大成（調整担当）
次　　長	相馬　政美	〃	設楽　政健（調査担当）
参事・文化財課長事務取扱	遠藤　正夫	主　　事	越谷美由紀（庶務担当）
主　　幹	多田　弘仁（平成18年度）	〃	竹ヶ原亜希（　〃　）
〃	藤村　和人（平成19年度）	〃	田中　浩司（　〃　）
文化財主査	木村　淳一（平成18年度文化財主事）	埋蔵文化財調査員	野坂　知広

第３節　調査方法

調査区は、市道金浜小畑沢線道路沿いにあたるため、ほぼ南北に蛇行する細長い形状を呈している。公共座標に基づく任意の起点から、調査区全体が網羅されるように４×４ｍのグリッドを設定した。グリッドの呼称は、東側に向かってＡＡ、ＡＢ、ＡＣ、ＡＤ・・・の順にアルファベット、南側に向かって１、２、３、４・・・の順に算用数字を付し、両者の組み合わせで示した。測量原点は付近に適当な基準点が存在しなかったため、流通団地付近の三角点（標高31.20m）より移動を行った。

（例）AA-11グリッド

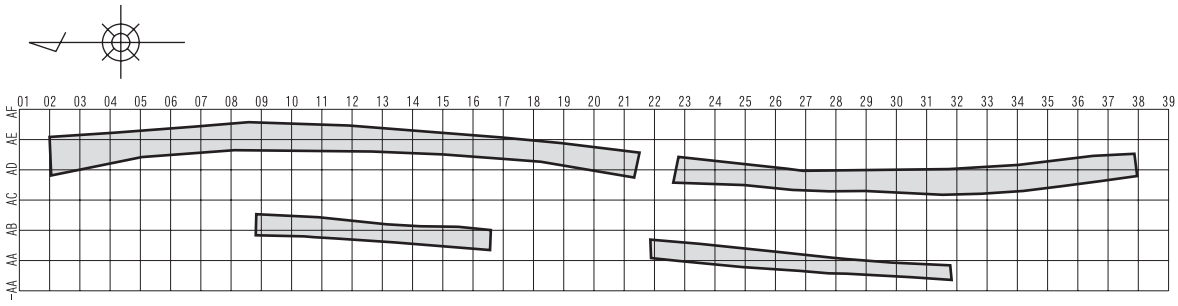


第４節　　調査経過

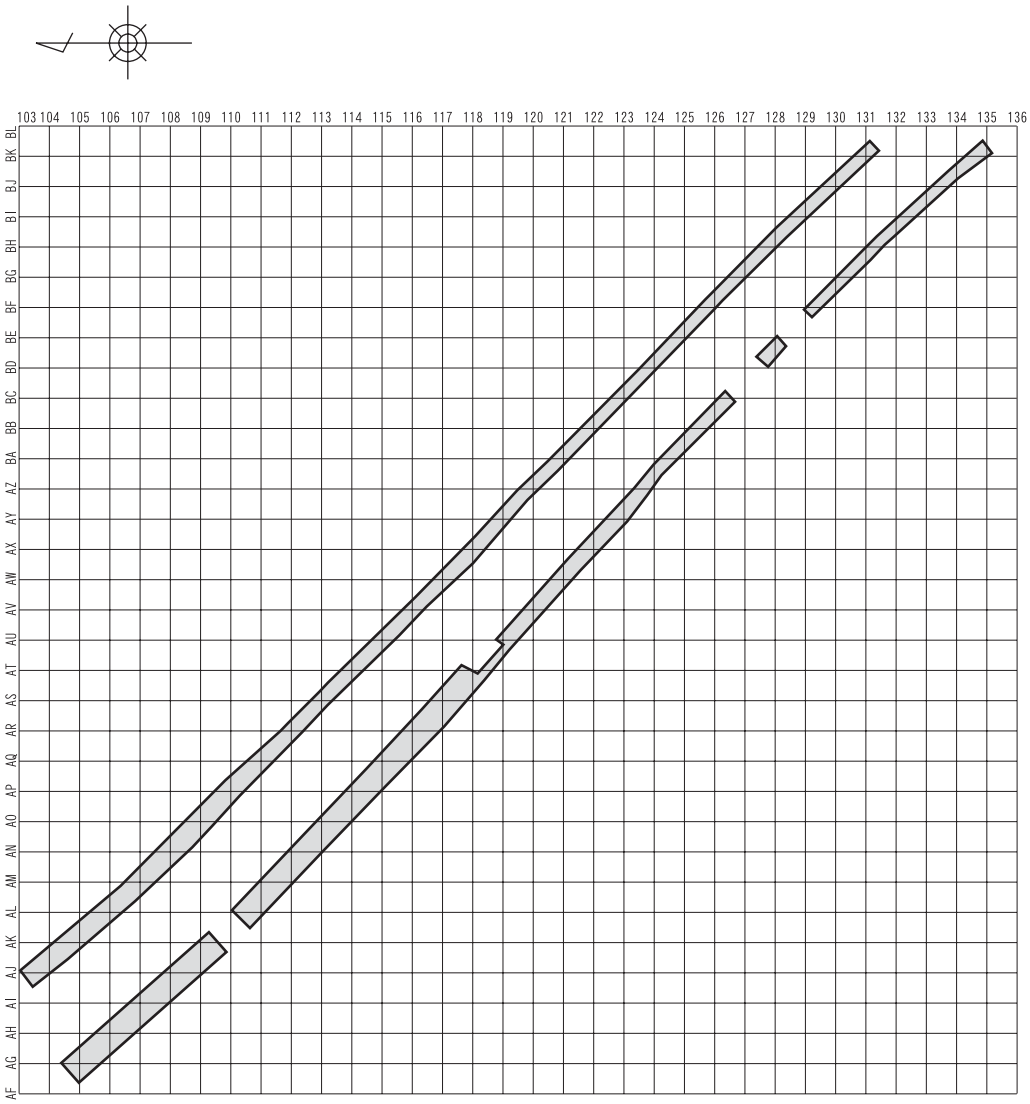
平成18年９月12日、葛野（１）遺跡の調査開始。重機による遺構確認面までの掘削を行い、その後、鋤簾がけにより遺構確認を行った。遺構精査は時間を要する竪穴住居跡を優先し、続いて溝状遺構・土坑・小ピットの順に行った。また、10月30日からは葛野（２）遺跡の調査を開始し、11月30日までに全ての作業を終了した。

平成19年８月23日、葛野（３）遺跡の調査開始。測量調査と併行して重機による遺構確認面までの掘削を行い、その後、鋤簾がけにより遺構確認を行った。遺構精査はやはり竪穴住居跡を優先し、溝状遺構・土坑・小ピットの順に行った。11月６日に全ての作業を終了し、機材・プレハブ等を撤収した。

（設楽　政健）

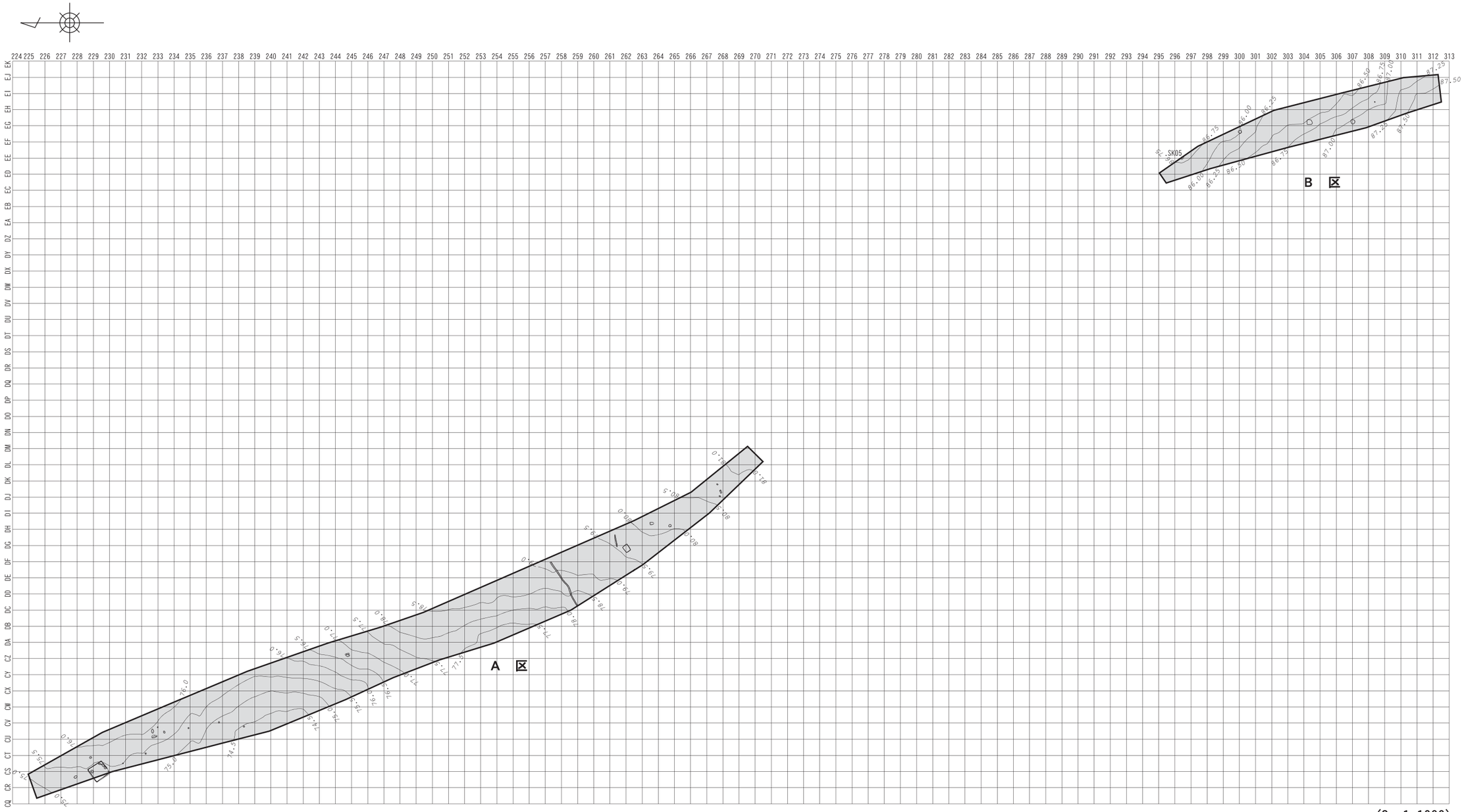


葛野(1)遺跡（S=1:1000）



葛野(2)遺跡（S=1:1000）

第２図　葛野（１)･(２）遺跡　グリッド設定図



(S＝1:1000)

第３図　葛野（３）遺跡　グリッド設定図

第Ⅱ章　遺跡群の概要

第１節　地理的・歴史的環境

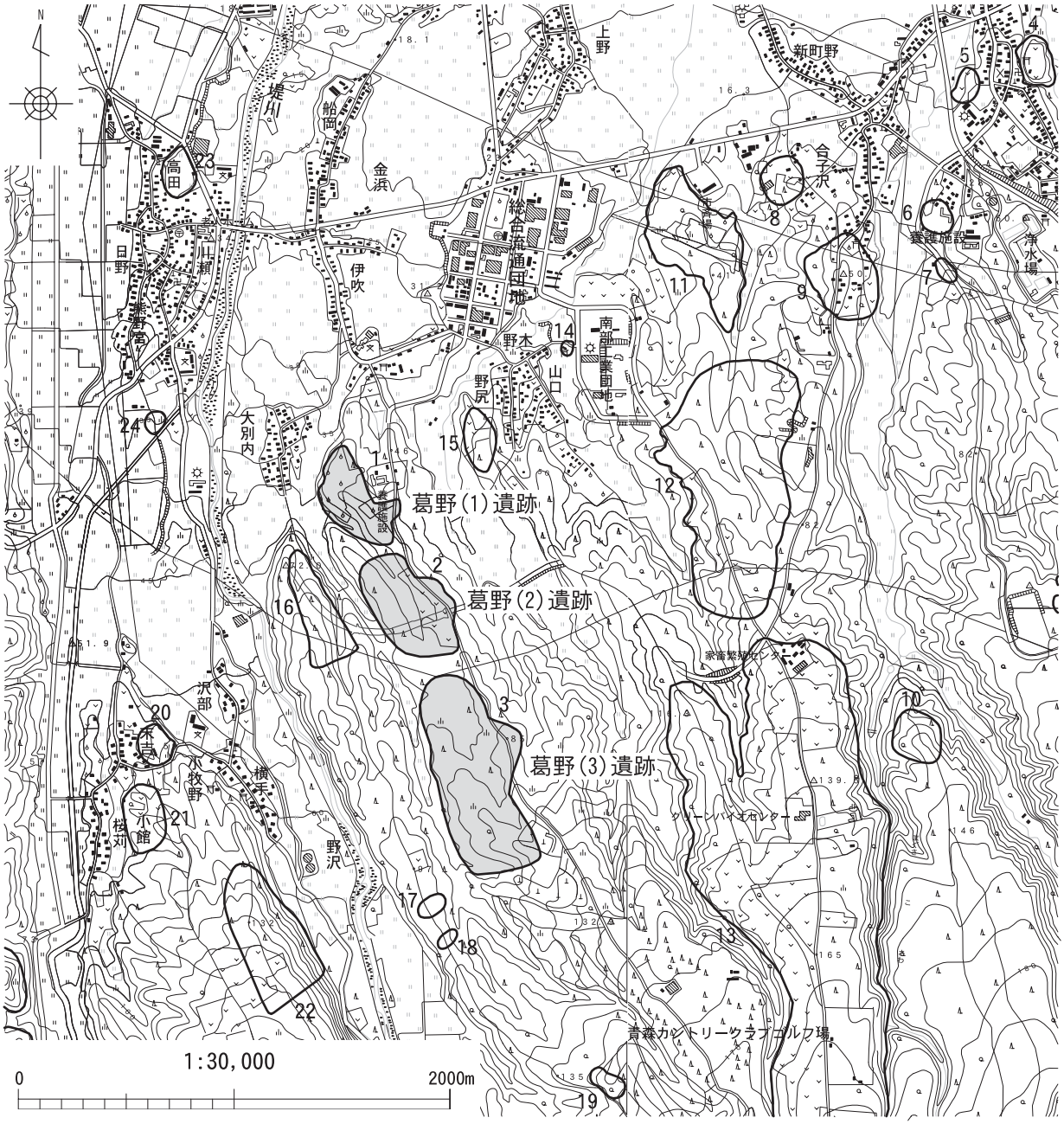
葛野遺跡群と便宜上呼称した３遺跡（葛野（１）・（２）・（３）遺跡）は、青森市大字大別内字葛野地内に所在する。各遺跡は、市南部に広がる火山性台地（微高丘陵）周縁の緩斜面上に占地し、海岸線から約９㎞内陸に位置している。西には荒川が北流し、陸奥湾へと注ぐ。現在、遺跡群一帯は山林であり、表土には黒色土が堆積する。本調査において地山とした黄褐色ローム層は、青森市域に広範に分布する月見野火山灰層と思われ、直下に堆積する赤褐色粘土質ローム層は大谷火山灰層に比定される。

葛野（１）遺跡は標高50m内外、葛野（２）遺跡は標高60m内外、葛野（３）遺跡は標高80m内外にあり、その範囲内を市道金浜小畑沢線が縦走する。同線沿いには、福祉施設なども建ち並ぶが、おおむね山林と畑地であり、山間の農村地帯の様相を呈する。八甲田方面へ南進した先には、八甲田霊園と広大な敷地を持つゴルフ場があり、細い道路でありながら交通量は多い。

「葛野」の地名は、すでに「貞享４年検地水帳」（1687年）に旧大別内村の小字名として記述がある。旧大別内村は水田よりも畑が多い地域であったが、林産業も盛んで、明治期には薪炭が行われていたようである。また、『荒川村沿革誌』（小友1956）によると、葛野周辺では「元刑務所の畑より大別内字葛野通称赤すらに至る一帯の区域」が遺跡として挙げられ、「石土器を発掘するのみならず、未製品の石器は山積する所あり、…城址は現存せり」と伝えている。これらの場所が、現在の登録遺跡とどのように合致するのかは詳らかでないが、葛野（１）遺跡や隣接する山吹（４）遺跡は丘陵先端に立地しており、中世の城館跡が埋もれている可能性もあろう。特に、葛野（１）遺跡周辺の林檎園には城跡があると地元住民に言い伝えられており、安藤氏一族が拠ったとの伝説もある。ちなみに、赤すらの「すら」は、方言で傾斜している場所のことを指すといい、地山ロームのことを地元では“あかつち”と呼ぶことから、地山が露出した斜面を意味するものと思われる。

平成８年（1996）と平成10年（1998）には、県営高田地区農免農道整備事業に伴い、葛野（２）遺跡が発掘調査されている。平成８年度の調査においては、竪穴住居跡４軒、竪穴遺構１基、土坑５基、道路状遺構３条を検出し、本遺跡が平安時代の集落跡を主体とすることが判明した（青森市教育委員会1997）。平成10年度の調査においても、竪穴住居跡16軒、竪穴遺構１基、土坑48基、小ピット２基が検出され、ほぼ同様の発掘成果が得られている（青森市教育委員会1999）。平安時代の竪穴住居跡は、南壁あるいは南東壁にカマドを持つが、おそらく住居入口がカマド脇に設置され、太陽光を意識した方角に作られたためと思われる。報告書において想定された遺跡の主体時期は10世紀初頭～前葉であり、今年度の調査成果とも齟齬はない。竪穴遺構からは土玉が出土しており、遺構・遺物ともに本調査との類似傾向が窺える。

また、平成12年（2001）～平成15年（2004）に亘って、八甲田霊園第２期造成工事に伴い、葛野（３）遺跡が発掘調査されている。調査区をＡ～Ｄの４区に分けて実施され、縄文時代と平安時代を主体とする竪穴住居跡28軒、掘立柱建物跡１軒、円形周溝１基、溝状遺構６条、土坑157基、鍛冶炉１基、焼土遺構３基、小ピット64基、埋設土器遺構２基と膨大な量の遺構・遺物が検出された。



第４図　周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡

番号	遺跡番号	遺　跡　名	所　在　地	時　　期	文　　献
1	01216	葛野（１）遺跡	大字大別内字葛野	平安、縄文	青森市教育委員会2006ｃ
2	01217	葛野（２）遺跡	大字大別内字葛野	平安、縄文	青森市教育委員会1997・1999・2006ｃ
3	01308	葛野（３）遺跡	大字大別内字葛野	縄文、平安	青森市教育委員会2006ｃ
4	01174	横内城跡	大字横内字亀井	中世、縄文	青森市教育委員会1987
5	01293	横内（３）遺跡	大字横内字亀井	平安	
6	01164	横内（１）遺跡	大字合子沢字山崎	縄文	青森市教育委員会1995
7	01206	横内（２）遺跡	大字合子沢字山崎	縄文	青森市教育委員会1995
8	01261	合子沢松森（１）遺跡	大字合子沢字松森	縄文	
9	01262	合子沢松森（２）遺跡	大字合子沢字松森	平安	青森市教育委員会2007ｂ
10	01312	合子沢松森（３）遺跡	大字合子沢字松森	平安	
11	01161	新町野遺跡	大字新町野字菅谷	縄文(前・後)・平安	青森県教育委員会1998・2000ａ、青森市教育委員会1998ａ・2001・2006ｂ
12	01210	野木（１）遺跡	大字野木字山口	平安、縄文	青森県教育委員会1998・1999・2000ｂ、青森市教育委員会1998ｂ・2001
13	01271	山口遺跡	大字野木字山口	縄文(前・後)	
14	01290	野木山口遺跡	大字野木字山口	平安	
15	01216	野木沢田遺跡	大字野木字沢田	平安	
16	01237	山吹（４）遺跡	大字大別内字山吹	縄文・平安	
17	01186	山吹（１）遺跡	大字大別内字山吹	縄文(中)	青森市教育委員会1991
18	01187	山吹（２）遺跡	大字大別内字山吹	縄文	
19	01188	山吹（３）遺跡	大字大別内字山吹	縄文	
20	01172	小館遺跡	大字小館字桜苅	中世	青森県教育委員会1983
21	01259	桜苅（２）遺跡	大字小館字桜苅	縄文	
22	01176	小牧野遺跡	大字野沢字小牧野	縄文(後)	青森市教育委員会2006ａほか
23	01170	高田城跡	大字高田字朝日山	中世	
24	01238	川瀬遺跡	大字高田字川瀬	平安	

第２節　周辺の遺跡

本遺跡群が所在する火山性台地（微高丘陵）一帯は、横内川・合子沢川・牛館川・荒川などの河川によって浸食され、それぞれ舌状台地を形成している。これらの地域には、縄文早期から中世にいたるまで数多くの遺跡が点在し、発掘調査が実施された遺跡も少なくない。

横内城跡は、昭和61年度（1986）、寺院改築（朝日山常福院）により当委員会の発掘調査が行われ、城館の縄張りを確認したほか、竪穴遺構、陶磁器、古銭などを検出している（青森市教育委員会1987）。横内（１）遺跡は、平成６年度（1994）、道路建設に伴う当委員会の発掘調査が行われ、縄文時代前期中葉～後葉の竪穴住居跡３軒を検出した。縄文時代前期中葉の竪穴住居跡はテラス状遺構を持ち、他の遺跡事例や出土遺物などから石器製作場所と推定されている。続けて調査された横内（２）遺跡では、平安時代（10世紀前半）の竪穴住居跡１軒、縄文時代（中期前半主体）の土坑26基、時期不明の溝状遺構２条が検出されている（青森市教育委員会1995）。特に、竪穴住居跡カマドからは、土師器底部を利用した転用支脚が二個並んで検出され、本調査における葛野（３）遺跡第１号竪穴住居跡カマドに類似するものとして注目されよう。

合子沢松森（２）遺跡は、平成16・17年度（2004・2005）に亘って、新幹線建設に先立つ当委員会の発掘調査が行われ、平安時代の竪穴住居跡や土師器・須恵器のほか、３重に重なる円形周溝、類例の少ない土師器合口甕棺などが出土している（青森市教育委員会2007ｂ）。

新町野遺跡は、平成７～10年度（1995～1998）に県埋蔵文化財調査センターが、平成８～10年度（1996～1998）および15～18年度（2003～2006）に当委員会が発掘調査を行い、縄文前～中期の竪穴住居跡や多量の土器・石器、平安時代の竪穴住居跡や円形周溝などを検出した（青森市教育委員会1998ａ・2001・2006ｂ）。

野木（１）遺跡は、平成７～10年度（1995～1998）に県埋蔵文化財調査センターが、平成９・10年度（1997・1998）に当委員会が発掘調査を行っている。500軒近くの竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出され、新町野・野木一帯に平安時代の大集落があったことが判明した。他にも土坑、製鉄炉、畝状遺構、水場遺構等を検出し、縄文土器・土師器・須恵器・鉄製品・土製品・石製品等の遺物が多量に出土している。特に、県内初の便所遺構やロクロ回転盤など特筆すべき発見が多く、全国的にも注目を集めている（青森市教育委員会1998ｂ・2001）。

山吹（１）遺跡は、平成２年度（1990）に当委員会が発掘調査を実施しており、石囲炉を持つ竪穴住居跡など縄文時代中期中葉の集落跡の一部を検出している。また、縄文時代前期末葉～後期前葉に至る該期の土器群が出土している（青森市教育委員会1991）。

小牧野遺跡は、昭和60年度（1985）の当委員会による調査を契機に、平成元年度（1989）に青森山田高等学校が、平成２年度（1990）以降は当委員会が平成17年度（2005）の第16次調査まで継続して学術調査を行った。縄文後期の大規模な土地造成を伴う環状列石や配石遺構、複数の土器棺墓、土製品・石製品など多量の遺構・遺物が出土している。環状列石の石組方法は“小牧野式”と呼称されており、秋田県北秋田市伊勢堂岱遺跡等においても同様の配石が部分的にみられる。これら一連の調査成果により、小牧野遺跡は平成７年（1995）、国史跡に指定された（青森市教育委員会2006ａほか）。

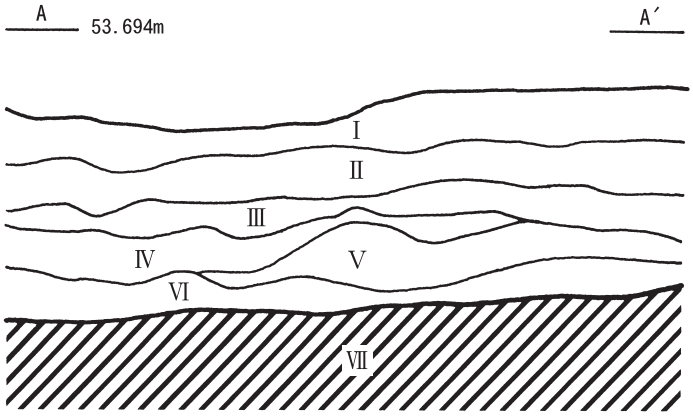
第３節　基本層序

今回の調査区は、３遺跡ともに市道金浜小畑沢線の道路沿いに占地しており、基本層序も類似している。葛野（１）遺跡ではＡＦラインの№７・８間を、葛野（２）遺跡ではＡＪラインの№104・105間を、葛野（３）遺跡ではＣＹラインの№238・239間を基本層序とした。層序の内容は以下の通りである。

（稲垣森太・野坂知広）

葛野（１）遺跡

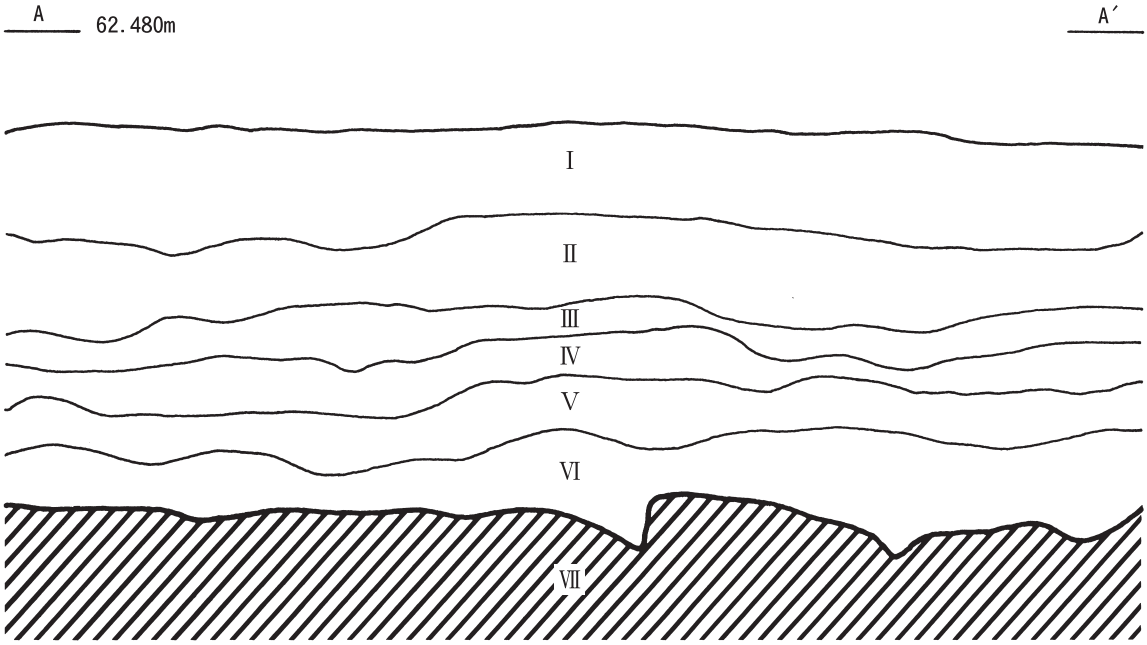
第Ⅰ層　黒褐色土（10ＹＲ２／２）　表土を一括する。
第Ⅱ層　黒褐色土（10ＹＲ２／２）　ローム粒少量、炭化物微量。
第Ⅲ層　黒褐色土（10ＹＲ２／３）　ローム粒少量。
第Ⅳ層　黒褐色土（10ＹＲ３／２）　ローム粒少量。
第Ⅴ層　黒褐色土（10ＹＲ２／２）　ローム粒微量、炭化物少量。
第Ⅵ層　暗褐色土（10ＹＲ３／３）　ローム粒少量、炭化物微量。
第Ⅶ層　褐 色 土（10ＹＲ４／６）　地山を一括する。上位に黄褐色ローム（月見野火山灰層）、下位に赤褐色粘土質ローム（大谷火山灰層）が堆積する。



第５図　葛野（１）遺跡　基本層序

葛野（２）遺跡

第Ⅰ層　黒褐色土（10ＹＲ２／３）　表土を一括する。
第Ⅱ層　黒 色 土（10ＹＲ２／１）　ローム粒微量。
第Ⅲ層　黒褐色土（10ＹＲ２／２）　ローム粒微量。
第Ⅳ層　黒褐色土（10ＹＲ２／２）　ローム粒微量。
第Ⅴ層　黒褐色土（10ＹＲ２／３）　ローム粒微量。
第Ⅵ層　暗褐色土（10ＹＲ３／３）　漸移層。
第Ⅶ層　褐 色 土（10ＹＲ４／６）　地山を一括する。上位に黄褐色ローム（月見野火山灰層）、下位に赤褐色粘土質ローム（大谷火山灰層）が堆積する。



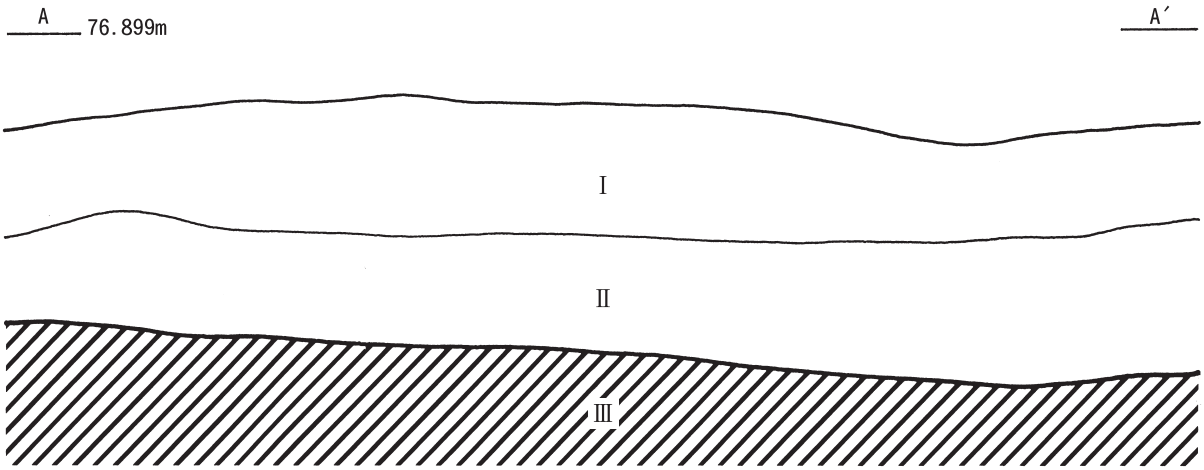
第６図　葛野（２）遺跡　基本層序

葛野（３）遺跡

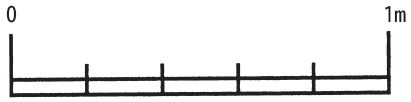
第Ⅰ層　黒 色 土（10ＹＲ1.7／１）　表土を一括する。

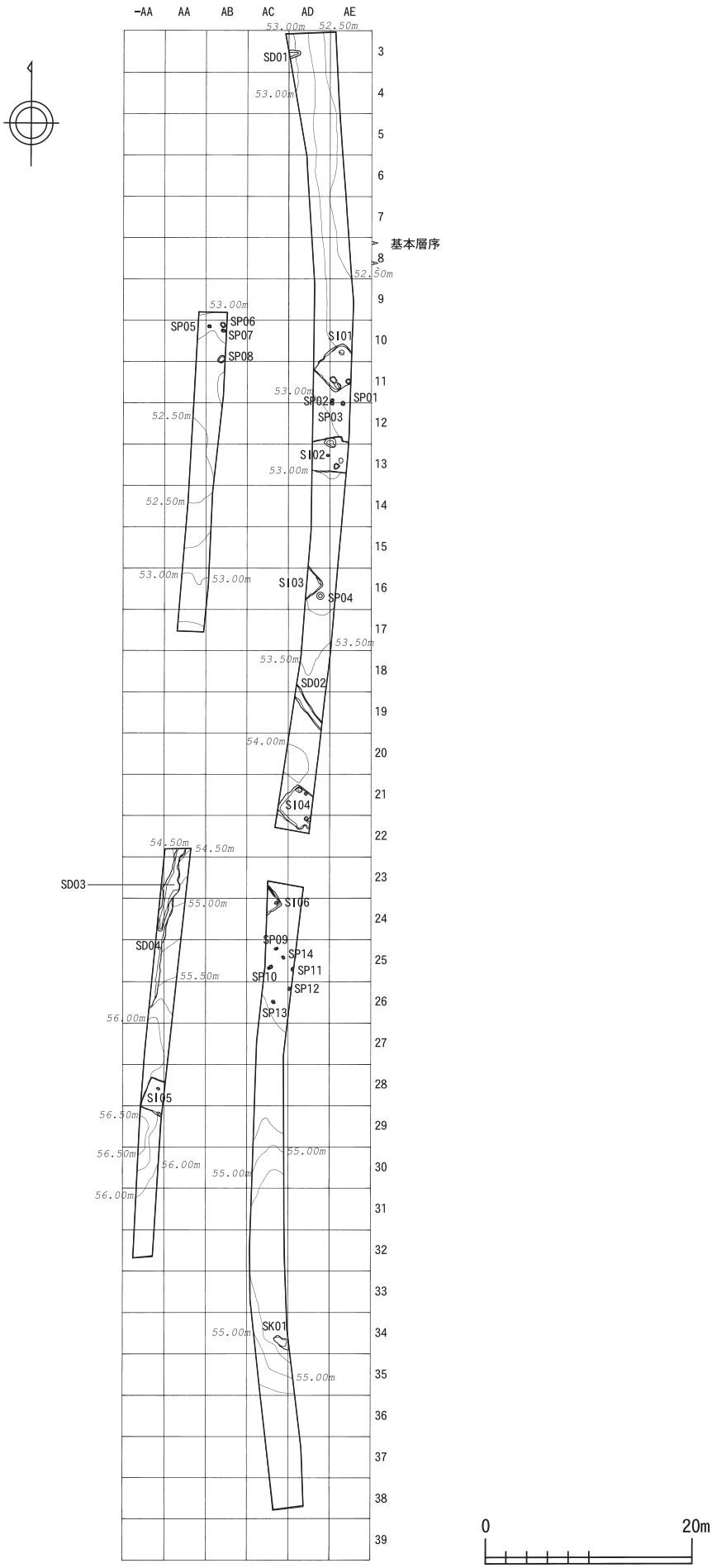
第Ⅱ層　黒褐色土（10ＹＲ２／３）　ローム粒多量、炭化物微量。

第Ⅲ層　褐 色 土（10ＹＲ４／６）　地山を一括する。上位に黄褐色ローム（月見野火山灰層）、下位に赤褐色粘土質ローム（大谷火山灰層）が堆積する。



第７図　葛野（３）遺跡　基本層序





第８図　葛野（１）遺跡　遺構配置図

第Ⅲ章　葛野（１）遺跡

第１節　検出遺構と出土遺物

１．竪穴住居跡（ＳＩ）

第１号竪穴住居跡（第９図）

ＡＤ・ＡＥ－10・11グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、住居東端部分は調査区外に広がっている。規模は長軸375㎝、短軸370㎝を測り、深さは30㎝である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。北東壁にわずかに掘り込まれた棚状遺構（幅20㎝、深さ３㎝）が検出されたが、その性格は不明である。覆土は７層に分層したが、第７層は地山ローム（第Ⅶ層）に炭化物が微量に混在する貼床と思われる。第１層～第６層は擂鉢状に堆積しており、自然堆積と判断される。

床面よりピット４基が検出され、ピット１（Pit１）は長軸48㎝×短軸45㎝×深さ23㎝、ピット２（Pit２）は長軸74㎝×短軸55㎝×深さ10㎝、ピット３（Pit３）は長軸69㎝×短軸48㎝×深さ20㎝、ピット４（Pit４）は長軸52㎝×短軸47㎝×深さ12㎝を測る。ピット２の覆土には焼土が多く含まれ、当初、本住居跡のカマド火床面の痕跡かとも思ったが、カマドは調査区外の南東壁にあるものと推定される。

出土遺物は、土師器甕が２点（第17図１・２）と砥石が２点（第17図３・４）あり、うち第17図２の土師器甕はピット３覆土より検出された。所産時期は、おおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定されよう。

第２号竪穴住居跡（第10図）

ＡＤ・ＡＥ－12・13グリッドに位置する。平面形は不整方形を呈し、東壁に張出部を有する。東西両端は調査区外に広がっており、規模は長軸342㎝、短軸338㎝、深さ20㎝を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。覆土は10層に分層したが、第９層は地山ローム（第Ⅶ層）に黒褐色土の混在する貼床と思われ、第10層は木根などによる撹乱と推定される。第１層～第８層は自然堆積と考えられる。

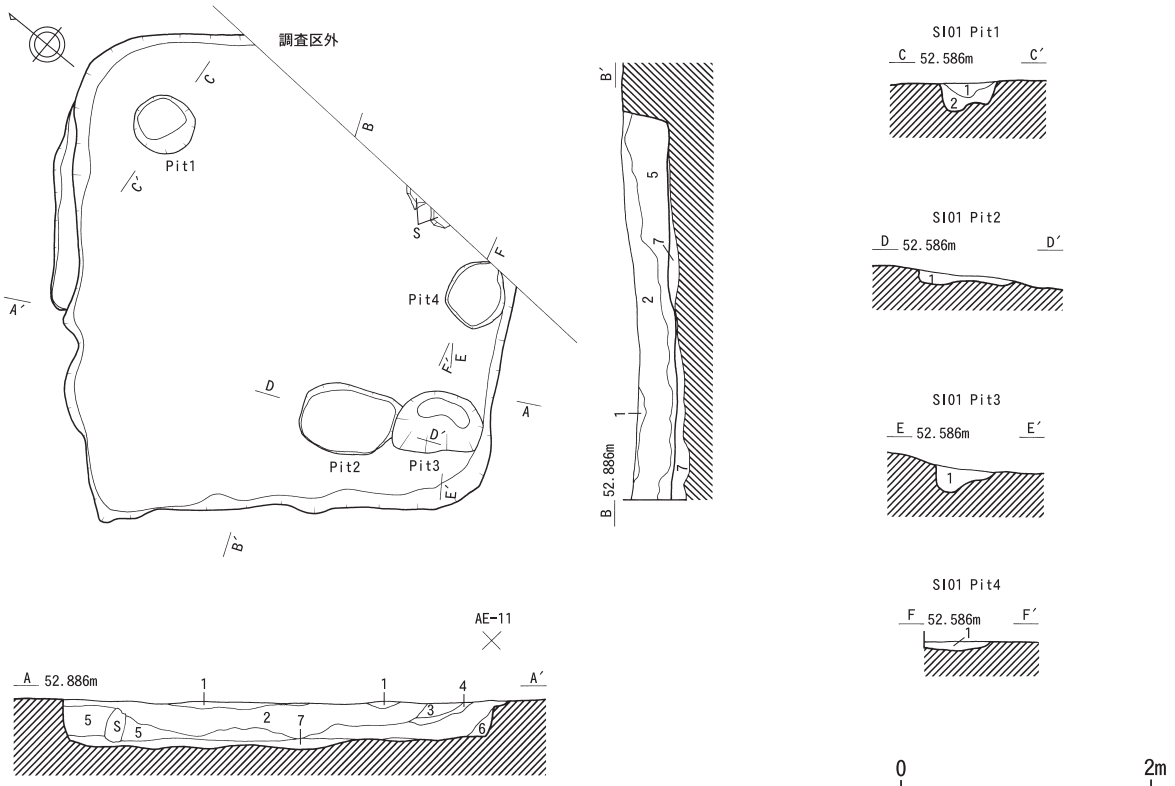
床面よりピット３基が検出され、ピット１（Pit１）は長軸56㎝×短軸50㎝×深さ13㎝、ピット２（Pit２）は長軸34㎝×短軸19㎝×深さ８㎝、ピット３（Pit３）は長軸108㎝×短軸87㎝×深さ21㎝を測る。また、床面東側よりカマド火床面と推定される焼土痕を検出した。袖部の痕跡などは確認されず、カマドの様相は不明である。

出土遺物は、ロクロ整形の明瞭な土師器甕が１点（第17図５）あり、所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定されよう。

第３号竪穴住居跡（第11図）

ＡＤ－16グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、東側の大部分が調査区外に広がっている。規模は長軸220㎝、短軸210㎝を測り、深さは45㎝である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。カマドなどは、調査区外に位置しているものと推定される。覆土は19層に分層したが、第19層は地山ローム（第Ⅶ層）に黒色土の混在する貼床と思われる。第１層～第18層は自然堆積と推定される。

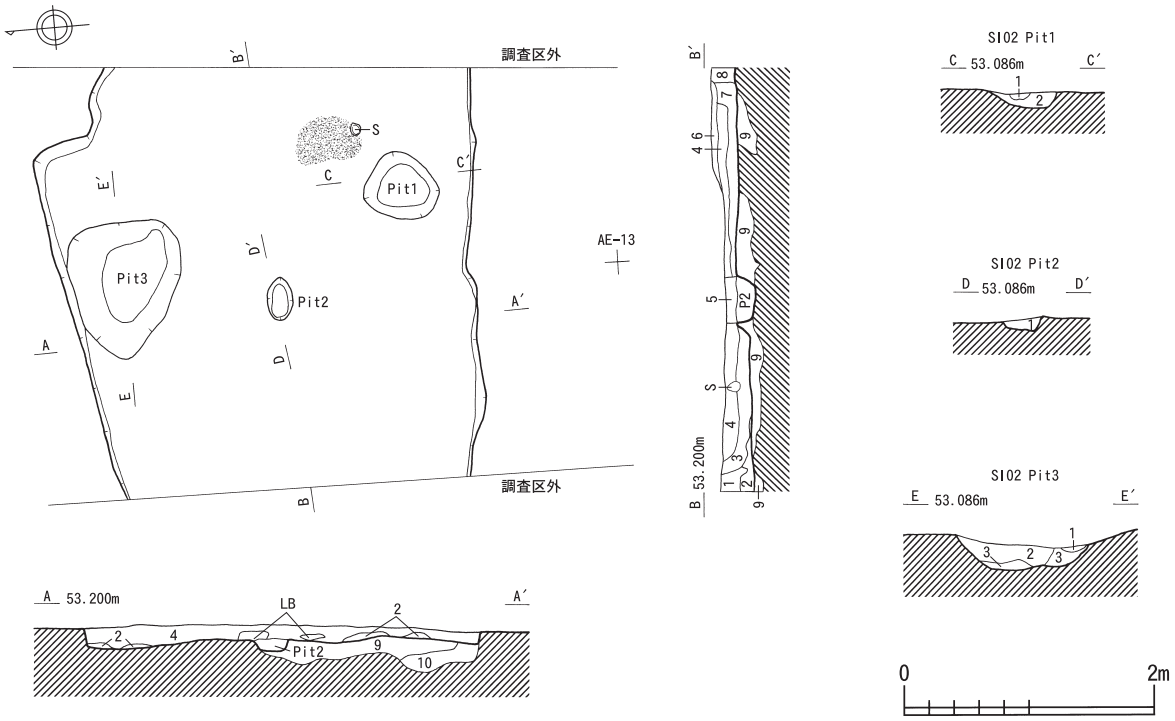
出土遺物はないが、住居の形態や周辺遺構などから、所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀前半）



第１号竪穴住居跡（SI01）
第１層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒少量
第２層　黒　色　土（10YR2/1）　ローム粒微量、焼土粒微量
第３層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒微量、炭化物微量
第４層　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒微量
第５層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒微量、炭化物微量
第６層　褐　色　土（10YR4/6）　ローム主体
第７層　褐　色　土（10YR4/6）　貼床、炭化物微量

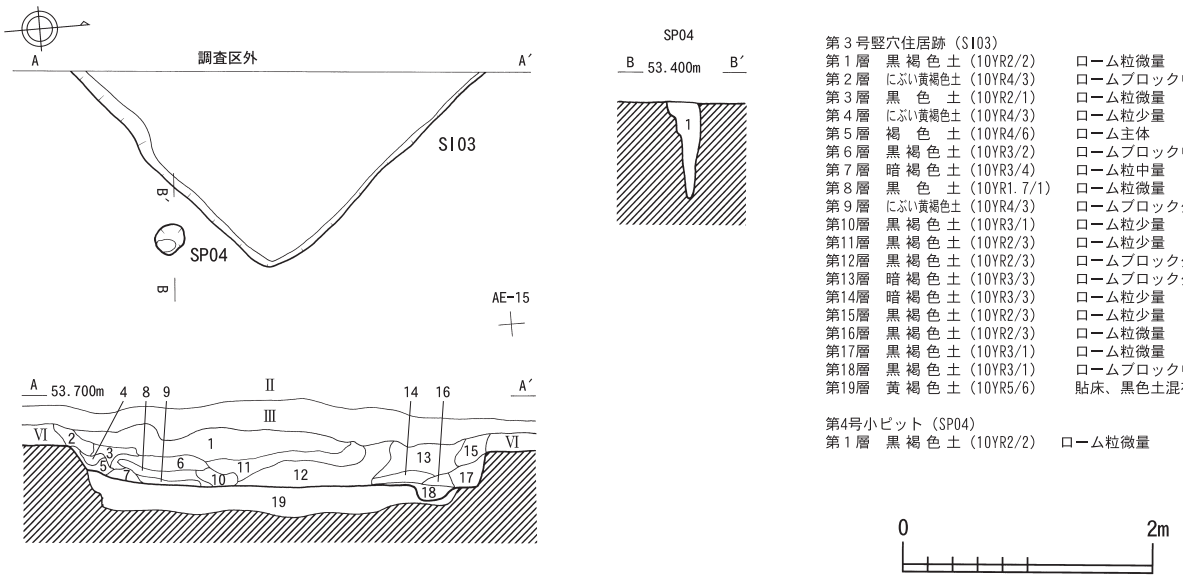
SI01Pit1
第１層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒微量、炭化物微量
第２層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　炭化物微量
SI01Pit2
第１層　暗赤褐色土（5YR3/4）　焼土ブロック中量、炭化物微量
SI01Pit3
第１層　暗褐色土（7.5YR3/4）　焼土微量、炭化物微量
SI01Pit4
第１層　褐　色　土（7.5YR4/4）　焼土ブロック中量、炭化物微量

第９図　葛野（１）遺跡　SI01



第２号竪穴住居跡（SI02）
第１層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒微量
第２層　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒中量
第３層　黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒微量
第４層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒少量
第５層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒中量
第６層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量
第７層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒微量
第８層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒微量
第９層　褐　色　土（10YR4/6）　貼床、黒褐色土混在
第10層　暗褐色土（10YR3/3）　木根か、ローム粒微量
SI02Pit1
第１層　褐　色　土（7.5YR4/4）　焼土ブロック中量、炭化物微量
第２層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量、焼土微量
SI02Pit2
第１層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量
SI02Pit3
第１層　極赤褐色土（5YR2/3）　焼土ブロック多量
第２層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒微量
第３層　暗褐色土（7.5YR3/4）　ローム粒微量、炭化物微量

第10図　葛野（１）遺跡　SI02



第11図　葛野（１）遺跡　SI03

に比定されよう。

第４号竪穴住居跡（第12図）

ＡＣ・ＡＤ－21・22グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、住居東端が調査区外に広がっている。規模は長軸335cm、短軸313cmを測り、深さは50cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。また、北西壁付近の覆土上層より炭化木材が検出されている。覆土は10層に分層したが、住居の半域以上に現代盛土と思われる撹乱が見られる。第１層～第10層はおおむね自然堆積と推定されよう。第５層およびカマド覆土第９層にはＢ－Ｔｍ火山灰が堆積しており、住居廃絶後、一定期間を経てから火山灰が降り積もったことが分かる。

床面よりピット３基が検出され、ピット１（Pit１）は長軸40cm×短軸36cm×深さ12cm、ピット２（Pit２）は長軸30cm×短軸28cm×深さ12cm、ピット３（Pit３）は長軸52cm×短軸47cm×深さ15cmを測る。

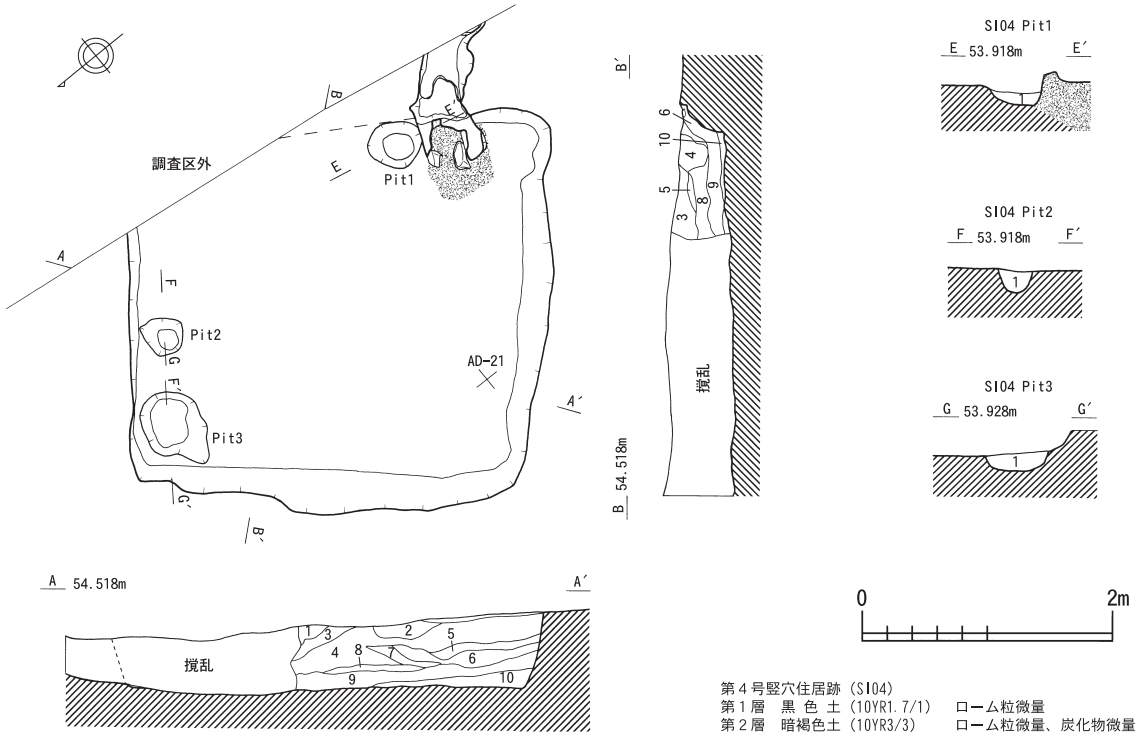
カマドは南東壁で確認され、主軸は南東方向（Ｎ－135°－Ｅ）にある。煙道は半地下式で構築され、最大長90cm、最大幅42cmを測る。火床面周辺に袖石と思われる礫が残存していた。

出土遺物は、土師器甕が４点（第17図６～９）、製塩土器が１点（第17図10）、流れ込みと思われる縄文土器が１点（第17図11）あり、うち第17図６・８・９はカマド周辺からの出土である。製塩土器は底部に柾目痕が観察され、いわゆる白砂式製塩土器（北林1969）と呼称されているものである。Ｂ－Ｔｍ火山灰の堆積状況などから、所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀初頭～前葉）に比定されよう。

第５号竪穴住居跡（第14図）

－ＡＡ－28・29グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、東側部分が調査区外に広がっている。規模は長軸315cm、短軸185cmを測り、深さは30cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。覆土は６層に分層したが、第６層以外は自然堆積と推定される。

床面よりピット２基が検出され、ピット１（Pit１）は長軸38cm×短軸25cm×深さ22cm、ピット２（Pit２）は長軸34cm×短軸32cm×深さ５cmを測る。カマド等は検出されず、調査区外に残されているものと思われる。出土遺物はないが、所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定されよう。



第４号竪穴住居跡（SI04）

第１層	黒 色 土（10YR1.7/1）	ローム粒微量
第２層	暗褐色土（10YR3/3）	ローム粒微量、炭化物微量
第３層	暗褐色土（10YR3/4）	ローム粒少量、炭化物微量
第４層	黒褐色土（10YR2/3）	ローム粒微量、炭化物微量
第５層	黄褐色土（10YR5/6）	B-Tm主体
第６層	暗褐色土（10YR3/3）	ローム粒微量、炭化物微量
第７層	褐 色 土（7.5YR4/4）	焼土ブロック多量
第８層	黒褐色土（10YR2/2）	ローム粒微量
第９層	黒褐色土（10YR2/2）	ローム混在
第10層	黒 色 土（10YR2/1）	ロームブロック少量

SI04Pit1

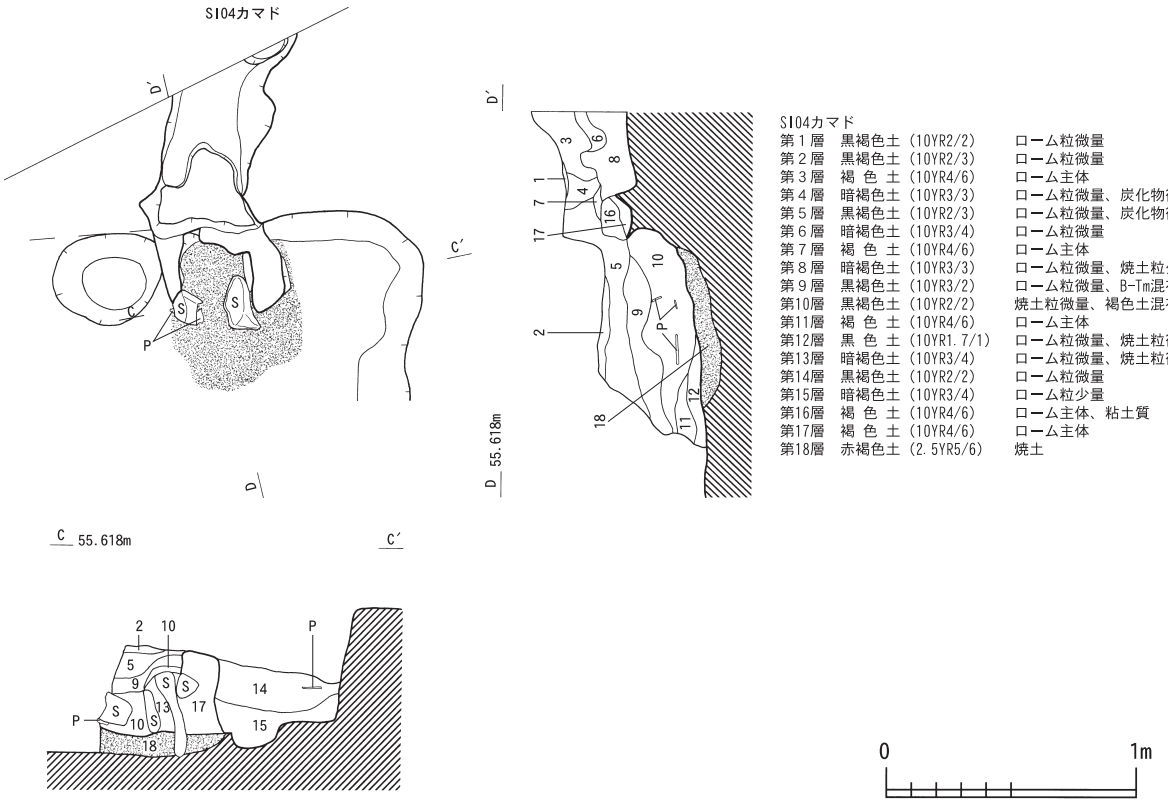
第１層	黒褐色土（10YR2/3）	ローム粒微量、焼土粒微量

SI04Pit2

第１層	黒褐色土（10YR2/2）	ロームブロック少量

SI04Pit3

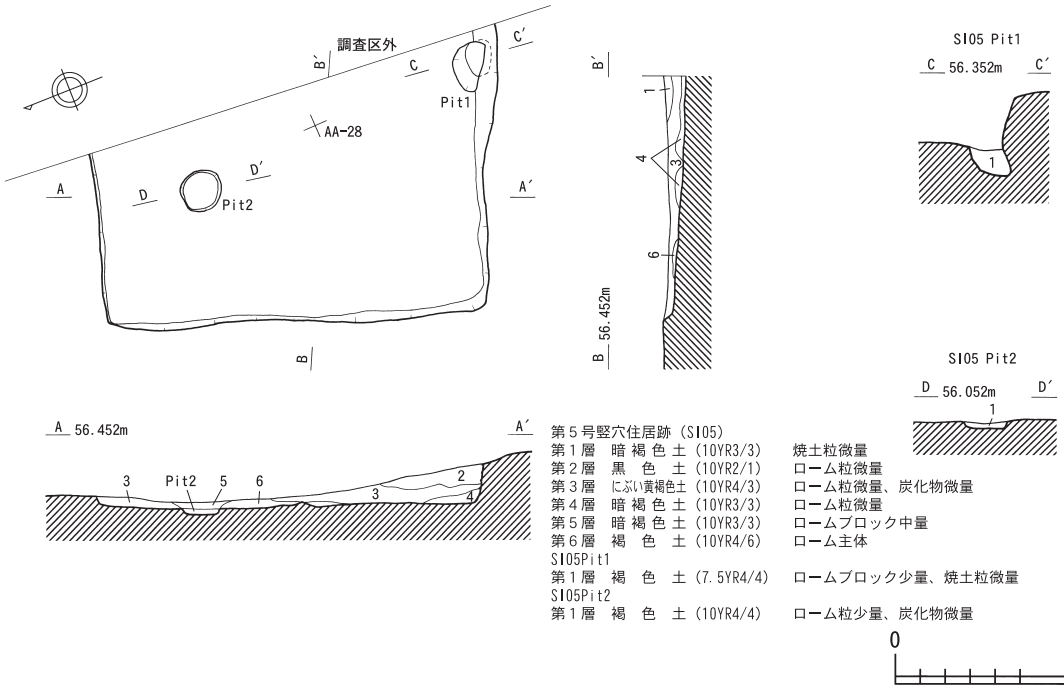
第１層	黒褐色土（10YR2/2）	ロームブロック中量



SI04カマド

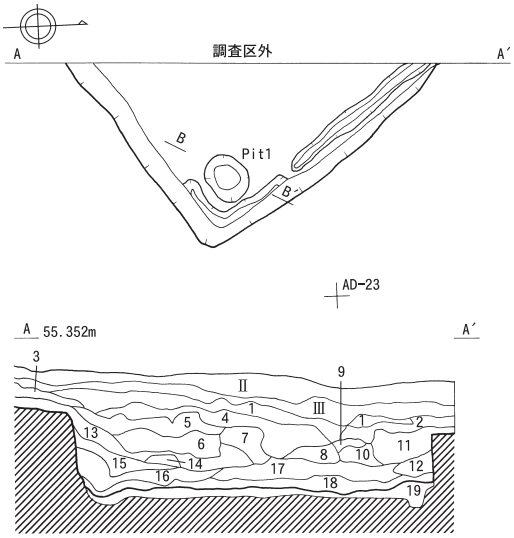
第１層	黒褐色土（10YR2/2）	ローム粒微量
第２層	黒褐色土（10YR2/3）	ローム粒微量
第３層	褐 色 土（10YR4/6）	ローム主体
第４層	暗褐色土（10YR3/3）	ローム粒微量、炭化物微量
第５層	黒褐色土（10YR2/3）	ローム粒微量、炭化物微量
第６層	暗褐色土（10YR3/4）	ローム粒微量
第７層	褐 色 土（10YR4/6）	ローム主体
第８層	暗褐色土（10YR3/3）	ローム粒微量、焼土粒少量
第９層	黒褐色土（10YR3/2）	ローム粒微量、B-Tm混在
第10層	黒褐色土（10YR2/2）	焼土粒微量、褐色土混在
第11層	褐 色 土（10YR4/6）	ローム主体
第12層	黒 色 土（10YR1.7/1）	ローム粒微量、焼土粒微量
第13層	暗褐色土（10YR3/4）	ローム粒微量、焼土粒微量
第14層	黒褐色土（10YR2/2）	ローム粒微量
第15層	暗褐色土（10YR3/4）	ローム粒少量
第16層	褐 色 土（10YR4/6）	ローム主体、粘土質
第17層	褐 色 土（10YR4/6）	ローム主体
第18層	赤褐色土（2.5YR5/6）	焼土

第12図　葛野（１）遺跡　SI04



第５号竪穴住居跡（SI05）
第１層　暗褐色土（10YR3/3）　焼土粒微量
第２層　黒　色　土（10YR2/1）　ローム粒微量
第３層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒微量、炭化物微量
第４層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒微量
第５層　暗褐色土（10YR3/3）　ロームブロック中量
第６層　褐　色　土（10YR4/6）　ローム主体
SI05Pit1
第１層　褐　色　土（7.5YR4/4）　ロームブロック少量、焼土粒微量
SI05Pit2
第１層　褐　色　土（10YR4/4）　ローム粒少量、炭化物微量

第13図　葛野（1）遺跡　SI05



SI06 Pit1
B 54.252m

第６号竪穴住居跡（SI06）
第１層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒少量
第２層　黒褐色土（10YR2/2）　撹乱か、現代遺物混在
第３層　黒　色　土（10YR1.7/1）　ローム粒微量、焼土粒微量
第４層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒微量、炭化物微量
第５層　暗褐色土（10YR3/3）　ロームブロック中量
第６層　黒褐色土（10YR2/3）　ロームブロック中量
第７層　黒褐色土（10YR3/2）　ロームブロック中量
第８層　黒褐色土（10YR2/2）　B-Tm混在
第９層　暗褐色土（10YR3/4）　ロームブロック中量
第10層　黒褐色土（10YR3/2）　B-Tm混在
第11層　黒褐色土（10YR2/3）　ロームブロック多量
第12層　黒　色　土（10YR2/1）　ローム粒微量
第13層　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒少量、炭化物微量
第14層　黒褐色土（10YR2/2）　ロームブロック多量
第15層　黒褐色土（10YR2/3）　B-Tm混在
第16層　黒褐色土（10YR2/2）　ロームブロック微量
第17層　黒　色　土（10YR2/1）　ローム粒微量、炭化物微量
第18層　黒　色　土（10YR2/1）　ロームブロック中量
第19層　褐　色　土（10YR4/6）　貼床、黒色土混在
SI06Pit1
第１層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒微量、炭化物微量
第２層　黒褐色土（10YR2/3）　焼土粒多量
第３層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　暗褐色土混在

第14図　葛野（1）遺跡　SI06

第６号竪穴住居跡（第14図）

ＡＣ－23・24グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、住居西側の大部分が調査区外に広がっている。規模は長軸205㎝、短軸150㎝を測り、深さは65㎝である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、北東壁床面に壁溝が確認された。覆土は19層に分層したが、第19層は地山ローム（第Ⅶ層）に黒色土の混在する貼床と推定される。第１層～第18層は自然堆積と思われ、第８層・第10層・第15層には、Ｂ－Ｔｍ火山灰が混在している。

床面よりピット１基が検出され、ピット１（Pit１）は長軸37㎝×短軸31㎝×深さ11㎝を測る。カマドは検出されず、調査区外に残されているものと思われる。

出土遺物は、土師器甕が２点（第18図12・13）、須恵器壺が１点（第18図14）ある。Ｂ－Ｔｍ火山灰の堆積状況などから、所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀初頭～前葉）に比定されよう。

２．土坑（ＳＫ）

第１号土坑（第15図）

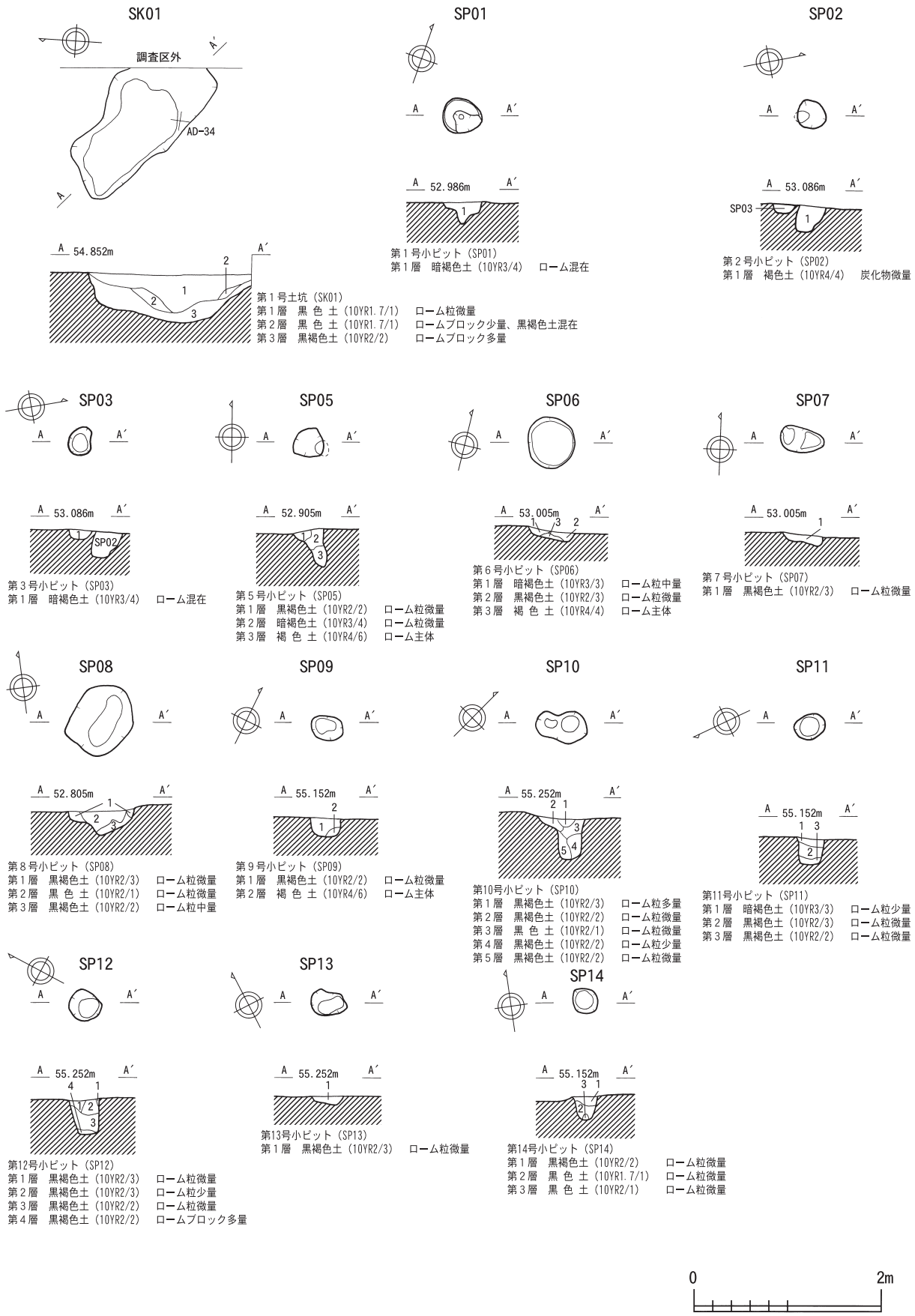
ＡＣ・ＡＤ－34グリッドに位置する。平面形はおおむね不整長方形を呈し、東端が調査区外に広がっている。壁面は急角度に立ち上がり、規模は長軸175㎝、短軸93㎝、深さ50㎝を測る。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。

３．小ピット（ＳＰ）

本遺跡からは柱穴状の小ピットが14基検出された（第15図）。出土遺物はなく、その所産時期は不明である。配列の明確なものも確認できなかった。計測値等は観察表に纏めた（第２表）。

第２表　葛野（１）遺跡小ピット観察一覧

遺構番号	図版番号	位置(グリッド)	平　面　形	規　模（㎝）		
				長軸	短軸	深さ
ＳＰ01	第15図	ＡＥ－12	楕円形	40	35	21
ＳＰ02	第15図	ＡＥ－11	不整円形	30	29	27
ＳＰ03	第15図	ＡＥ－12	不整楕円形	31	23	11
ＳＰ04	第15図	ＡＤ－16	楕円形	25	24	76
ＳＰ05	第15図	ＡＢ－10	不整方形	32	30	40
ＳＰ06	第15図	ＡＢ－10	楕円形	53	50	8
ＳＰ07	第15図	ＡＢ－10	長楕円形	46	26	9
ＳＰ08	第15図	ＡＢ－10	不整方形	75	62	25
ＳＰ09	第15図	ＡＣ－25	不整楕円形	32	26	19
ＳＰ10	第15図	ＡＣ－25	不整形	54	34	43
ＳＰ11	第15図	ＡＤ－25	不整楕円形	33	25	28
ＳＰ12	第15図	ＡＤ－26	隅丸方形	34	32	35
ＳＰ13	第15図	ＡＣ－26	不整形	35	25	10
ＳＰ14	第15図	ＡＣ－25	隅丸方形	27	26	25



第15図　葛野（１）遺跡　SK・SP

４．溝状遺構（ＳＤ）

第１号溝状遺構（第16図）

ＡＤ－３グリッドに位置する。平面形は舌状を呈し、西側部分は調査区外に広がっている。規模は最大長1.1m、最大幅0.8mを測り、深さは0.3mである。壁面はゆるやかに立ち上がり、長軸方向は西（Ｎ－110°－Ｗ）にある。覆土は３層に分層したが、おおむね自然堆積と思われる。出土遺物はないが、層序観察を参考にすると、竪穴住居跡と同じ所産時期が推定されよう。

第２号溝状遺構（第16図）

ＡＤ－18・19グリッドに位置する。平面形は細長い直線状を呈し、東西両側が調査区外に延びている。規模は最大長3.9m、最大幅0.75mを測り、深さは0.6mである。壁面は急角度に立ち上がり、長軸方向は北西（Ｎ－32°－Ｗ）にある。覆土は７層に分層したが、底面に近い第５層にＢ－Ｔｍ火山灰が堆積しており、本遺構の廃絶直後に降下したものと考えられる。出土遺物はないが、所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀初頭～前葉）に比定されよう。

第３号・第４号溝状遺構（第16図）

－ＡＡ・ＡＡ－22～26グリッドに位置する。第３号溝状遺構が古く、第４号溝状遺構が新しい。平面形は不整形を呈すがおおむね直線状であり、北側が調査区外に延びている。規模は第４号溝状遺構が長い。第３号溝状遺構は最大長8.2m、最大幅1.6mを測り、深さは0.45mである。第４号溝状遺構は最大長15.4m、最大幅1.4mを測り、深さは0.25mである。両溝状遺構は、断面形に差異があり、直線的で急角度に立ち上がる第３号溝状遺構と、ゆるやかに立ち上がる第４号溝状遺構の相違が明瞭である。ともに長軸方向は北（Ｎ－15°－Ｅ）にある。覆土は４～７層に分層したが、おおむね自然堆積と思われる。出土遺物はなく、竪穴住居跡とも離れた位置にあるため、その所産時期は不明である。

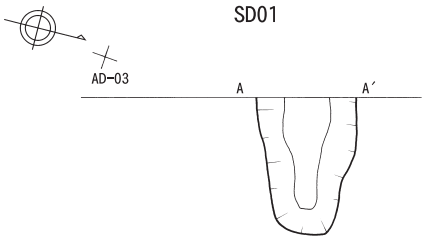
第２節　遺構外出土遺物

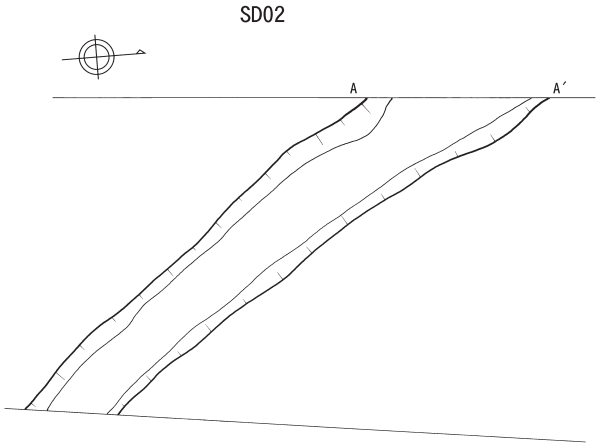
１．縄文土器（第18図19～25）

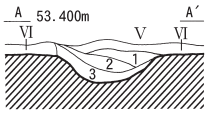
破片資料がほとんどで、摩滅の著しい資料もある。詳細は観察表（第３表）に纏めたが、縄文時代前期の土器（第18図19～21・23～25）と縄文時代晩期の土器（第18図22）に大きく分類することができる。第18図19～21・23～25はすべて胎土に繊維の混入する土器であり、縄文時代前期末葉の円筒下層d_1～d_2式に帰属する資料である。第18図22は縄文時代晩期末葉の大洞C_2式～Ａ式期前後の資料であろう。

第18図19～21・23・24は円筒形の深鉢形土器の胴部資料と思われ、第18図25は口縁部資料である。比較的残りのよい第18図25は、口縁部にＬＲ縄文を横位・斜位・縦位に押捺し、胴部にはいわゆる木目状撚糸文と呼ばれる単軸絡条体第１Ａ類が縦位に回転施文される特徴的な土器である。第18図19～21・23・24もほぼ同様の所産時期が推定される。

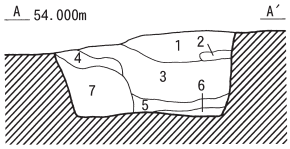
第18図22は小型の深鉢形土器の底部資料と思われ、底部にはケズリ調整の痕跡が残り、胴部にはＬＲ斜縄文が施文される。



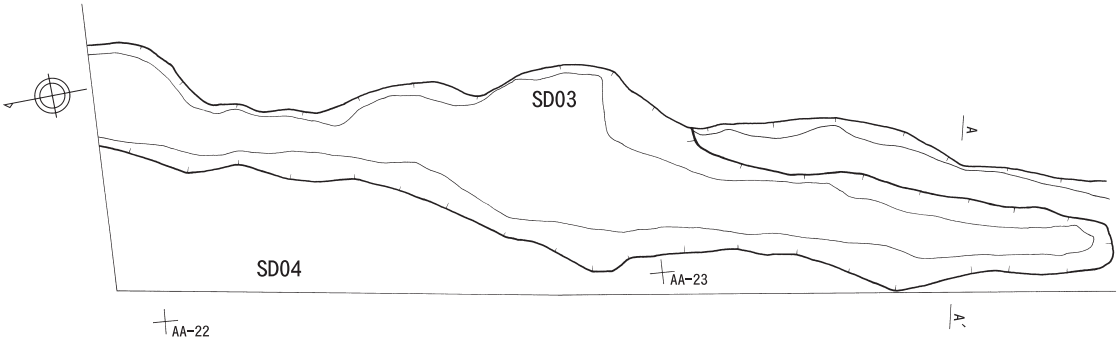


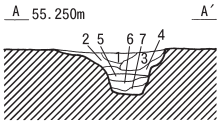


第１号溝状遺構（SD01）
第１層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム少量、炭化物微量
第２層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒微量
第３層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒少量

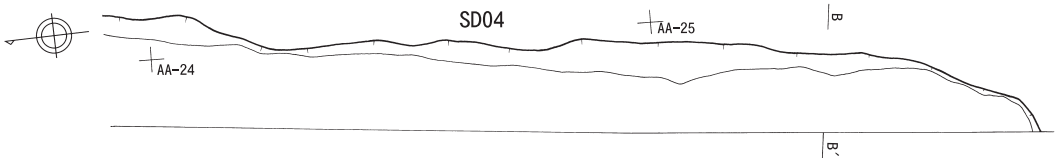


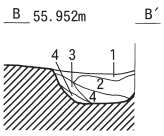
第２号溝状遺構（SD02）
第１層　黒 褐 色 土（10YR2/2）　ロームブロック中量
第２層　黒　色　土（10YR1.7/1）　ローム粒微量
第３層　黒　色　土（10YR2/1）　ローム粒微量
第４層　暗 褐 色 土（10YR3/3）　ローム粒中量
第５層　にぶい黄褐色土（10YR5/4）　B-Tm主体
第６層　黒 褐 色 土（10YR2/3）　ロームブロック少量
第７層　黄 褐 色 土（10YR5/6）　ローム主体





第３号溝状遺構（SD03）
第１層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒少量
第２層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒少量
第３層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒中量、炭化物微量
第４層　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒少量
第５層　褐 色 土（10YR4/4）　ローム主体
第６層　褐 色 土（10YR4/4）　暗褐色土混在
第７層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム混在





第４号溝状遺構（SD04）
第１層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒微量
第２層　黒 色 土（10YR2/1）　ローム粒微量
第３層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒少量
第４層　褐 色 土（10YR4/4）　ローム粒微量

第16図　葛野（１）遺跡　SD

２．土師器（第18図15）

土師器甕の口縁部資料が１点出土している。小型の土師器甕の口縁部～胴部片であり、内外面ともにヘラナデ調整である。所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定されよう。

３．須恵器（第18図16・17・18）

須恵器甕の胴部資料が２点、須恵器壺の底部資料が１点出土している。第18図16・17は、ともに器面の色調が淡い赤褐色を呈し、焼成不良により土師質土器となったものであろう。外面には叩目痕が明瞭に残っており、比較的大型の須恵器甕の胴部片と思われる。第18図18は須恵器壺の底部片であり、底部にケズリ調整の痕跡が残っている。所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定されよう。

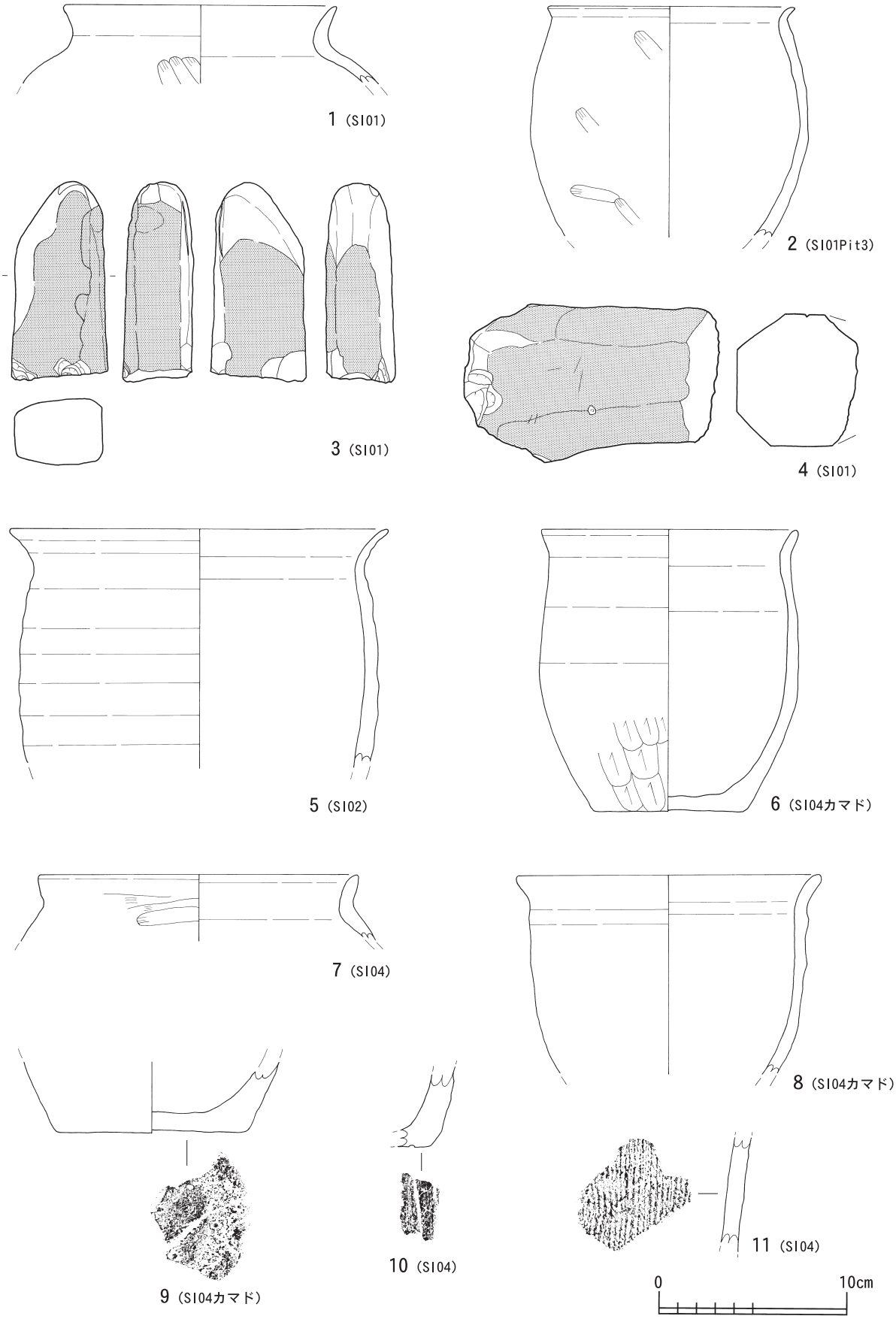
（野坂　知広）

第３表　葛野（１）遺跡出土遺物観察一覧

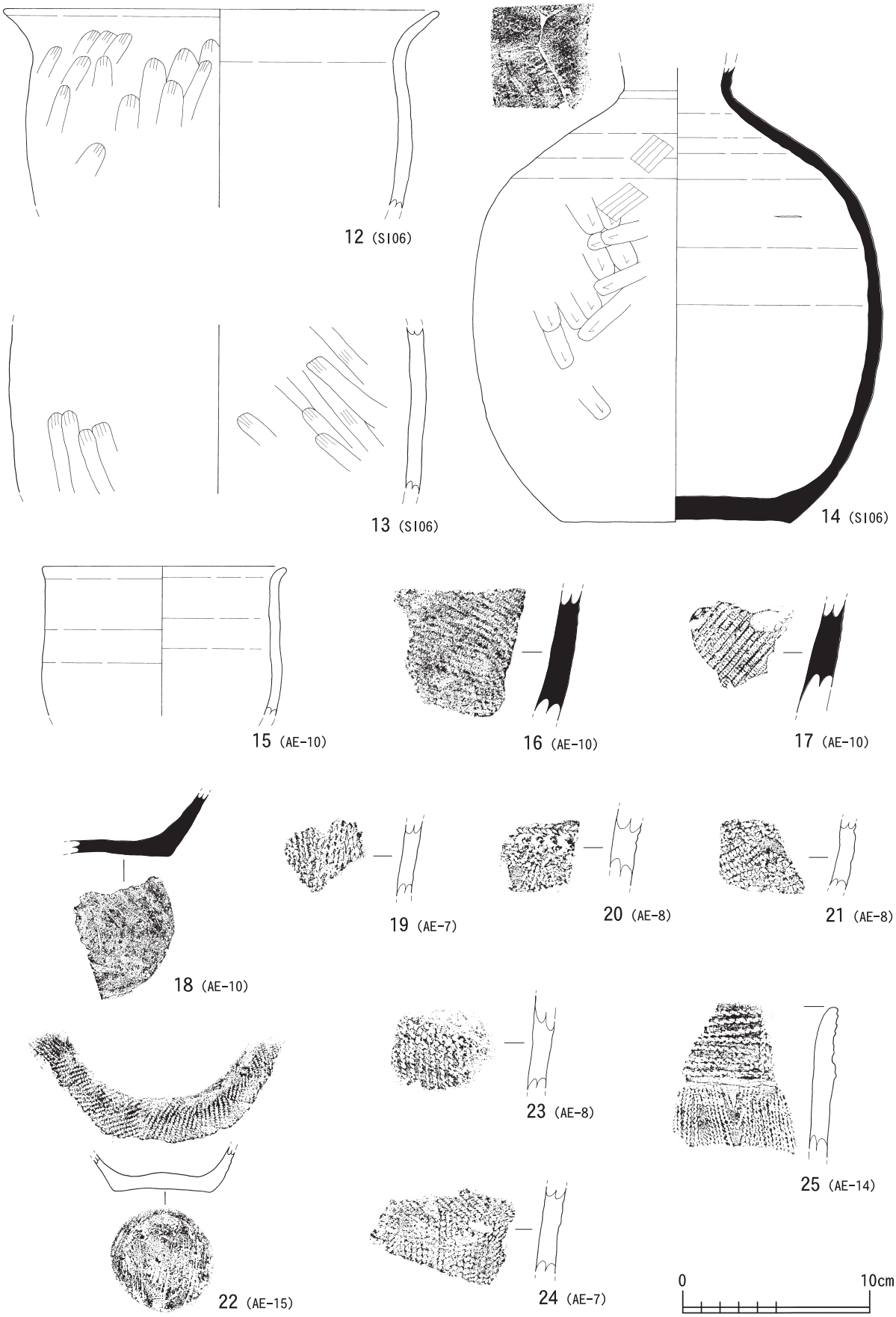
図版番号	器　種	出土位置	計測値（cm）			外面調整	内面調整	底部調整	時　期
			口径	底径	器高				
第17図１	土師器甕	ＳＩ01	14.4	—	4.2	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半
第17図２	土師器甕	ＳＩ01pit３	13.1	—	12.3	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半
第17図５	土師器甕	ＳＩ02	20.1	—	12.7	ロクロ	ロクロ	—	10世紀前半
第17図６	土師器甕	ＳＩ04カマド	13.5	7.9	15.0	ヘラナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	10世紀初頭～前葉
第17図７	土師器甕	ＳＩ04	16.9	—	3.5	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉
第17図８	土師器甕	ＳＩ04カマド	16.1	—	10.6	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉
第17図９	土師器甕	ＳＩ04カマド	—	10.0	3.7	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	10世紀初頭～前葉
第17図10	製塩土器	ＳＩ04	—	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	柾目痕	10世紀初頭～前葉
第18図12	土師器甕	ＳＩ06	23.2	—	10.6	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉
第18図13	土師器甕	ＳＩ06	—	—	9.0	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉
第18図14	須恵器壺	ＳＩ06	—	12.2	24.4	叩目痕、ヘラケズリ	ロクロ	ヘラケズリ	10世紀初頭～前葉
第18図15	土師器甕	ＡＥ－10	12.9	—	8.0	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半
第18図16	須恵器甕	ＡＥ－10	—	—	—	叩目痕	ケズリ	—	10世紀前半
第18図17	須恵器甕	ＡＥ－10	—	—	—	叩目痕	ケズリ	—	10世紀前半
第18図18	須恵器壺	ＡＥ－10	—	—	3.3	ヘラケズリ	ロクロ	ヘラケズリ	10世紀前半

図版番号	種　別	出土位置	計測値（cm）			石　質	時　期	備　考
			最大長	最大幅	最大厚			
第17図３	砥石	ＳＩ01	10.4	4.8	3.5	凝灰岩	10世紀前半	擦痕四面
第17図４	砥石	ＳＩ01	13.5	8.4	6.3	凝灰岩	10世紀前半	擦痕多面（推定八面）

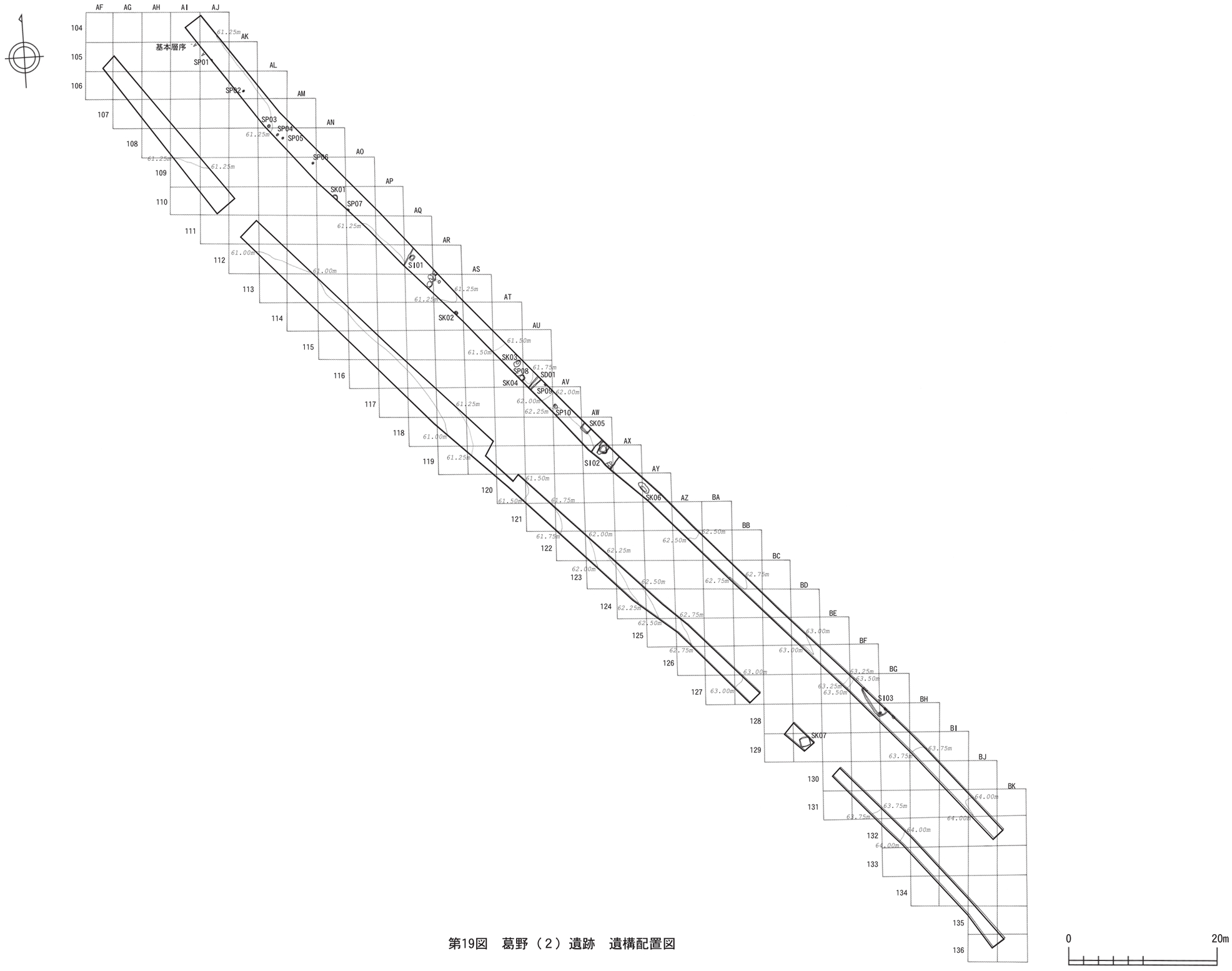
図版番号	器　種	出土位置	部　位	文　様	時　期	備　考
第17図11	縄文土器	ＳＩ04	胴部	Ｒ単軸絡条体第１類（斜位）	前期末葉	繊維混入
第18図19	縄文土器	ＡＥ－７	胴部	単軸絡条体第１Ａ類（縦位）	前期末葉	繊維混入
第18図20	縄文土器	ＡＥ－８	胴部	刺突（半裁竹管状工具）、羽状縄文（結束第一種）	前期末葉	繊維混入
第18図21	縄文土器	ＡＥ－８	胴部	Ｌ結節、ＲＬ縄文	前期末葉	繊維混入
第18図22	縄文土器	ＡＥ－15	底部	ＬＲ縄文	晩期末葉	
第18図23	縄文土器	ＡＥ－８	胴部	Ｌ単軸絡条体第１類（縦位）	前期末葉	繊維混入
第18図24	縄文土器	ＡＥ－７	胴部	羽状縄文（結束第一種）	前期末葉	繊維混入
第18図25	縄文土器	ＡＥ－14	口縁部	口縁部：ＬＲ押捺（横・斜・縦）　胴部：単軸絡条体第１Ａ類（縦位）	前期末葉	繊維混入



第17図　葛野（1）遺跡　SI出土遺物



第18図　葛野（１）遺跡　SI・遺構外出土遺物



第19図　葛野（２）遺跡　遺構配置図

第Ⅳ章　葛野（２）遺跡

第１節　検出遺構と出土遺物

１．竪穴住居跡（ＳＩ）

第１号竪穴住居跡（第20図）

ＡＱ・ＡＲ－112・113グリッドに位置する。平面形は方形を呈すものと思われ、住居の東西両側が調査区外に広がっている。規模は長軸455㎝、短軸235㎝を測り、深さは40㎝である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。覆土は７層に分層したが、自然堆積と推定される。

床面よりピット３基が検出され、ピット１（Pit１）は長軸46㎝×短軸18㎝×深さ10㎝、ピット２（Pit２）は長軸74㎝×短軸62㎝×深さ10㎝、ピット３（Pit３）は長軸65㎝×短軸31㎝×深さ55㎝を測る。

カマドは南東壁で確認され、主軸は南東方向（Ｎ－125°－Ｅ）にある。煙道は地下式で構築され、最大長191㎝、最大幅96㎝を測る。袖部には袖石が見られる。火床面直上からは、楕円形の自然礫と被せるように逆位に置かれた土師器坏（第25図３）が検出され、転用支脚と思われる。土師器坏の内部に置かれた自然礫は、転用支脚が動かないように固定させるためのものであろう。また、カマドの南西隣にも焼土痕が確認され、その性格は判然としないが、カマド周辺に付属施設のあった可能性がある。

出土遺物は、土師器甕が２点（第25図１・２）と土師器坏が１点（第25図３）ある。所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀初頭～前葉）に比定されよう。

第２号竪穴住居跡（第21図）

ＡＷ・ＡＸ－118・119グリッドに位置する。平面形は方形を呈すものと思われ、住居の東西両側が調査区外に広がっている。規模は長軸360㎝、短軸221㎝を測り、深さは20㎝である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は確認されなかった。覆土は11層に分層したが、うち第１層～第４層・第６層は土坑２（ＳＫ２）の覆土であり、第７層は土坑１（ＳＫ１）の覆土である。第５層・第８層～第11層は自然堆積と思われる。

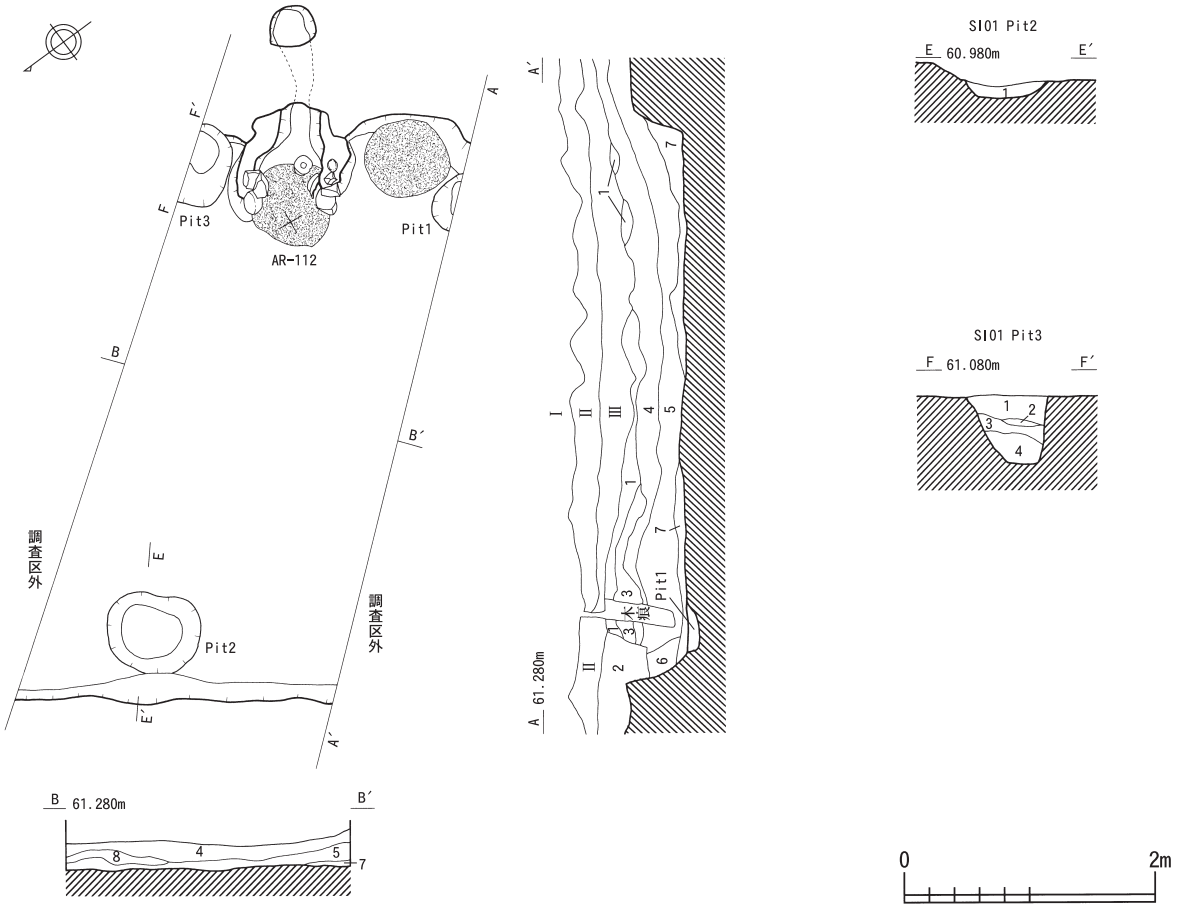
床面より土坑２基、ピット２基が検出され、土坑１（ＳＫ１）は長軸176㎝×短軸136㎝×深さ43㎝、土坑２（ＳＫ２）は長軸122㎝×短軸101㎝×深さ36㎝、ピット（Pit１）は長軸25㎝×短軸24㎝×深さ10㎝、ピット２（Pit２）は長軸36㎝×短軸14㎝×深さ22㎝を測る。土坑２は住居や土坑１の覆土を切るように掘られており、構築時期も新しいものと推定される。

カマドは南東壁で確認され、主軸は南東方向（Ｎ－130°－Ｅ）にある。煙道部分は検出されず、おそらく半地下式で構築されたものが上部を削平されたのであろう。袖部周辺には袖石や粘土が見られる。

出土遺物は、土師器甕が４点（第25図４～７）あり、第25図４～６はカマド周辺からの出土である。所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定されよう。

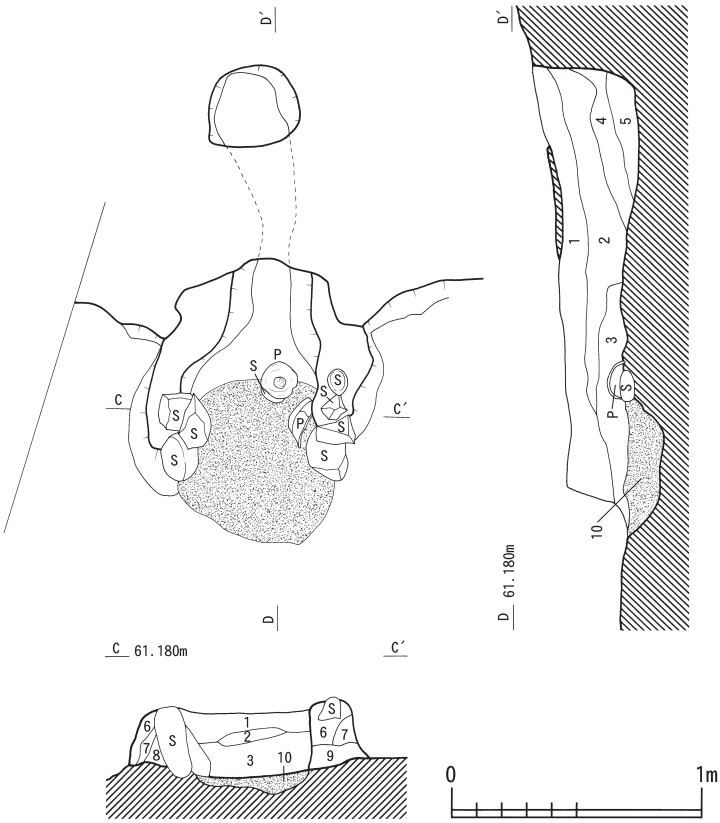
第３号竪穴住居跡（第22図）

ＢＦ・ＢＧ－127・128グリッドに位置する。平面形は方形を呈すものと思われ、住居の東側が調査区外に広がっている。規模は長軸461㎝、短軸155㎝を測り、深さは50㎝である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝が巡る。覆土は19層に分層したが、おおむね自然堆積と思われる。



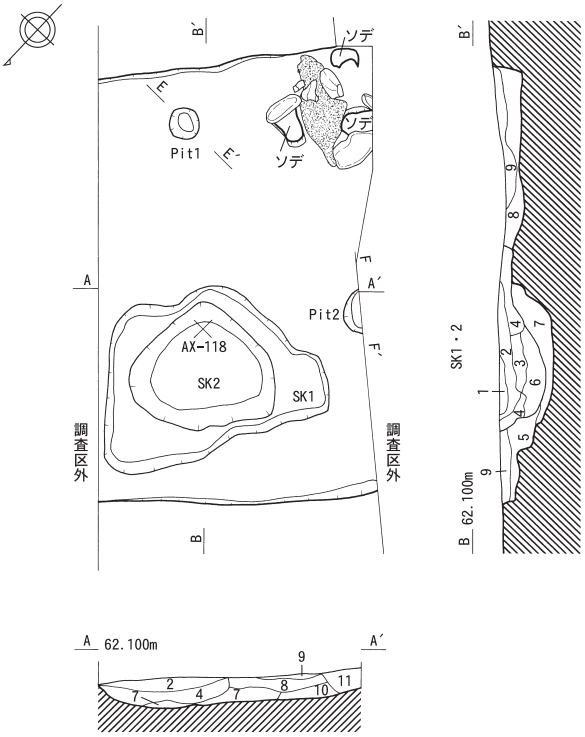
第１号竪穴住居跡（SI01）
第１層　黒 色 土（10YR2/1）　ローム粒微量
第２層　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒微量、炭化物微量
第３層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量
第４層　黒 色 土（10YR1.7/1）　ローム粒微量
第５層　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒少量、炭化物微量
第６層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム混在
第７層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム混在
SI01Pit1
第１層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量
SI01Pit2
第１層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量
SI01Pit3
第１層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒微量
第２層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒微量
第３層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム混在
第４層　褐 色 土（10YR4/4）　暗褐色土混在

SI01カマド



SI01カマド
第１層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム混在
第２層　暗褐色土（7.5YR3/3）　炭化物微量
第３層　暗褐色土（7.5YR3/3）　焼土粒中量、炭化物微量
第４層　褐 色 土（7.5YR4/3）　炭化物微量
第５層　褐 色 土（7.5YR4/3）　焼土粒少量、炭化物少量
第６層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒微量、焼土粒微量
第７層　褐 色 土（10YR4/6）　ローム主体、粘土質
第８層　褐 色 土（7.5YR4/4）　ローム主体
第９層　暗褐色土（7.5YR3/4）　ローム粒微量、焼土粒微量
第10層　赤褐色土（2.5YR4/6）　焼土

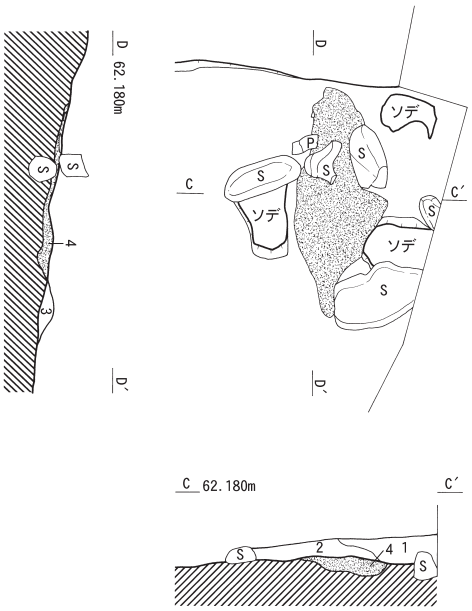
第20図　葛野（２）遺跡　SI01



第２号竪穴住居跡（SI02）
第１層　褐 色 土（10YR4/6）　ローム主体（SK2覆土）
第２層　褐 色 土（10YR4/6）　黒色土混在（SK2覆土）
第３層　褐 色 土（10YR4/6）　ローム主体（SK2覆土）
第４層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量（SK2覆土）
第５層　褐 色 土（10YR4/6）　黒褐色土混在
第６層　褐 色 土（10YR4/6）　黒褐色土混在（SK2覆土）
第７層　暗褐色土（10YR3/4）　ロームブロック少量（SK1覆土）
第８層　褐 色 土（10YR4/6）　暗褐色土混在
第９層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒少量、炭化物微量
第10層　褐 色 土（10YR4/6）　ローム主体
第11層　暗褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量、焼土粒微量
SI02Pit1
第１層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量
SI02Pit2
第１層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒少量、炭化物微量
第２層　褐 色 土（10YR4/4）　ローム粒微量、炭化物微量

0　2m

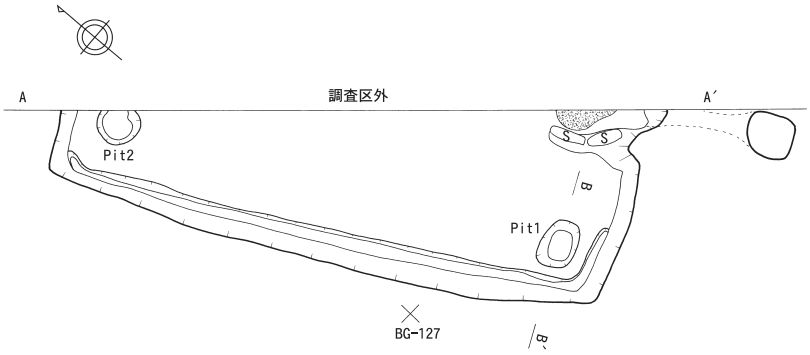
SI02カマド

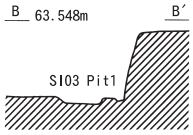


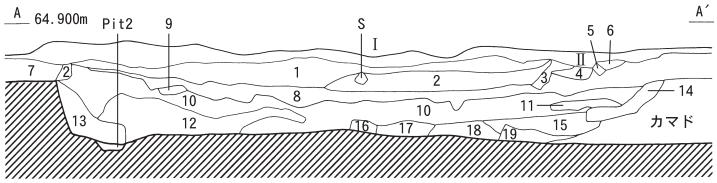
SI02カマド
第１層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム混在
第２層　暗褐色土（7.5YR3/4）　焼土粒微量、炭化物微量
第３層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒微量、炭化物微量
第４層　赤褐色土（2.5YR4/6）　焼土

0　1m

第21図　葛野（２）遺跡　SI02



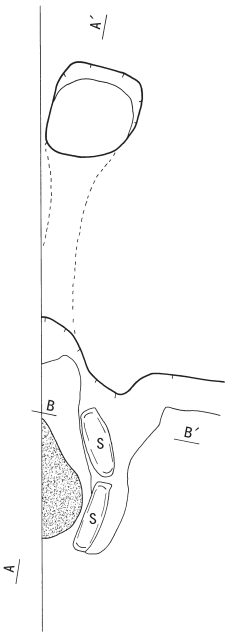


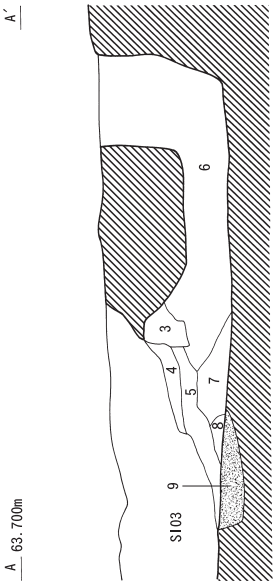


第３号竪穴住居跡（SI03）

第１層	黒　色　土	(10YR2/1)	炭化物中量
第２層	黒 褐 色 土	(10YR2/3)	ローム粒中量
第３層	黒 褐 色 土	(10YR3/2)	ローム粒微量
第４層	黒 褐 色 土	(10YR2/2)	ローム粒少量
第５層	暗 褐 色 土	(10YR3/3)	ローム粒中量
第６層	黒 褐 色 土	(10YR2/2)	炭化物少量
第７層	褐　色　土	(10YR4/6)	ローム粒少量
第８層	にぶい黄褐色土	(10YR4/3)	炭化物少量
第９層	にぶい黄褐色土	(10YR5/4)	ローム粒多量
第10層	にぶい黄褐色土	(10YR5/3)	ロームブロック中量、炭化物少量
第11層	灰黄褐色土	(10YR4/2)	炭化物微量
第12層	褐　色　土	(10YR4/4)	ローム粒中量
第13層	にぶい黄褐色土	(10YR4/3)	ローム粒微量、炭化物微量
第14層	黒 褐 色 土	(10YR3/1)	ロームブロック少量
第15層	明黄褐色土	(10YR/66)	炭化物少量
第16層	灰黄褐色土	(10YR4/2)	ロームブロック微量
第17層	にぶい黄褐色土	(10YR5/4)	炭化物少量、焼土粒微量
第18層	にぶい黄褐色土	(10YR5/3)	ローム粒少量
第19層	褐　色　土	(10YR4/4)	ロームブロック少量

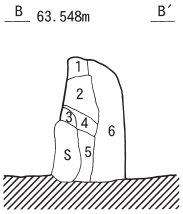
SI03カマド

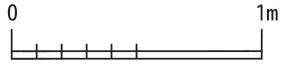




SI03カマド

第１層	褐　色　土	(10YR4/6)	ローム主体
第２層	褐　色　土	(7.5YR4/3)	焼土ブロック少量
第３層	にぶい赤褐色土	(5YR4/4)	焼土ブロック多量
第４層	灰 褐 色 土	(7.5YR4/2)	炭化物少量
第５層	にぶい赤褐色土	(5YR4/3)	焼土ブロック極微量
第６層	黒 褐 色 土	(10YR3/2)	焼土ブロック少量
第７層	黒 褐 色 土	(10YR3/1)	焼土粒少量
第８層	暗 褐 色 土	(5YR3/4)	焼土粒微量
第９層	赤 褐 色 土	(2.5YR4/6)	焼土





第22図　葛野（２）遺跡　SI03

床面よりピット２基が検出され、ピット１（Pit１）は長軸39㎝×短軸30㎝×深さ８㎝、ピット２（Pit２）は長軸35㎝×短軸27㎝×深さ７㎝を測る。住居主柱の一部と考えられる。

カマドは南壁で確認され、主軸は南方向（Ｎ－150°－Ｅ）にある。煙道は地下式で構築され、最大長190㎝、最大幅46㎝を測る。向かって右側袖部には袖石が２個検出され、火床面を囲むように構築されていることがよく分かる。火床面直上からは逆位に置かれた土師器甕底部（第26図16）が検出され、転用支脚として使用されたものであろう。

出土遺物は、土師器坏が４点（第26図９～12）、土師器甕が５点（第26図13～17）、須恵器壺が２点（第26図18・19）ある。所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀初頭～前葉）に比定されよう。

２．土坑（ＳＫ）

第１号土坑（第23図）

ＡＮ－110グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、南西側が調査区外に広がっている。壁面は急角度に立ち上がり、規模は長軸84㎝、短軸54㎝、深さ17㎝を測る。覆土は３層に分層したが、第３層は木根などの植物痕と思われる。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。

第２号土坑（第23図）

ＡＲ－114グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、南西側が調査区外に広がっている。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、規模は長軸55㎝、短軸36㎝、深さ38㎝を測る。覆土は３層に分層したが、おおむね自然堆積と思われる。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。

第３号土坑（第23図）

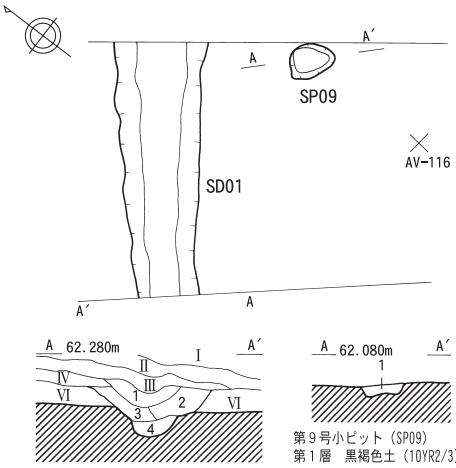
ＡＴ－116グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、南西側が調査区外に広がっている。壁面は急角度に立ち上がり、規模は長軸80㎝、短軸75㎝、深さ30㎝を測る。覆土は４層に分層したが、おおむね自然堆積と思われる。出土遺物がないため、詳細は不明であるが、層序観察を参考にすると、平安時代と推定される。

第４号土坑（第23図）

ＡＴ・ＡＵ－116グリッドに位置する。第８号小ピット（ＳＰ08）を切っている。平面形は不整楕円形を呈し、壁面はゆるやかに立ち上がる。規模は長軸93㎝、短軸80㎝を測り、深さは30㎝である。覆土は５層に分層したが、自然堆積と推定される。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。

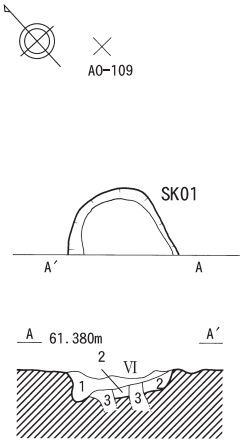
第５号土坑（第23図）

ＡＷ－118グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、北東側が調査区外に広がっている。壁面はゆるやかに立ち上がり、断面形は二段構成になっている。規模は長軸134㎝、短軸108㎝を測り、深さは30㎝である。覆土は３層に分層したが、第３層には炭化物が多量に堆積している。いわゆる焼成土坑である可能性があろう。出土遺物がないため、詳細は不明であるが、おおむね平安時代と推定される。

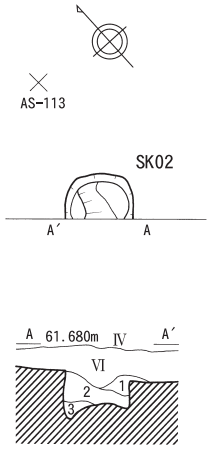


第９号小ピット（SP09）
第１層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量

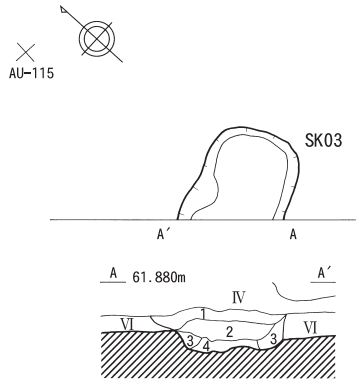
第１号溝状遺構（SD01）
第１層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量、炭化物微量
第２層　黒褐色土（10YR2/2）　ロームブロック少量
第３層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量
第４層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒微量



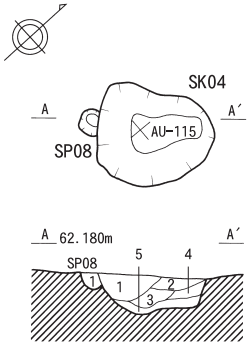
第１号土坑（SK01）
第１層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量
第２層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒少量
第３層　暗褐色土（10YR3/3）　木痕か、ローム粒微量



第２号土坑（SK02）
第１層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒微量
第２層　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒微量
第３層　褐 色 土（10YR4/4）　ローム主体

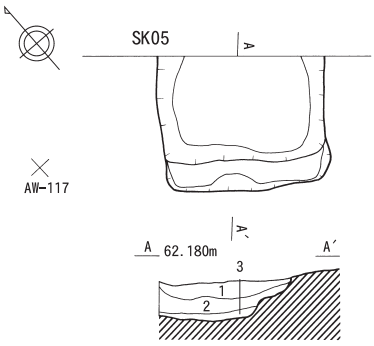


第３号土坑（SK03）
第１層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量、焼土粒微量
第２層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒微量、焼土粒微量
第３層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒少量
第４層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム混在

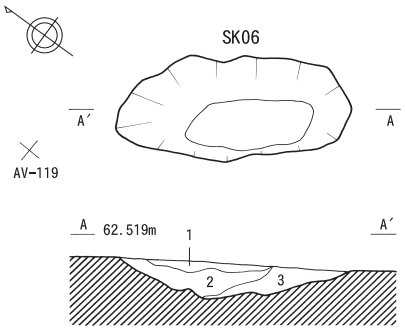


第４号土坑（SK04）
第１層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量
第２層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒微量
第３層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒少量
第４層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム混在
第５層　褐 色 土（10YR4/4）　暗褐色土混在

第８号小ピット（SP08）
第１層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム混在

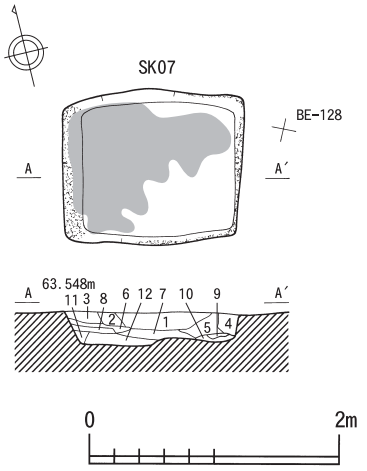


第５号土坑（SK05）
第１層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒少量
第２層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒少量、焼土粒微量
第３層　黒褐色土（10YR2/2）　炭化物多量、ローム粒少量



第６号土坑（SK06）
第１層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒微量、炭化物微量
第２層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒少量、炭化物微量
第３層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒微量

第７号土坑（SK07）
第１層　暗 褐 色 土（10YR3/4）　ローム粒少量、炭化物少量
第２層　黒 褐 色 土（10YR3/1）　炭化物微量
第３層　黒 褐 色 土（10YR3/2）　ローム粒少量、炭化物微量
第４層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒微量、炭化物微量、焼土粒微量
第５層　灰黄褐色土（10YR4/2）　ローム粒少量、炭化物少量
第６層　暗 褐 色 土（10YR3/3）　ローム粒極微量、炭化物中量
第７層　黒　褐　色（10YR2/2）　ローム粒中量、炭化物中量
第８層　黒　色　土（10YR1.7/1）　炭化物多量、焼土粒微量
第９層　にぶい黄褐色土（10YR5/3）　ローム粒少量
第10層　黒　色　土（10YR2/1）　炭化物多量、焼土粒中量
第11層　にぶい黄褐色土（10YR5/3）　ローム粒多量、炭化物中量、焼土粒少量
第12層　黒　色　土（10YR1.7/1）　ローム粒中量、炭化物多量、焼土粒少量



第23図　葛野（２）遺跡　SK・SD

第６号土坑（第23図）

ＡＸ・ＡＹ－120グリッドに位置する。平面形は不整長楕円形を呈し、壁面はゆるやかに立ち上がる。規模は長軸186㎝、短軸76㎝を測り、深さは30㎝である。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。

第７号土坑（第23図）

ＢＤ－129グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸143㎝、短軸124㎝を測り、深さは27㎝である。外壁には被熱痕（赤化焼土）が壁面上位に断続的に観察され、床面近くの覆土中には炭化物が多量に混在している。いわゆる焼成土坑の可能性があろう。出土遺物は土師器坏（第25図８）があり、所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀初頭～前葉）に比定される。

３．小ピット（ＳＰ）

本遺跡からは柱穴状の小ピットが10基検出された（第24図）。出土遺物はなく、その所産時期は不明である。配列の明確なものも確認できなかった。計測値等は観察表に纏めた（第４表）。

第４表　葛野（２）遺跡小ピット観察一覧

遺構番号	図版番号	位置(グリッド)	平面形	規模（㎝）			備　　考
				長軸	短軸	深さ	
ＳＰ01	第24図	ＡＪ－105	楕円形	29	16	21	
ＳＰ02	第24図	ＡＫ－106	楕円形	28	20	23	
ＳＰ03	第24図	ＡＬ－107	不整円形	40	38	30	
ＳＰ04	第24図	ＡＬ－108	長楕円形	34	26	20	
ＳＰ05	第24図	ＡＬ－108	不整楕円形	31	25	16	
ＳＰ06	第24図	ＡＮ－109	不整方形	25	25	12	
ＳＰ07	第24図	ＡＯ－110	不整長楕円形	34	16	18	
ＳＰ08	第24図	ＡＵ－116	不整方形	20	14	12	ＳＫ04と重複
ＳＰ09	第24図	ＡＵ－116	不整形	37	27	9	
ＳＰ10	第24図	ＡＶ－117	不整楕円形	60	45	14	

４．溝状遺構（ＳＤ）

第１号溝状遺構（第23図）

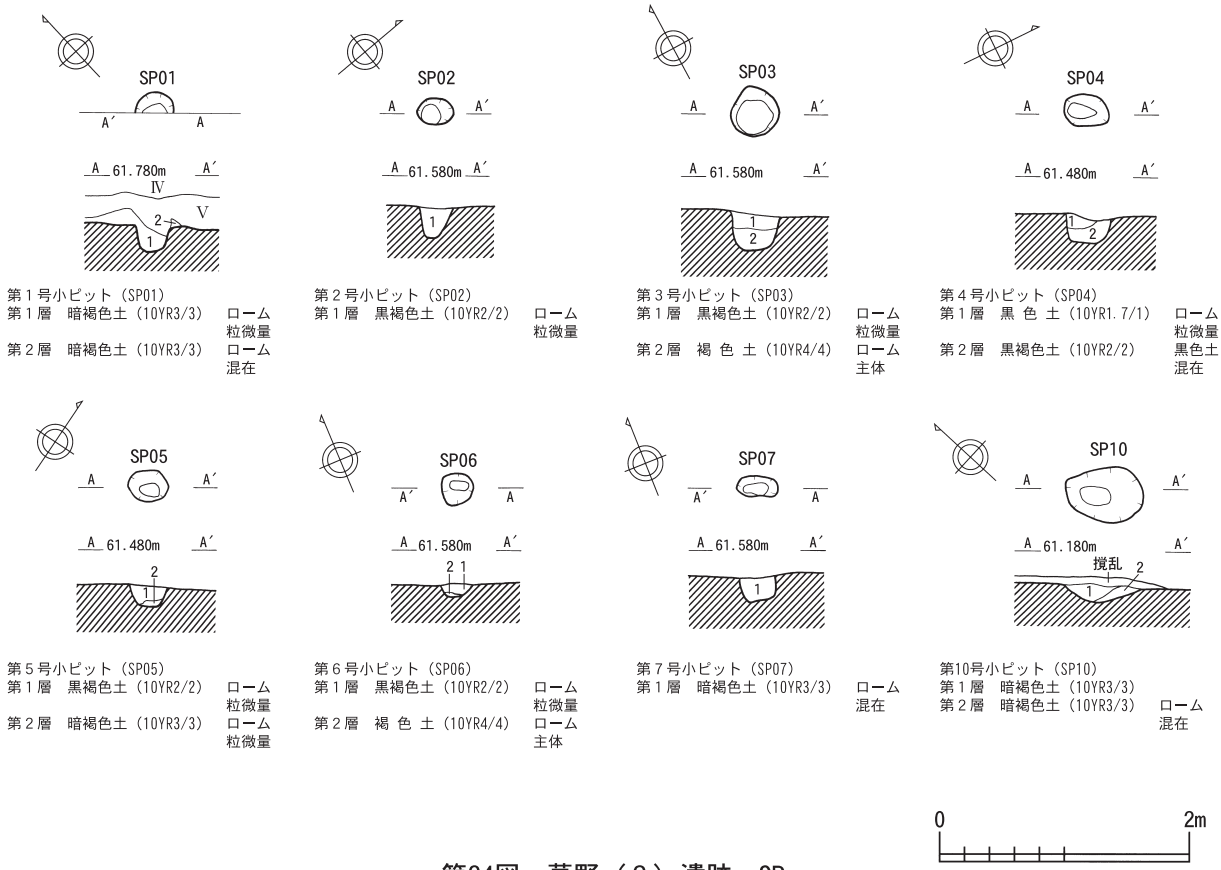
ＡＵ－116グリッドに位置する。平面形は細長い直線状を呈し、東西両側が調査区外に延びている。規模は最大長2.1m、最大幅0.7mを測り、深さは0.35mである。壁面はゆるやかに立ち上がり、長軸方向は北東方向（Ｎ－50°－Ｅ）にある。覆土は４層に分層したが、おおむね自然堆積と推定される。出土遺物はないが、層序観察を参考にすると、竪穴住居跡と同じ所産時期が推定されよう。

第２節　遺構外出土遺物

１．須恵器（第26図20）

ＡＰ－112グリッドより須恵器壺の口縁部資料が１点出土している。小型の長頸壺の口縁部であり、所産時期はおおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定される。

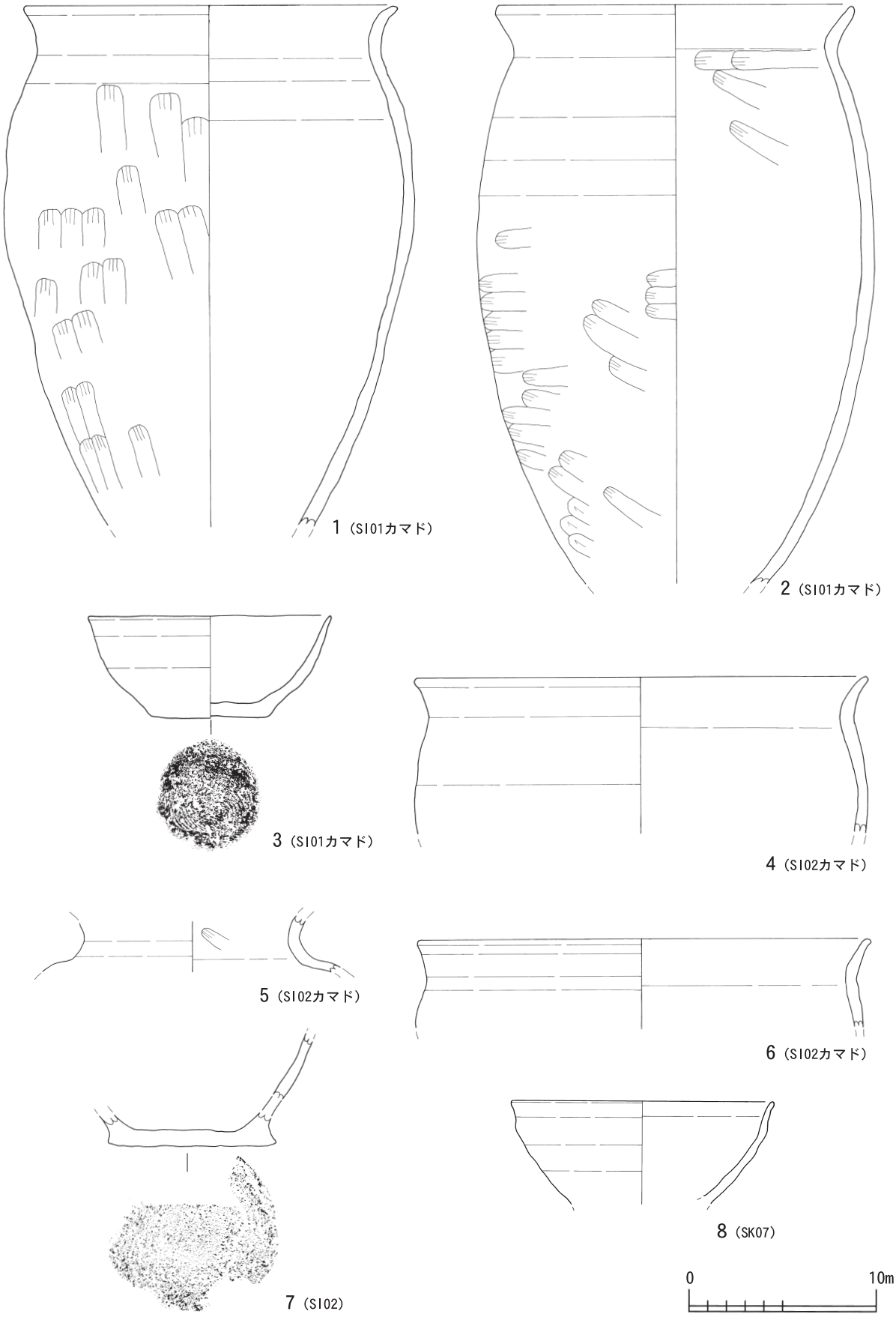
（野坂　知広）



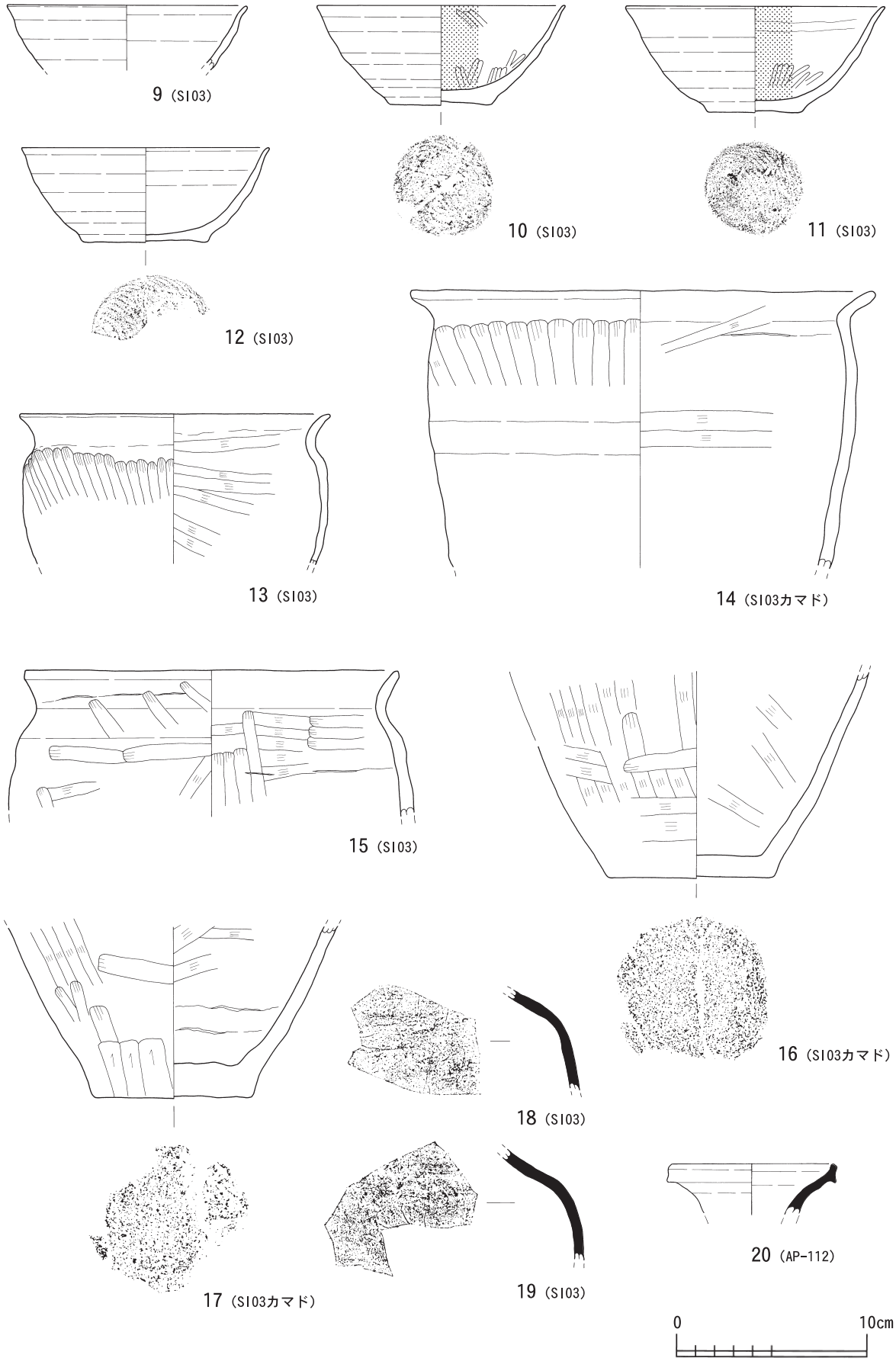
第24図　葛野（２）遺跡　SP

第５表　葛野（２）遺跡出土遺物観察一覧

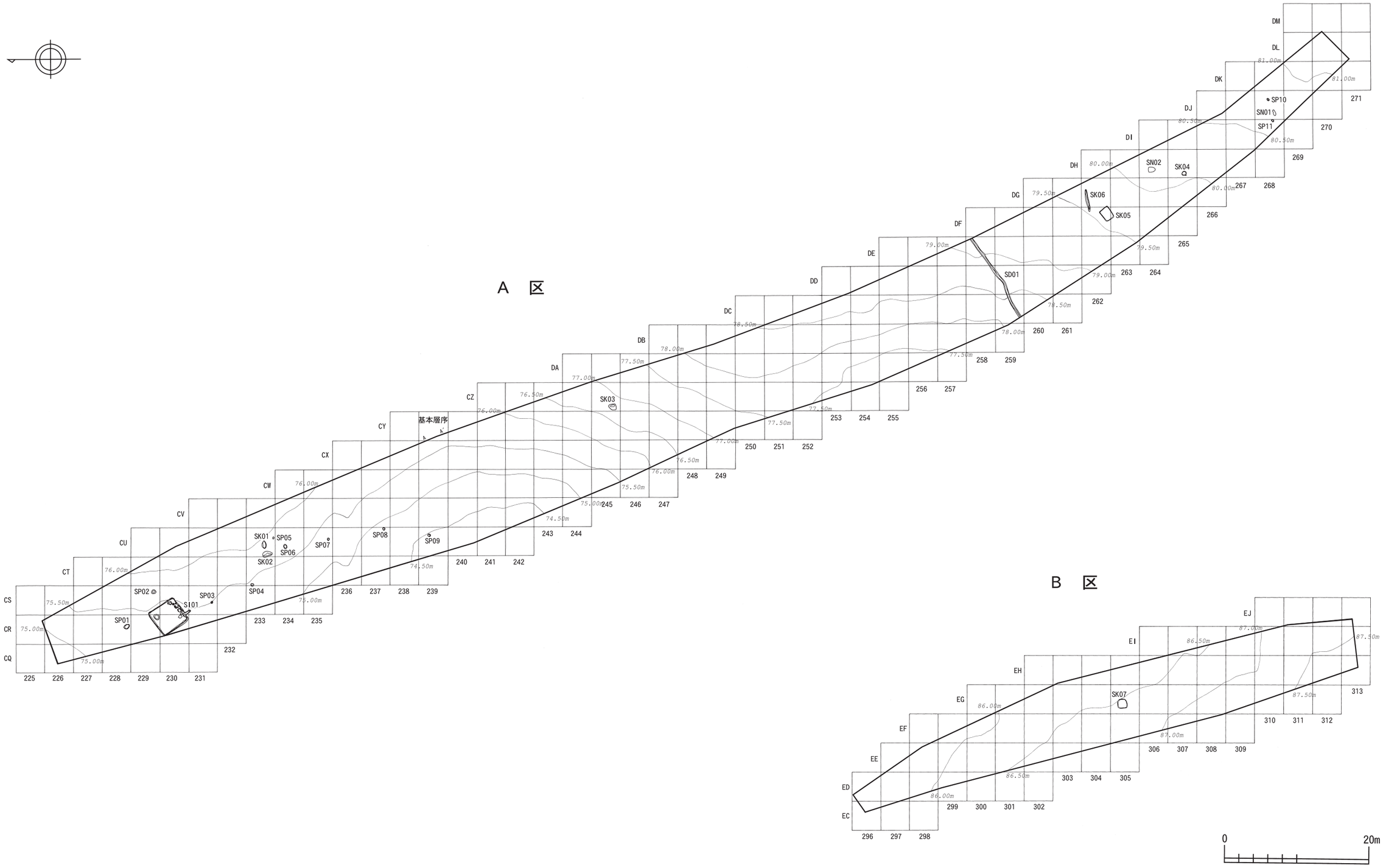
図版番号	器種	出土位置	計測値（cm）			外面調整	内面調整	底部調整	時　期	備　考
			口径	底径	器高					
第25図１	土師器甕	ＳＩ01カマド	19.8	—	27.9	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉	
第25図２	土師器甕	ＳＩ01カマド	18.9	—	31.0	ヘラナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉	
第25図３	土師器坏	ＳＩ01カマド	12.9	6.2	5.4	ロクロ	ロクロ	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	転用支脚
第25図４	土師器甕	ＳＩ02カマド	24.0	—	8.3	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半	
第25図５	土師器甕	ＳＩ02カマド	—	—	2.7	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半	
第25図６	土師器甕	ＳＩ02カマド	24.0	—	4.9	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半	
第25図７	土師器甕	ＳＩ02	—	8.9	6.0	ヘラケズリ	ヘラナデ	砂底	10世紀前半	
第25図８	土師器坏	ＳＫ07	13.9	—	5.5	ロクロ	ロクロ	—	10世紀初頭～前葉	
第26図９	土師器坏	ＳＩ03	12.5	—	3.3	ロクロ	ロクロ	—	10世紀初頭～前葉	
第26図10	土師器坏	ＳＩ03	13.1	5.3	5.2	ロクロ	ヘラミガキ(黒色)	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	
第26図11	土師器坏	ＳＩ03	13.5	4.9	5.6	ロクロ	ヘラミガキ(黒色)	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	
第26図12	土師器坏	ＳＩ03	13.5	4.9	5.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	
第26図13	土師器甕	ＳＩ03	16.2	—	7.2	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉	
第26図14	土師器甕	ＳＩ03カマド	24.2	—	14.6	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉	
第26図15	土師器甕	ＳＩ03	19.5	—	7.7	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀初頭～前葉	
第26図16	土師器甕	ＳＩ03カマド	—	8.5	11.0	ヘラナデ	ヘラナデ	砂底	10世紀初頭～前葉	転用支脚
第26図17	土師器甕	ＳＩ03カマド	—	8.2	9.0	ヘラナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ	砂底	10世紀初頭～前葉	
第26図18	須恵器壺	ＳＩ03	—	—	—	ロクロ	ロクロ	—	10世紀初頭～前葉	
第26図19	須恵器壺	ＳＩ03	—	—	—	ロクロ	ロクロ	—	10世紀初頭～前葉	
第26図20	須恵器壺	ＡＰ－112	8.4	—	2.7	ロクロ	ロクロ	—	10世紀前半	



第25図　葛野（２）遺跡　出土遺物（１）



第26図　葛野（２）遺跡　出土遺物（２）



第27図　葛野（３）遺跡　遺構配置図

第Ⅴ章　葛野（３）遺跡

第１節　検出遺構と出土遺物

１．竪穴住居跡（ＳＩ）

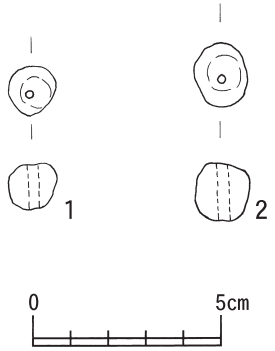
第１号竪穴住居跡（第29図）

ＣＲ・ＣＳ－229・230グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、規模は長軸432㎝、短軸389㎝、深さ40㎝を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝が断続的に全周する。

床面よりピット７基が検出され、ピット１（Pit１）は長軸30㎝×短軸25㎝×深さ10㎝、ピット２（Pit２）は長軸57㎝×短軸26㎝×深さ９㎝、ピット３（Pit３）は長軸85㎝×短軸71㎝×深さ11㎝、ピット４（Pit４）は長軸60㎝×短軸50㎝×深さ12㎝、ピット５（Pit５）は長軸22㎝×短軸18㎝×深さ12㎝、ピット６（Pit６）は長軸15㎝×短軸12㎝×深さ10㎝、ピット７（Pit７）は長軸49㎝×短軸17㎝×深さ７㎝を測る。判然としないが、ピット５～７は住居入口に関わる遺構の可能性があろう。覆土は11層に分層したが、おおむね自然堆積と推定される。

カマドは南東壁で確認され、主軸は南東方向（Ｎ－142°－Ｅ）にある。煙道は半地下式で構築され、最大長195㎝、最大幅80㎝を測る。袖部には袖石が見られる。より煙道に近い火床面直上からは、逆位に置かれた土師器甕底部が２点（第30図５・７）並んで検出され、転用支脚と思われる。土師器甕などが二つ据えられていた姿を想定することができる（写真11参照）。

出土遺物は、土師器甕が９点（第30図４～12）、土製支脚が１点（第30図３）、土玉が２点（第28図１・２）、縄文土器が３点（第30図１・２・13）ある。土玉２点は住居床面の北西域から集中して検出された。また、図示できなかったが鉄滓（鍛冶滓）の小片が数点出土している。第30図１・13は縄文後期初頭の弥栄平（２）式（成田1989）・蛍沢Ⅰ期（葛西2002）に、第30図２は縄文後期前葉の十腰内Ⅰ式に類する土器と推定される。本住居跡の所産時期は、おおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定されよう。



第28図　葛野（３）遺跡
SI01出土土玉

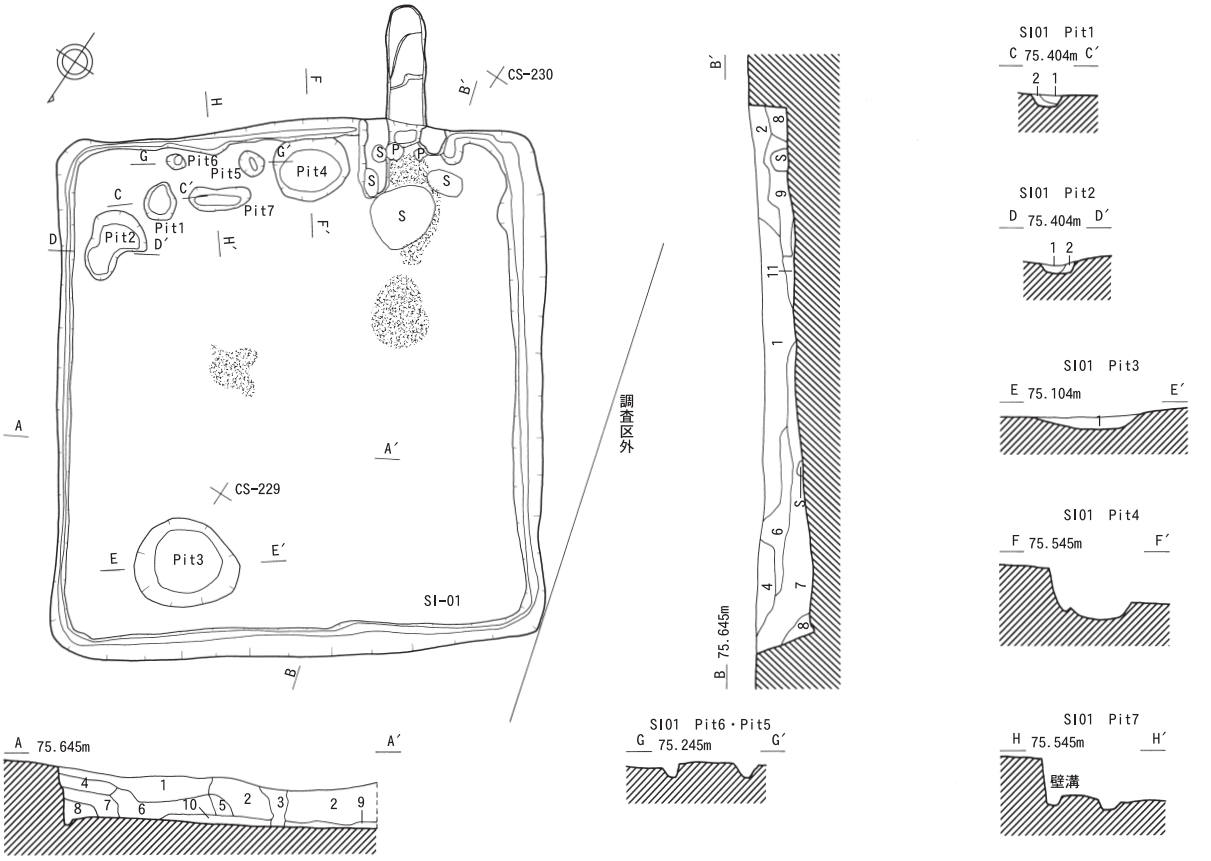
２．土坑（ＳＫ）

第１号土坑（第31図）

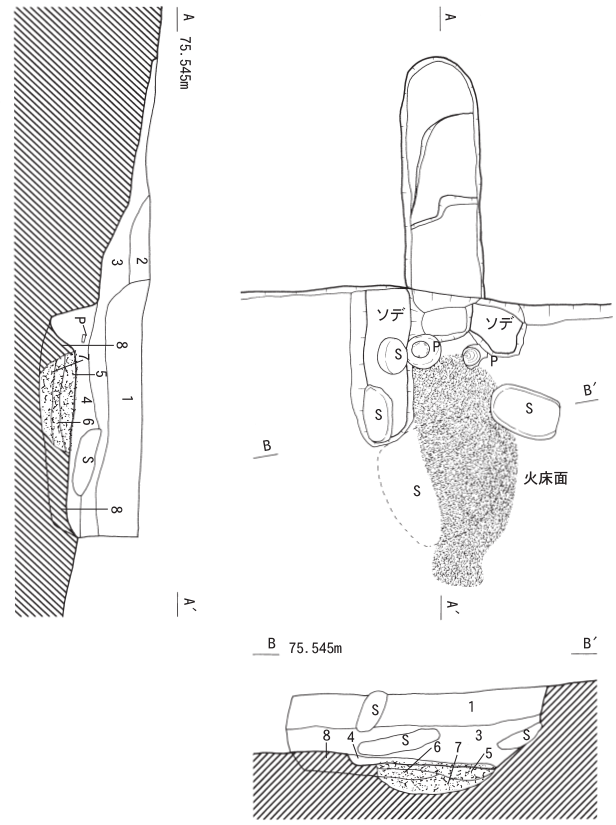
ＣＵ－233グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、壁面はゆるやかに立ち上がる。規模は長軸107㎝、短軸56㎝を測り、深さは13㎝である。覆土は１層としたが、おおむね自然堆積と思われる。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。

第２号土坑（第31図）

ＣＵ－233グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、壁面は急角度に立ち上がる。規模は長軸135㎝、短軸74㎝を測り、深さは33㎝である。覆土は５層に分層したが、おおむね自然堆積と思われる。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。



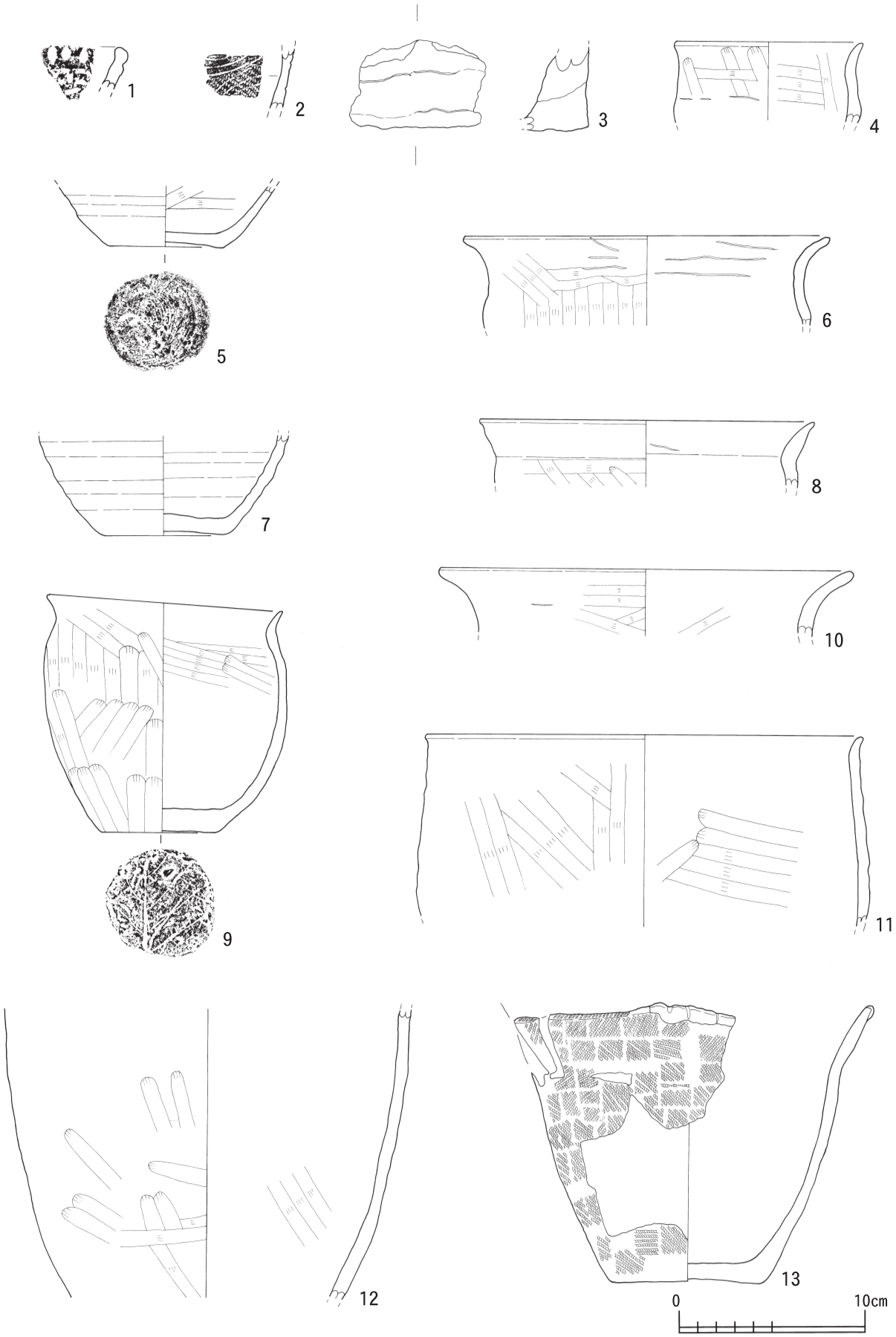
SI01カマド



第１号竪穴住居跡（SI01）
第１層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒少量、炭化物微量
第２層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒中量、焼土粒微量
第３層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量
第４層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒少量
第５層　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒少量
第６層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒少量、炭化物微量
第７層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒微量
第８層　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒微量、ロームブロック混在
第９層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒少量、炭化物微量
第10層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒少量
第11層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒少量、炭化物少量、焼土粒少量
SI01Pit1
第１層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量、炭化物微量、焼土粒微量
第２層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒微量、炭化物少量
SI01Pit2
第１層　褐　色　土（10YR4/4）　ローム粒微量、炭化物微量
第２層　黄褐色土（10YR5/8）　ローム粒少量
SI01Pit3
第１層　暗褐色土（10YR3/3）　ローム粒中量、炭化物少量、焼土粒微量
SI01カマド
第１層　暗褐色土（10YR3/4）　ローム粒中量、炭化物微量、焼土粒微量
第２層　褐　色　土（10YR4/6）　ローム粒微量
第３層　褐　色　土（10YR4/4）　ローム粒少量、炭化物微量、焼土粒少量
第４層　褐　色　土（7.5YR4/4）　ローム粒少量、炭化物微量、焼土粒少量
第５層　明赤褐色土（5YR5/8）　焼土
第６層　赤褐色土（5YR4/6）　焼土
第７層　赤褐色土（2.5YR4/6）　焼土
第８層　褐　色　土（10YR4/4）　地山ローム

0　1m

第29図　葛野（３）遺跡　SI01



第30図　葛野（3）遺跡　SI01出土遺物

第３号土坑（第31図）

ＣＺ－245グリッドに位置する。平面形は不整方形を呈し、壁面は急角度に立ち上がる。規模は長軸80㎝、短軸66㎝を測り、深さは39㎝である。覆土は３層に分層したが、おおむね自然堆積と推定される。確認面の段階で焼土と炭化物を検出しており、覆土下位にまで大きな炭化物が混入していた（写真12参照）。出土遺物がないため判然とはしないが、古代の製炭土坑に類する遺構と推定されよう。

第４号土坑（第31図）

ＤＨ－265グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、壁面はやや急角度に立ち上がる。規模は長軸70㎝、短軸60㎝を測り、深さは４㎝である。覆土は１層としたが、確認面には炭化物が検出された。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。

第５号土坑（第31図）

ＤＦ・ＤＧ－262・263グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸177㎝、短軸141㎝を測り、深さは57㎝である。床面直上にはＢ－Ｔｍ火山灰が部分的に、炭化物が薄く一面に堆積していた。外壁には被熱痕（赤化焼土）が明瞭に観察され、壁面下位にほぼ全周している。床面も一面焼土に覆われているが、著しい硬化面は確認されなかった。いわゆる焼成土坑であるが、古代の製炭土坑あるいは土師器焼成土坑の可能性が考えられよう。木立雅朗氏の記述（窯跡研究会1997）に従えば、より土師器焼成土坑（焼成坑）に近いとも思われるが、これを焼成坑とすると前壁・奥壁の区別が判然としない。形態的には、望月精司氏の分類するＡ類焼成坑Ⅱ類ｂ類２類（窯跡研究会1997）に近似する土坑である。

第６号土坑（第31図）

ＤＧ－262グリッドに位置する。平面形は細長い長楕円形（溝状）を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は最大長304㎝、最大幅30㎝を測り、深さは103㎝である。幅に対して極めて深い構造となっており、主軸は南東方向（Ｎ－74°－Ｅ）にある。

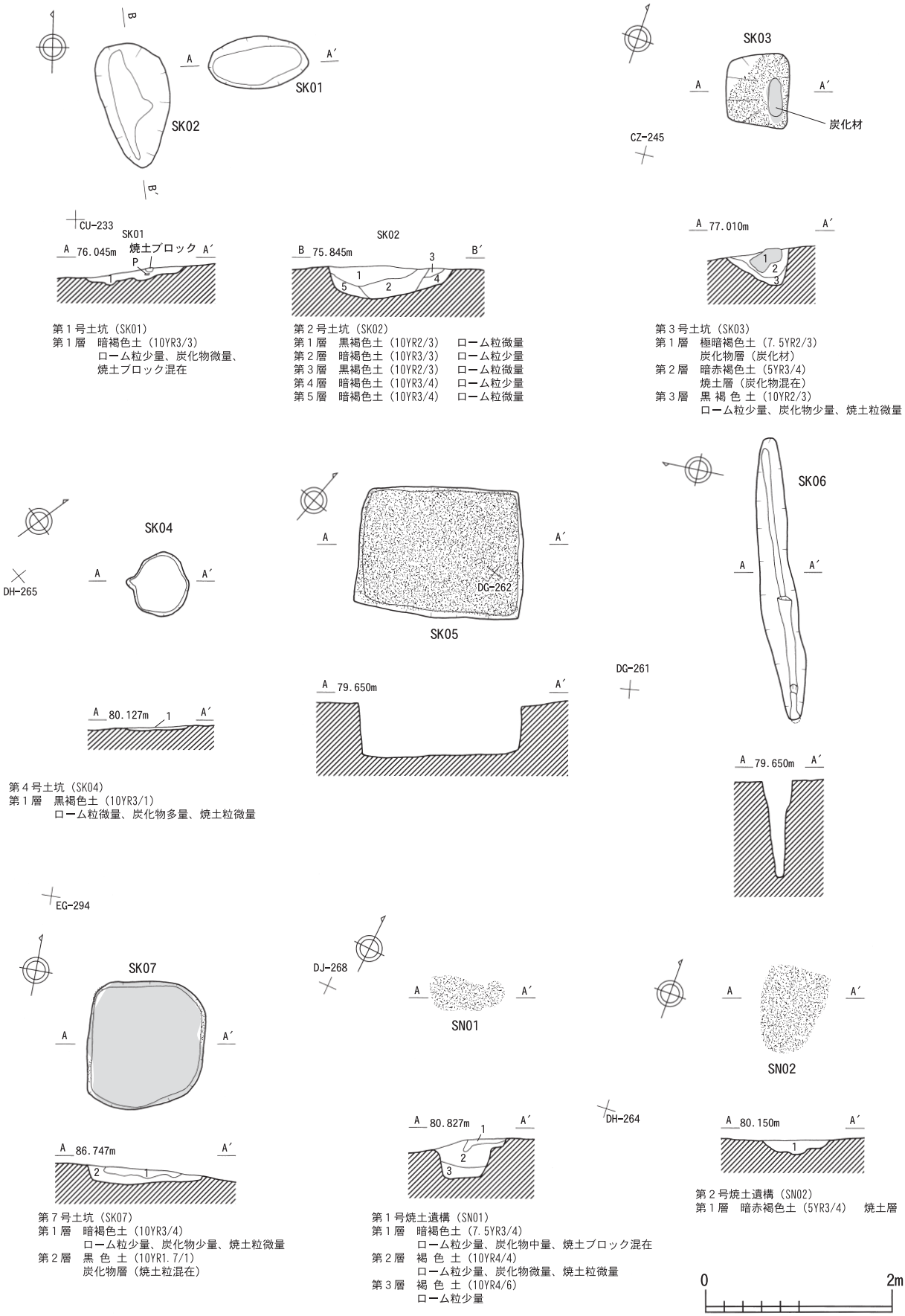
本県では典型的な陥穴土坑（Ｔ－pit）と思われるが、実際に狩猟用の陥穴として使用されたかどうかは詳らかでない。出土遺物はないが、形態的特徴から縄文前期～後期の所産時期が推定される。

第７号土坑（第31図）

ＥＧ－305グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸137㎝、短軸125㎝を測り、深さは19㎝である。覆土は２層に分層したが、自然堆積と思われる。確認面の段階で炭化物と土坑外壁の被熱痕（赤化焼土）が観察され、炭化物は覆土全体に及んでいた。外壁の被熱痕は、壁面上位に小さく偏在するのみであった。いわゆる焼成土坑であるが、古代の製炭土坑に類する遺構と推定されよう。

３．焼土遺構（ＳＮ）

ここで言う焼土遺構とは、土坑などの下部構造を伴わず、確認面において焼土（焼成痕）のみが残存する遺構である。その性格は不明であるが、該期の集落遺跡などによく散見できる遺構であろう。本調



第31図　葛野（３）遺跡　SK・SN

査においては２基検出された。

第１号焼土遺構（第31図）

ＤＪ－268グリッドに位置する。平面形は不整長円形で、長軸80㎝、短軸30㎝、深さ（焼土堆積）21㎝を測る。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。

第２号焼土遺構（第31図）

ＤＨ－264グリッドに位置する。平面形は不整楕円形で、長軸94㎝、短軸70㎝、深さ（焼土堆積）15㎝を測る。遺構に伴うとは言えないが、近接した場所より土師器甕（第34図25）が出土している。

４．小ピット（ＳＰ）

本遺跡からは小ピットが11基検出された（第32図）。出土遺物がないため、その所産時期は不明である。配列の明確なものも確認できなかった。計測値等は観察表に纏めた（第６表）。

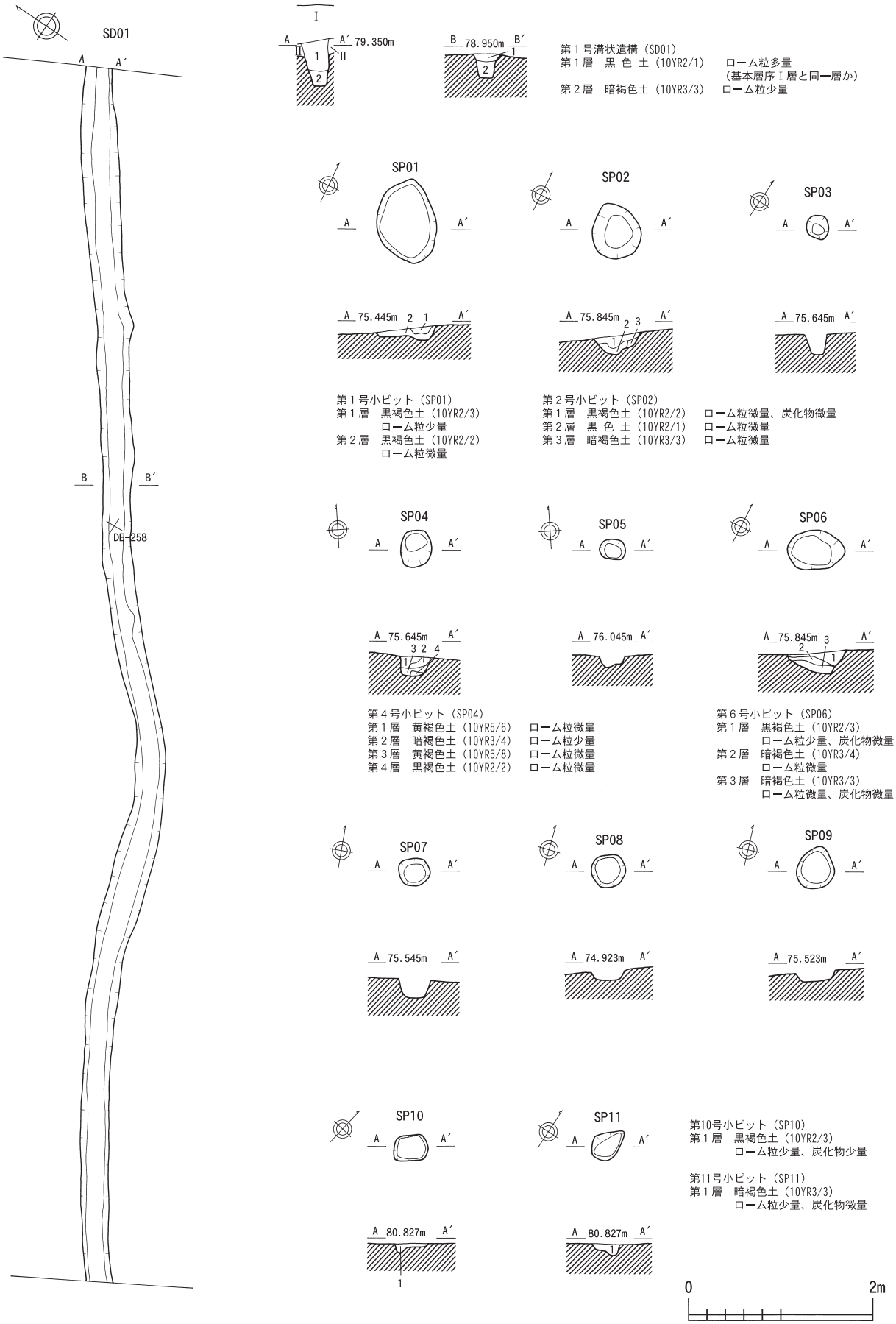
第６表　葛野（３）遺跡小ピット観察一覧

遺構番号	図版番号	位置（グリッド）	平　面　形	規模（㎝）		
				長軸	短軸	深さ
ＳＰ01	第32図	ＣＲ－228	不整楕円形	92	64	14
ＳＰ02	第32図	ＣＳ－229	不整円形	62	53	20
ＳＰ03	第32図	ＣＳ－231	不整円形	25	25	22
ＳＰ04	第32図	ＣＴ－233	不整楕円形	41	34	22
ＳＰ05	第32図	ＣＵ－233	不整楕円形	28	22	15
ＳＰ06	第32図	ＣＵ－234	不整楕円形	62	43	23
ＳＰ07	第32図	ＣＵ－235	不整円形	34	30	19
ＳＰ08	第32図	ＣＵ－237	不整円形	36	35	8
ＳＰ09	第32図	ＣＵ－239	不整楕円形	46	41	9
ＳＰ10	第32図	ＤＪ－268	隅丸方形	37	28	10
ＳＰ11	第32図	ＤＪ－268	不整形	31	30	13

５．溝状遺構（ＳＤ）

第１号溝状遺構（第32図）

ＤＣ・ＤＤ－259、ＤＤ・ＤＥ－258グリッドに位置する。平面形はゆるやかに蛇行するが、ほぼ直線状を呈し、東西両側の調査区外にも延びている。規模は最大長13.16m、最大幅0.25m、深さ0.35mを測るが、東壁層序を参考にすると本来の深さは0.50m程度であった可能性があろう。壁面は急角度に立ち上がり、長軸方向は東西（Ｎ－56°－Ｅ）にある。覆土は２層に分層したが、おおむね自然堆積と推定される。基本層序Ⅱ層上面より掘り込まれているようにも見えるが、出土遺物がないため所産時期は特定できない。



第32図　葛野（３）遺跡　SP・SD

第２節　遺構外出土遺物

１．縄文土器

すべて破片資料であり、風化によって摩滅の著しいものもある（第34図２～24）。詳細は観察表（第７表）に纏めたが、縄文前期の土器（第34図２～８・10～22）と縄文中・後期の土器（第34図９・23・24）に大きく分類することができる。破片が小さいため明確なことは言えないが、第34図２・３・５・６・10～13・15・16・18・22は胎土に繊維を含み、縄文前期末葉の円筒下層d_1～d_2式に帰属する資料と思われる。胎土に繊維を含まない第34図４・７・８・14・17・19～21の土器も、おおむね該期に比定できよう。第34図９・23・24は縄文中期末葉～後期初頭の土器と推定される。

２．縄文石器

磨製石斧（第34図26）

変朽安山岩製の磨製石斧が１点出土している。表面は丁寧に研磨・整形され、基部が角張り、平坦面を形成する。基部から刃部に向かって幅広になる典型的な定角式磨製石斧であろう。形態的特徴などから、おおむね縄文後期の所産時期が推定される。

叩石（第34図27）

凝灰岩製の叩石が１点出土している。ちょうど手のひらで握れる程度の大きさ・形状の自然礫が選択されていることが分かる。二面に亘って敲打痕（凹部）が観察され、植物食関連の石器と推定される。所産時期は判然としないが、縄文後期の資料であろうか。

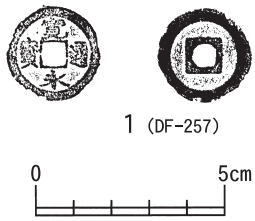
３．須恵器

須恵器甕の胴部破片が１点出土している（第34図１）。外面には縄を巻いた叩き板の叩目痕が観察されるが、内面は器面剥離もあり判然としない。所産時期は、おおむね平安時代中頃（10世紀前半）に比定されよう。

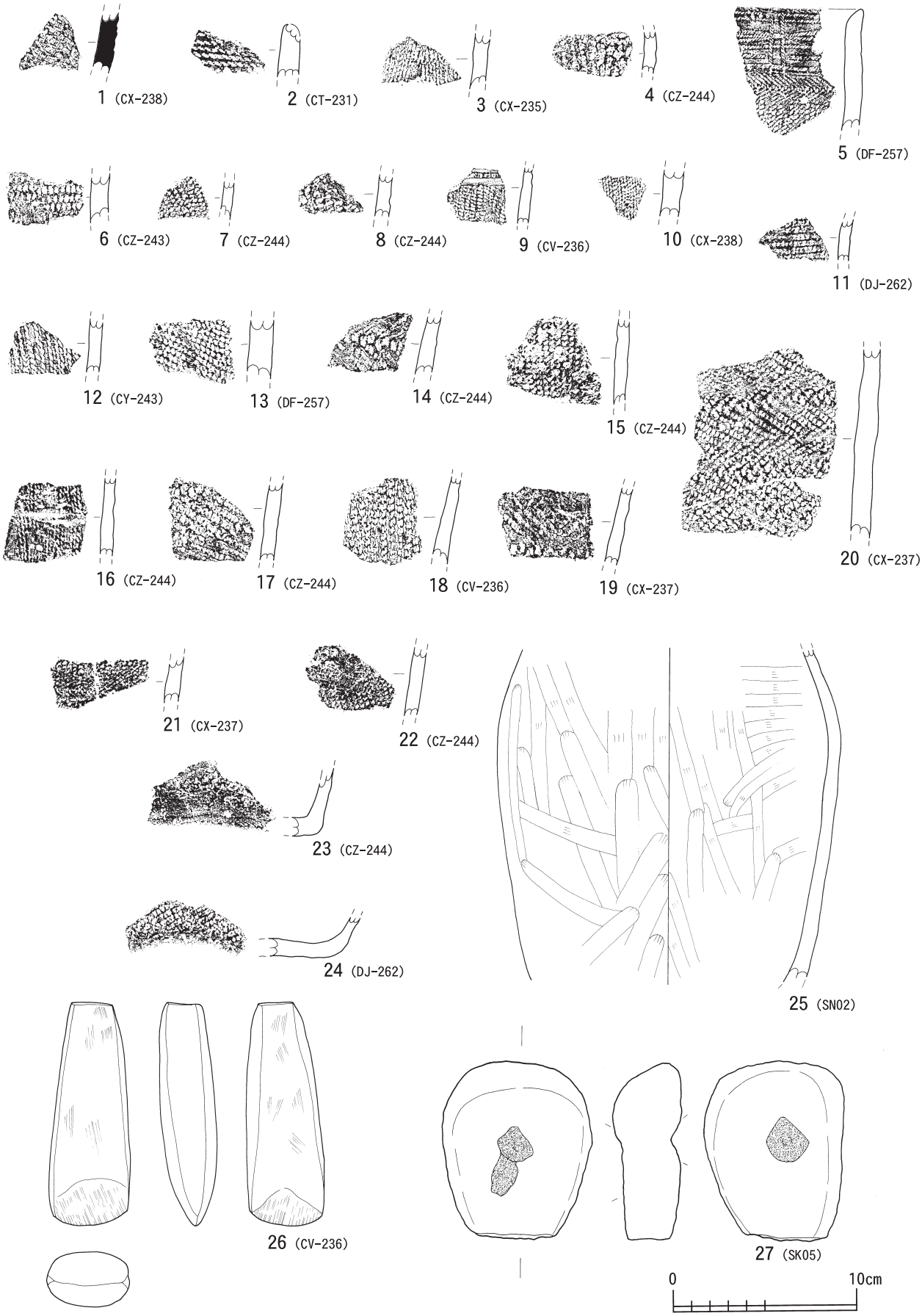
４．銭貨

円形方孔の銅銭が１点出土している（第33図１）。小型（最大径2.4㎝）で背面無文の寛永通宝であり、内郭・外郭ともに幅広に作られている。寛永～万延年間（江戸時代）に鋳造された一文銭であろう。

（野坂　知広）



第33図　葛野（3）遺跡
遺構外出土銭貨



第34図　葛野（３）遺跡　SK・SN・遺構外出土遺物

第７表　葛野（３）遺跡出土遺物観察一覧

図版番号	器　　種	出土位置	計測値（cm）			外面調整	内面調整	底部調整	時　　期	備　　考
			口径	底径	器高					
第30図３	土製支脚	ＳＩ01	—	—	—	ヘラ調整	—	砂底？	10世紀前半	
第30図４	土師器甕	ＳＩ01	10.1	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半	
第30図５	土師器甕	ＳＩ01	—	5.9	—	ロクロ	ヘラナデ	回転糸切（右）	10世紀前半	転用支脚
第30図６	土師器甕	ＳＩ01	19.7	—	—	ヘラナデ	—	—	10世紀前半	
第30図７	土師器甕	ＳＩ01	—	6.6	—	ロクロ	ロクロ	ヘラケズリ	10世紀前半	転用支脚
第30図８	土師器甕	ＳＩ01	17.9	—	—	ヘラナデ	—	—	10世紀前半	
第30図９	土師器甕	ＳＩ01	12.5	5.9	12.5	ヘラナデ	ヘラナデ	木葉痕	10世紀前半	
第30図10	土師器甕	ＳＩ01	22.1	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半	
第30図11	土師器甕	ＳＩ01	23.4	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半	
第30図12	土師器甕	ＳＩ01	—	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半	
第34図１	須恵器甕	ＣＸ－238	—	—	—	叩目痕	—	—	10世紀前半	
第34図25	土師器甕	ＳＮ02	—	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	—	10世紀前半	

図版番号	種　　別	出土位置	計測値（cm）			時　　期	備　　考
			最大長	最大幅	最大厚		
第28図１	土玉	ＳＩ01	1.3	1.2	1.2	10世紀前半	穿孔あり（径0.2cm）
第28図２	土玉	ＳＩ01	1.7	1.4	1.5	10世紀前半	穿孔あり（径0.2cm）

図版番号	器　　種	出土位置	部位	文　　様	時　　期	備　　考
第30図１	縄文土器	ＳＩ01	口縁部	口唇スリット、沈線文	後期初頭	
第30図２	縄文土器	ＳＩ01	胴部	ＲＬ縄文＋沈線文	後期初頭	
第30図13	縄文土器鉢	ＳＩ01	半完形	波状口縁：スリット、胴部：ＲＬ縄文	後期初頭	
第34図２	縄文土器	ＣＴ－231	口縁部	Ｌ単軸絡条体第１類（横位）	前期末葉	繊維混入
第34図３	縄文土器	ＣＸ－235	胴部	単軸絡条体第１Ａ類（縦位）	前期末葉	繊維混入
第34図４	縄文土器	ＣＺ－244	胴部	羽状縄文（結束第１種）	前期末葉	
第34図５	縄文土器深鉢	ＤＦ－257	口縁部	口縁：ＲＬ押捺（横・斜・縦位）、胴部：羽状縄文（結束第１種）、ＲＬ縄文	前期末葉	繊維混入
第34図６	縄文土器	ＣＺ－243	胴部	多軸絡条体	前期末葉	繊維混入
第34図７	縄文土器	ＣＺ－244	胴部	ＲＬＲ縄文	前期末葉	
第34図８	縄文土器	ＣＺ－244	胴部	ＲＬ縄文	前期末葉	
第34図９	縄文土器	ＣＶ－236	胴部	ＬＲ縄文＋沈線文	中期末葉	
第34図10	縄文土器	ＣＸ－238	胴部	Ｒ単軸絡条体第１類（縦位）	前期末葉	繊維混入
第34図11	縄文土器	ＤＪ－262	胴部	単軸絡条体第１Ａ類（縦位）	前期末葉	
第34図12	縄文土器	ＣＹ－243	胴部	Ｒ単軸絡条体第１類（縦位）	前期末葉	繊維混入
第34図13	縄文土器	ＤＦ－257	胴部	ＲＬ縄文	前期末葉	繊維混入
第34図14	縄文土器	ＣＺ－244	胴部	羽状縄文（結束第１種）	前期末葉	
第34図15	縄文土器	ＣＺ－244	胴部	ＲＬ縄文	前期末葉	繊維混入
第34図16	縄文土器	ＣＺ－244	胴部	単軸絡条体第１Ａ類（縦位）	前期末葉	繊維混入
第34図17	縄文土器	ＣＺ－244	胴部	ＲＬ縄文	前期末葉	
第34図18	縄文土器	ＣＶ－236	胴部	ＬＲＬ縄文	前期末葉	繊維混入
第34図19	縄文土器	ＣＸ－237	胴部	ＲＬ縄文	前期末葉	
第34図20	縄文土器	ＣＸ－237	胴部	羽状縄文（結束第１種）	前期末葉	
第34図21	縄文土器	ＣＸ－237	胴部	Ｒ単軸絡条体第１類（斜位）	前期末葉	
第34図22	縄文土器	ＣＺ－244	胴部	Ｒ単軸絡条体第１類（斜位）	前期末葉	
第34図23	縄文土器	ＣＺ－244	底部	胴部：ＬＲ縄文、底部：調整痕あり	後期初頭	
第34図24	縄文土器	ＤＪ－262	底部	胴部：ＬＲＬ縄文、底部：調整痕あり	後期初頭	

図版番号	種　　別	出土位置	計測値（cm）			石　　質	時　　期	備　　考
			最大長	最大幅	最大厚			
第34図26	磨製石斧	ＣＶ－236	12.2	4.2	3.0	変朽安山岩	縄文後期	定角式
第34図27	叩　　石	ＳＫ05	9.6	8.2	3.7	凝灰岩	縄文後期	凹部両面

図版番号	種　　別	出土位置	計測値（cm）			材　　質	時期	備　　考
			外　径	内　孔	厚　さ			
第33図１	寛永通宝	ＤＦ－257	2.4	0.6	0.1	銅銭	江戸時代	一文銭、背面無文

ま　と　め

葛野遺跡群は、青森市大字大別内字葛野地内に所在する葛野（１）遺跡・葛野（２）遺跡・葛野（３）遺跡の３遺跡を便宜上総括した呼称であり、今回、市道金浜小畑沢線道路改良工事に伴い、平成18年度・19年度の二ヵ年に亘って発掘調査を実施した。工事予定地を対象に、平成18年度は葛野（１）遺跡（589㎡）・葛野（２）遺跡（711㎡）を、平成19年度は葛野（３）遺跡（2,887㎡）を調査し、葛野（１）遺跡では平安時代の竪穴住居跡６軒、時期不明の土坑１基・小ピット14基、平安時代の溝状遺構４条、葛野（２）遺跡では平安時代の竪穴住居跡３軒・土坑３基、時期不明の土坑４基・小ピット10基、平安時代の溝状遺構１条、葛野（３）遺跡では平安時代の竪穴住居跡１軒・土坑３基、縄文時代の土坑１基、時期不明の土坑３基・焼土遺構２基・小ピット11基・溝状遺構１条が検出された。

特に、葛野（１）遺跡・葛野（２）遺跡は、現在の道路両脇にあたる細長い調査区であったが、竪穴住居跡が密集しており、集落跡の中心部であった可能性がある。対して、葛野（３）遺跡は、比較的広い区域を調査したにもかかわらず、竪穴住居跡は調査区北側より１軒確認されたのみであった。過去の調査区（平成８年度・10年度）における発掘調査成果などからも、葛野遺跡群にまたがって占地する古代集落は、現在の市道金浜小畑沢線と県営高田地区農免農道が交わる十字路北側（山林・耕作地）に中心域を持つものと推定される。その範囲は、舌状台地（微高丘陵）の地形に沿った南北に長い形状を呈すると思われ、標高50～70m内外の緩斜面上に限定されるのであろう。

本調査において検出された竪穴住居跡は、方形の平面形を呈し、ほぼ例外なく南東壁にカマドを持つ青森市域通有の事例であり、カマドを設置した南東壁に住居入口が開けられていたと思われる。カマド火床面には土師器坏あるいは土師器甕底部を利用した転用支脚が据えられることが多く、葛野（２）遺跡第１号竪穴住居跡には土師器坏が１点、第３号竪穴住居跡には土師器甕底部が１点逆位に置かれ、葛野（３）遺跡第１号竪穴住居跡には土師器甕底部が逆位に２点並んで置かれていた。カマドに土器を１点据えるタイプと２点据えるタイプの２種類があったことが窺われる。

また、葛野遺跡群に特徴的な遺構として長方形の焼成土坑が挙げられる。葛野（２）遺跡における第５号・第７号土坑、葛野（３）遺跡における第５号・第７号土坑が相当するが、本来の深さは葛野（３）遺跡第５号土坑に見られるように50㎝以上あったと推定される。その用途・機能は、土師器焼成土坑に類する可能性もあるが、焼成痕を示す土師器破片等は検出されておらず、現状では製炭土坑と理解するのが妥当であろう。

本遺跡群における古代集落の造営時期は、出土土器・降下火山灰（Ｂ－Ｔｍ）の堆積状況などから、平安時代中頃（10世紀初頭～前葉）に比定できるものと思われる。

（担当者一同）

引用・参考文献

青森県教育委員会　1983　『小館遺跡』
青森県教育委員会　1998　『新町野・野木遺跡発掘調査報告書』
青森県教育委員会　1999　『野木遺跡Ⅱ』
青森県教育委員会　2000ａ　『新町野遺跡Ⅱ』
青森県教育委員会　2000ｂ　『野木遺跡Ⅲ』
青森市教育委員会　1987　『横内城跡発掘調査報告書』
青森市教育委員会　1991　『山吹（１）遺跡発掘調査報告書』
青森市教育委員会　1995　『横内遺跡・横内（２）遺跡発掘調査報告書』
青森市教育委員会　1997　『葛野（２）遺跡発掘調査報告書』
青森市教育委員会　1998ａ　『新町野遺跡発掘調査報告書』
青森市教育委員会　1998ｂ　『野木遺跡発掘調査報告書』
青森市教育委員会　1999　『葛野（２）遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
青森市教育委員会　2001　『新町野遺跡発掘調査報告書Ⅱ・野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
青森市教育委員会　2006ａ　『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅸ』
青森市教育委員会　2006ｂ　『新町野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
青森市教育委員会　2006ｃ　『市内遺跡発掘調査報告書14』
青森市教育委員会　2007ａ　『月見野（１）遺跡発掘調査報告書』
青森市教育委員会　2007ｂ　『合子沢松森（２）遺跡発掘調査報告書』
五所川原市教育委員会　1998　『犬走須恵器窯跡発掘調査報告書』
五所川原市教育委員会　2003　『五所川原須恵器窯跡群』
小友　叔雄　1956　『荒川村沿革誌』
櫻井　清彦　1958　「東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題」『館址』　東京大学出版会
北林八洲晴　1969　「青森県夏泊半島の製塩土器」『月刊考古学ジャーナル』38号
北林八洲晴　2003　『断章　青森の製塩跡考』
角川日本地名大事典編纂委員会　1985　『青森県地名大辞典』　角川書店
成田　滋彦　1989　「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観』４　小学館
三浦　圭介　1992　「青森県における古代の土器様相」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料』　古代城柵官衙遺跡検討会
齋藤　　淳　2001　「津軽海峡領域における古代の土器の変遷について」『研究紀要』４　青森大学考古学研究所
窯跡研究会　1997　『古代の土師器生産と焼成遺構』　真陽社
葛西　　勵　2002　『再葬土器棺墓の研究』

写　真　図　版

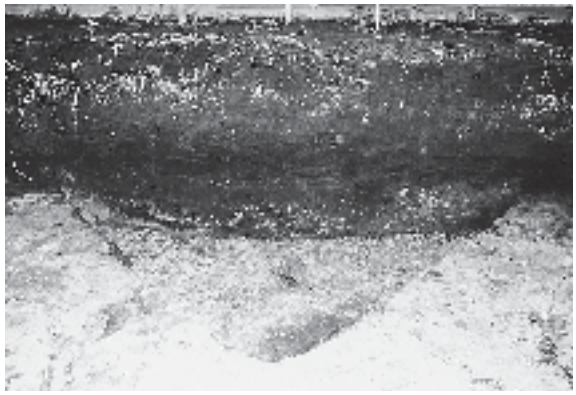
調査区全景東側（北→）

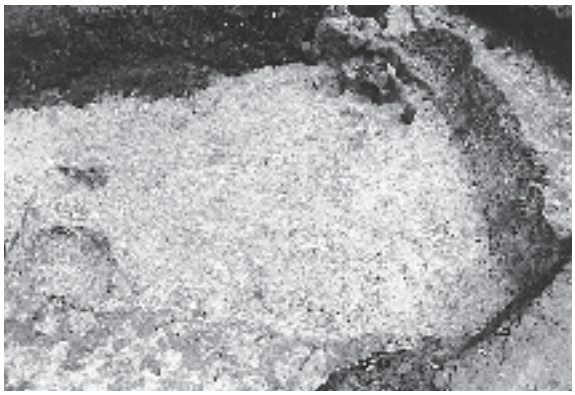
調査区全景西側（北→）

基本層序（西→）

ＳＩ01完掘（西→）

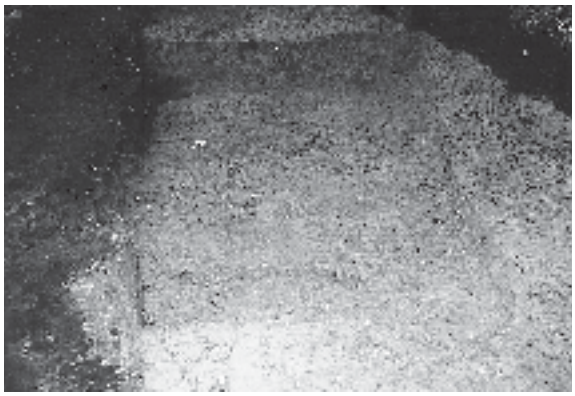
ＳＩ02完掘（西→）


ＳＩ03完掘（東→）


ＳＩ04完掘（西→）

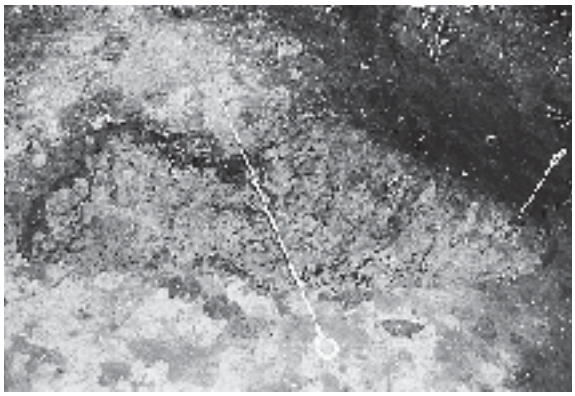
ＳＩ04カマド（西→）

写真1　葛野（1）遺跡　検出遺構（1）

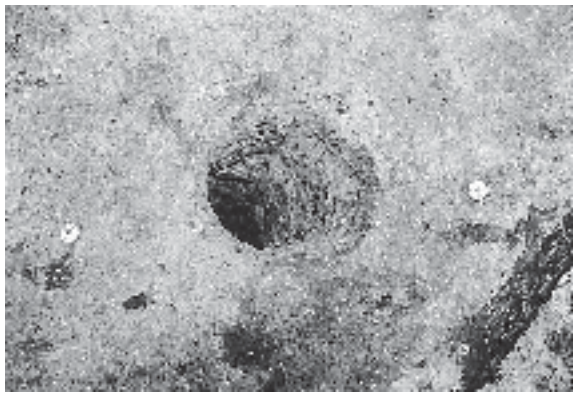


ＳＩ05完掘（北→）

ＳＩ06完掘（東→）



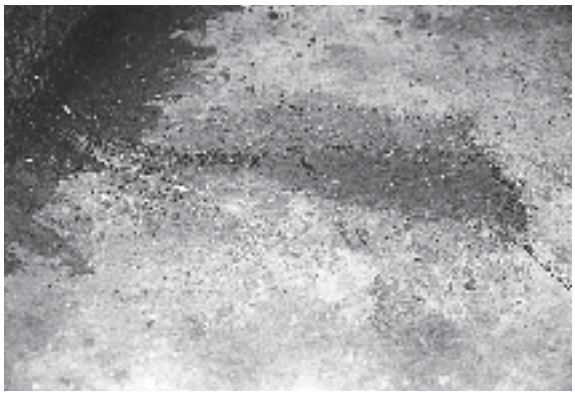
ＳＫ01完掘（南→）



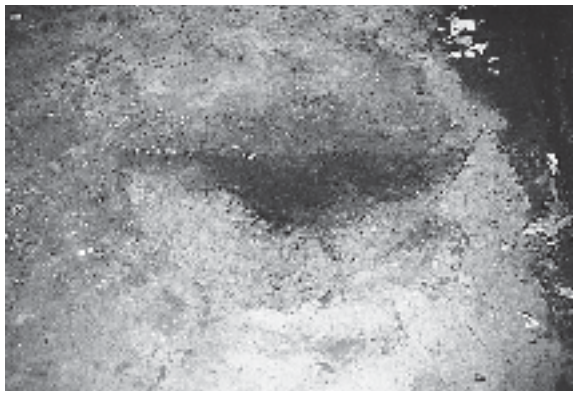
ＳＰ01完掘（西→）

ＳＰ02・03完掘（東→）

ＳＰ04完掘（北→）

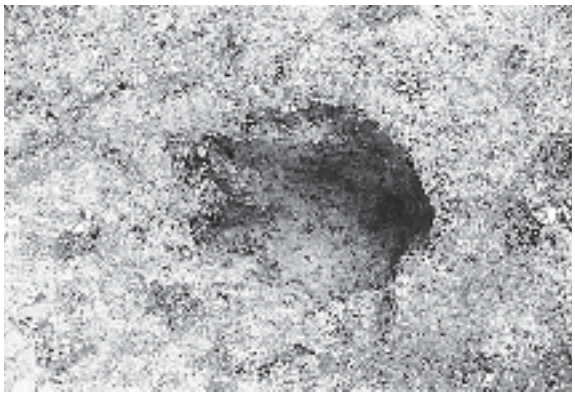


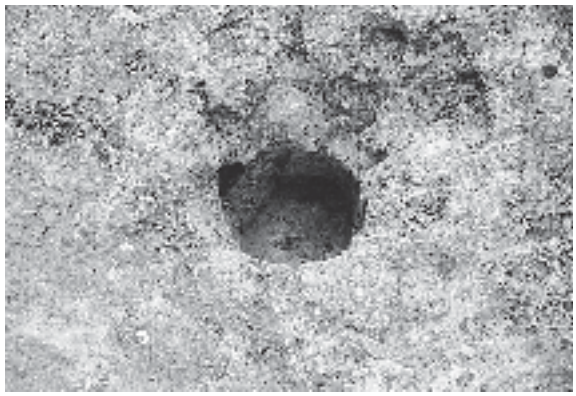
ＳＰ07セクション（北→）

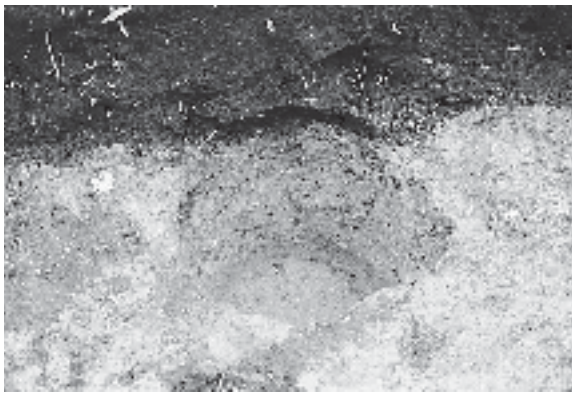


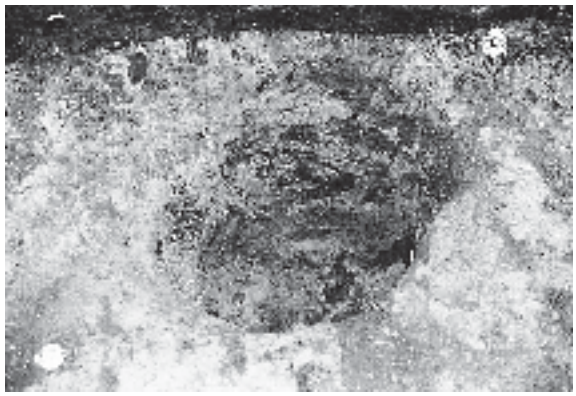
ＳＰ08セクション（南→）

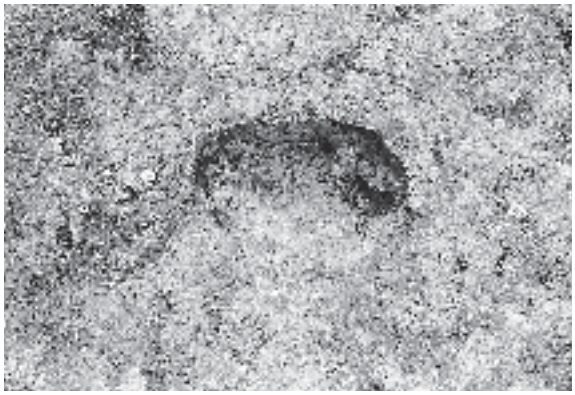
写真2　葛野（1）遺跡　検出遺構（2）

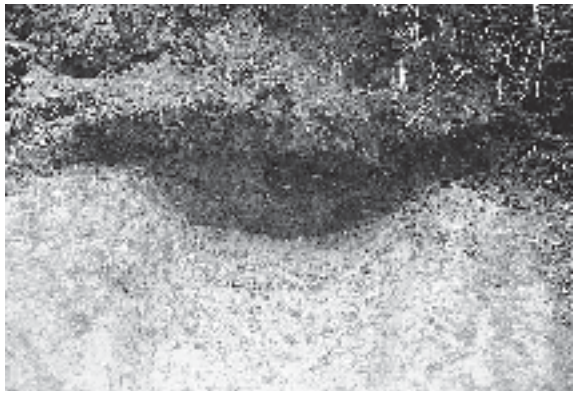

ＳＰ09完掘（北→）


ＳＰ10完掘（北→）


ＳＰ11完掘（西→）


ＳＰ12完掘（西→）


ＳＰ13完掘（西→）


ＳＤ01セクション（東→）

ＳＤ02完掘（西→）

ＳＤ03・04完掘（北→）

写真3　葛野（1）遺跡　検出遺構（3）

17-1

17-2

17-3

17-4

17-5

17-6

17-7

17-8

17-9

17-10

17-11

（S＝1/3）

写真4　葛野（1）遺跡　出土遺物（1）

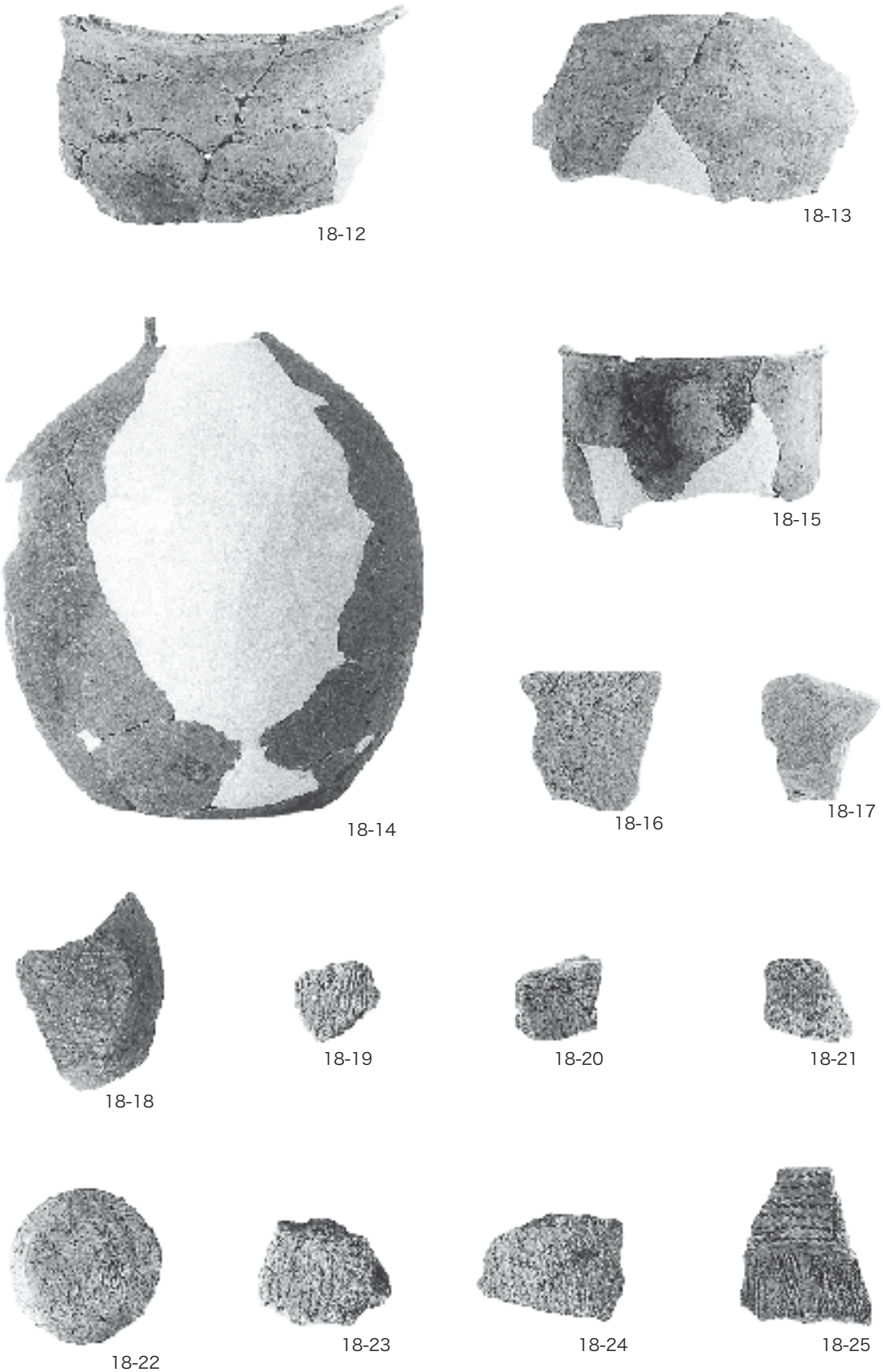


写真5　葛野（1）遺跡　出土遺物（2）

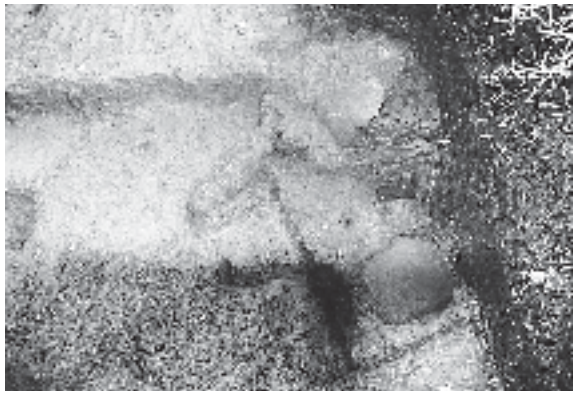
調査区全景（南→）

基本層序（東→）

ＳＩ01完掘（北→）

ＳＩ01カマド（北→）

ＳＩ02完掘（北→）

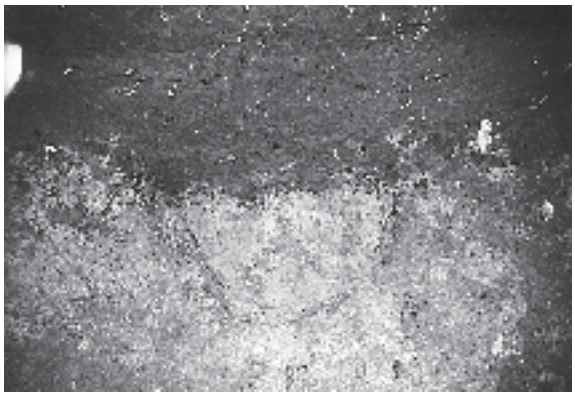


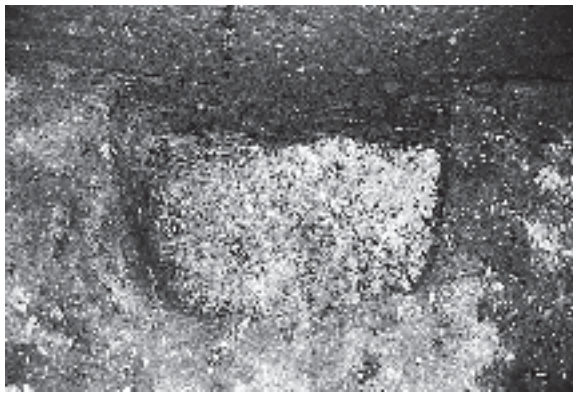
ＳＩ02カマド（北→）

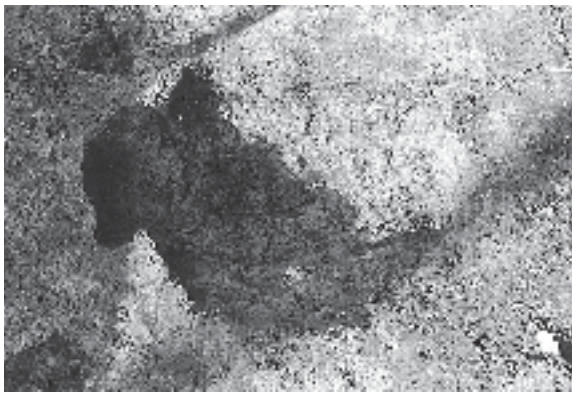
ＳＩ03完掘（北→）

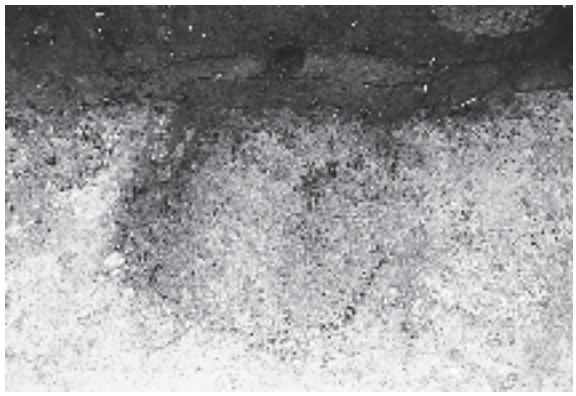
ＳＩ03カマド（北→）

写真6　葛野（2）遺跡　検出遺構（1）


ＳＫ01完掘（東→）

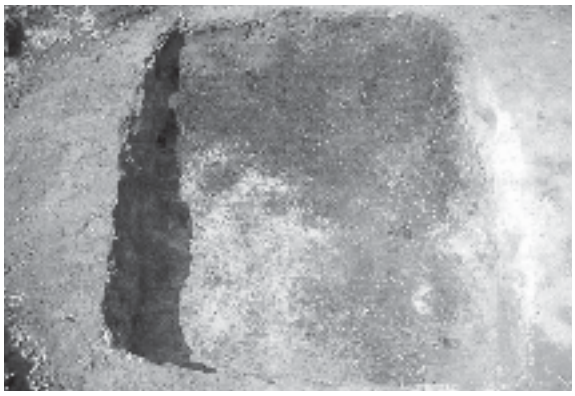

ＳＫ02完掘（東→）


ＳＫ03完掘（南→）


ＳＫ04・ＳＰ08完掘（東→）

ＳＫ05完掘（西→）

ＳＫ06完掘（西→）


ＳＫ07完掘（東→）

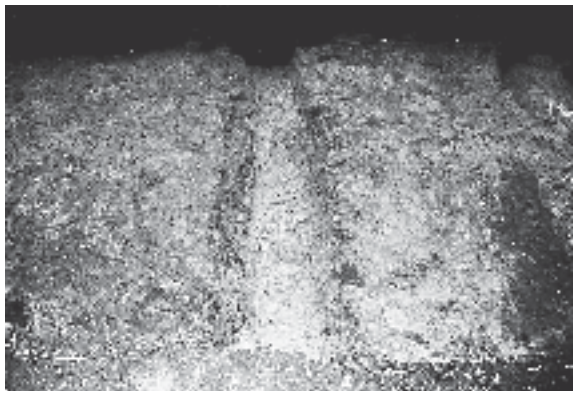
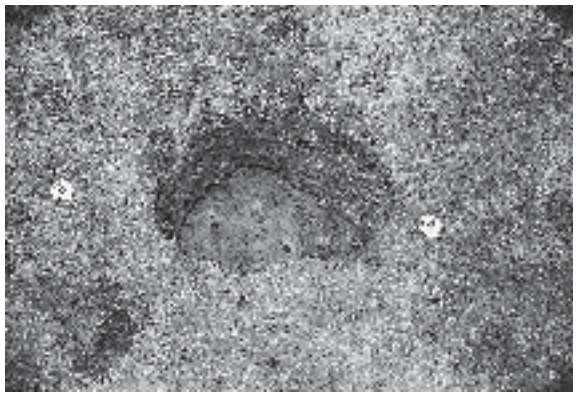
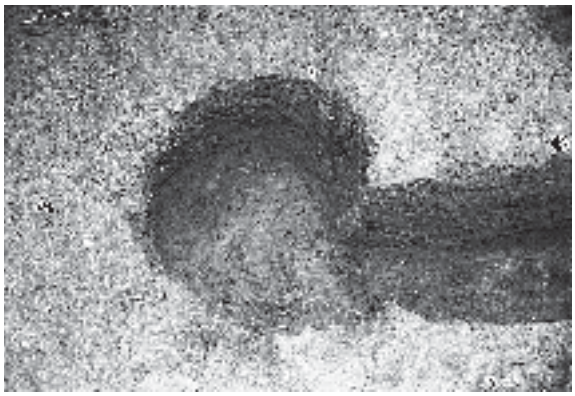
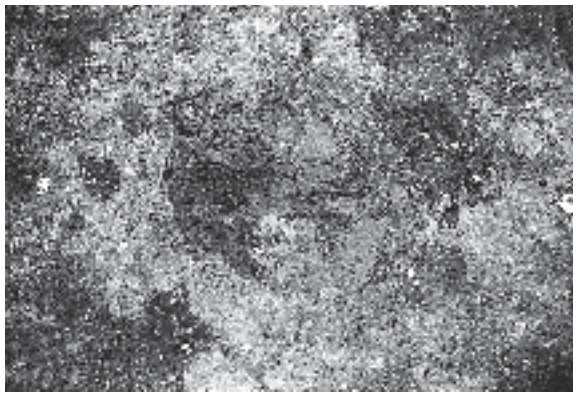

ＳＤ01完掘（東→）

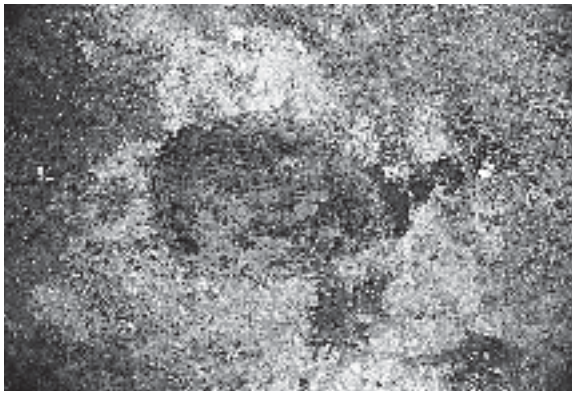
写真7　葛野（2）遺跡　検出遺構（2）

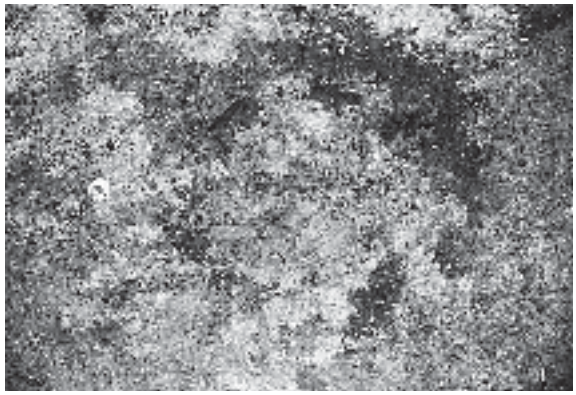
ＳＰ01完掘（西→）


ＳＰ02完掘（西→）


ＳＰ03完掘（東→）


ＳＰ04完掘（南→）


ＳＰ05完掘（南→）


ＳＰ06完掘（東→）

ＳＰ09完掘（西→）

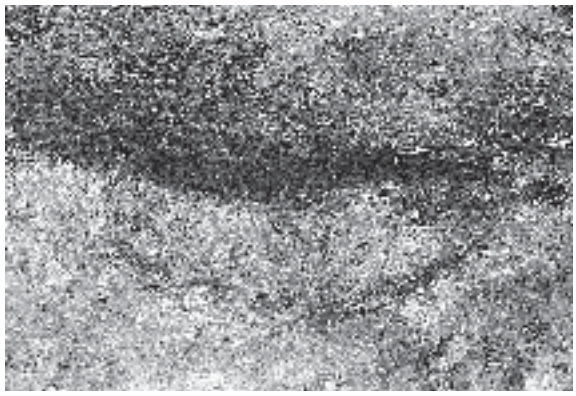

ＳＰ10完掘（西→）

写真8　葛野（2）遺跡　検出遺構（3）

25-1

25-2

25-3

25-4

25-5

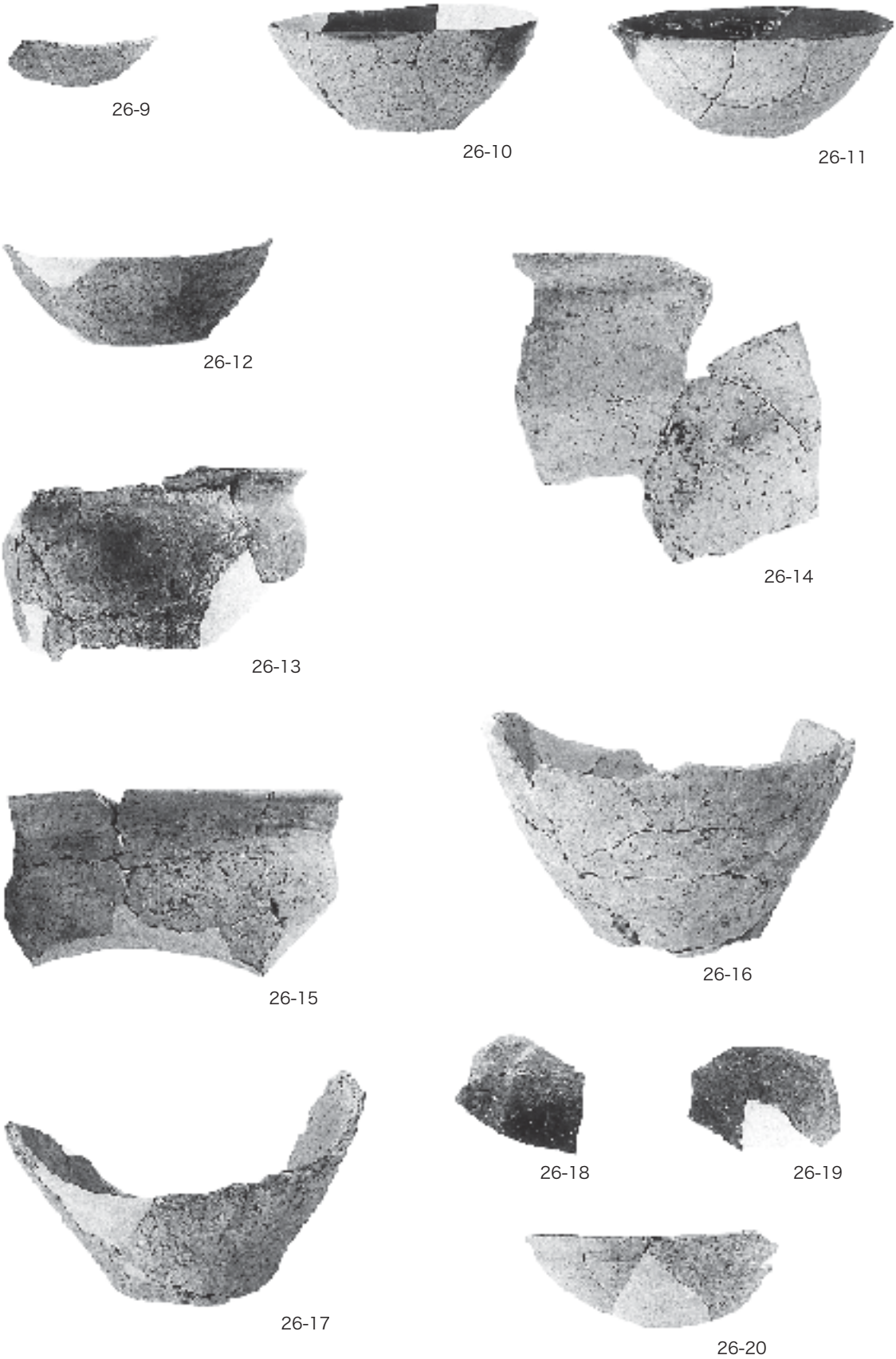
25-6

25-7

25-8

（S＝1/3）

写真9　葛野（2）遺跡　出土遺物（1）



（S＝1/3）

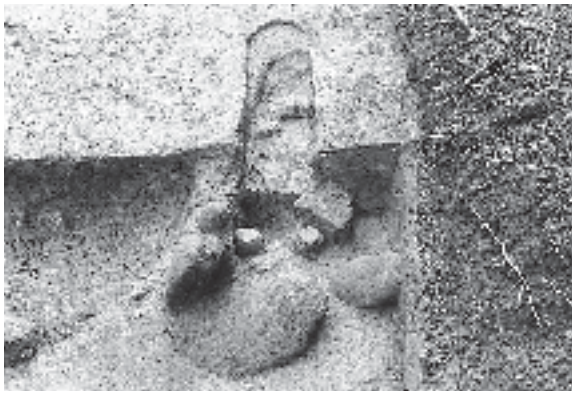
写真10　葛野（2）遺跡　出土遺物（2）

調査区全景Ａ区（北→）

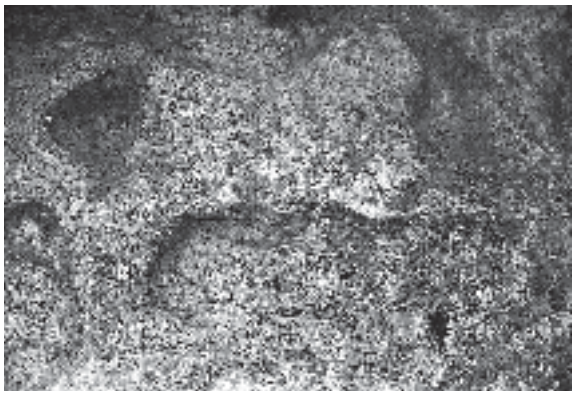
調査区全景Ｂ区（南→）

基本層序（西→）

ＳＩ01完掘（北→）


ＳＩ01カマド（北→）

ＳＩ01カマド火床面（北→）


ＳＩ01Pit5～7（北→）

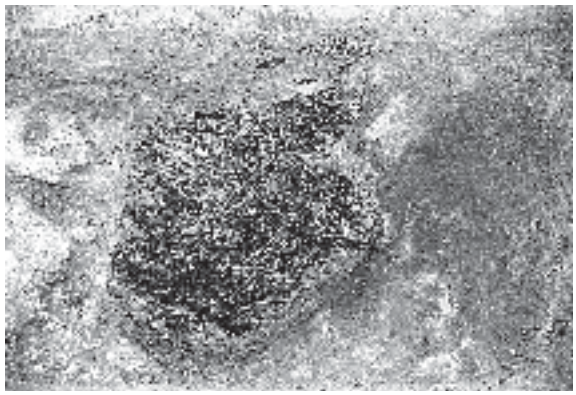
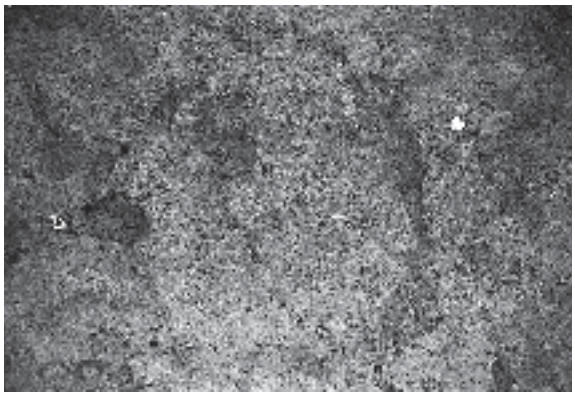

ＳＫ03炭化物（南→）

写真11　葛野（3）遺跡　検出遺構（1）


ＳＫ04完掘（南→）

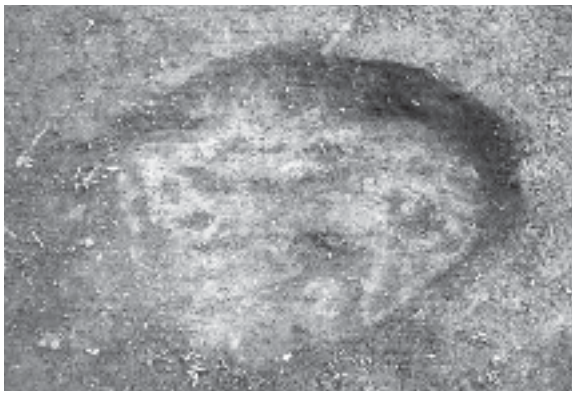
ＳＫ05完掘（北→）

ＳＫ06完掘（西→）

ＳＫ07完掘（南→）

ＳＮ01完掘（南→）

ＳＮ02確認面（北→）


ＳＰ01完掘（西→）

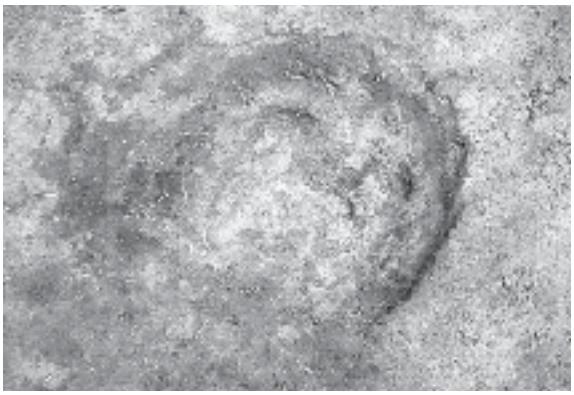
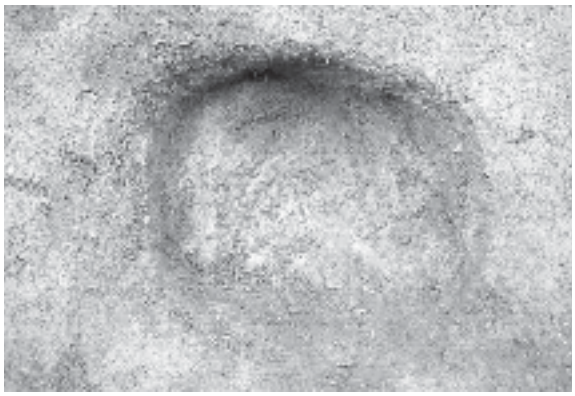
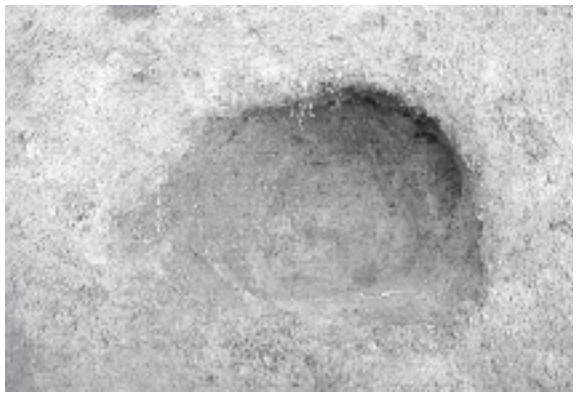
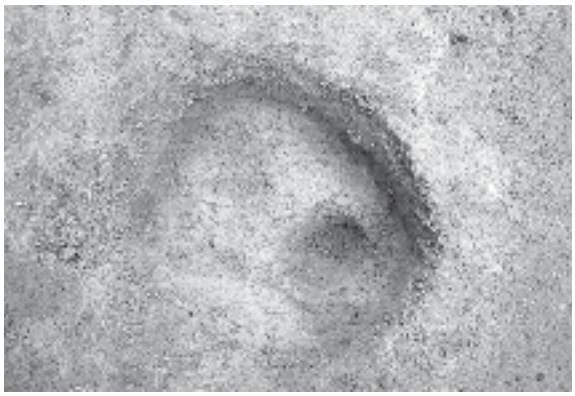
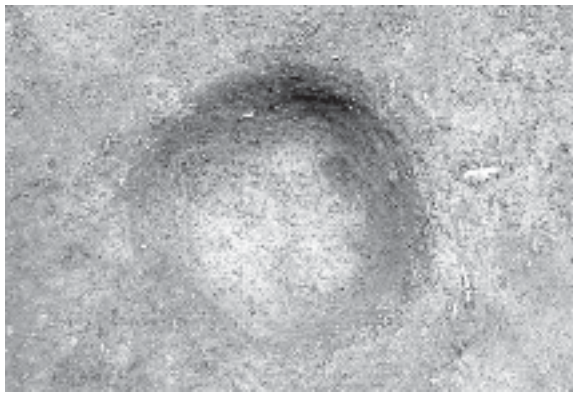

ＳＰ02完掘（西→）

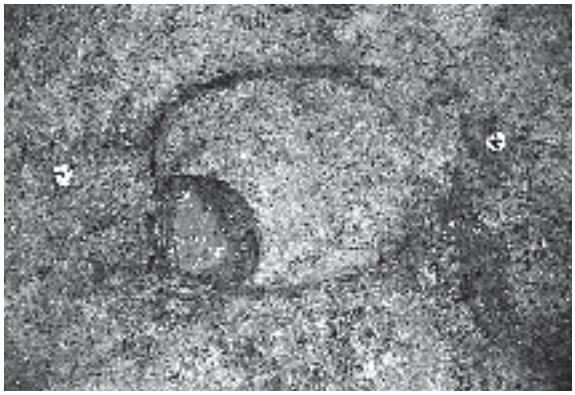
写真12　葛野（3）遺跡　検出遺構（2）

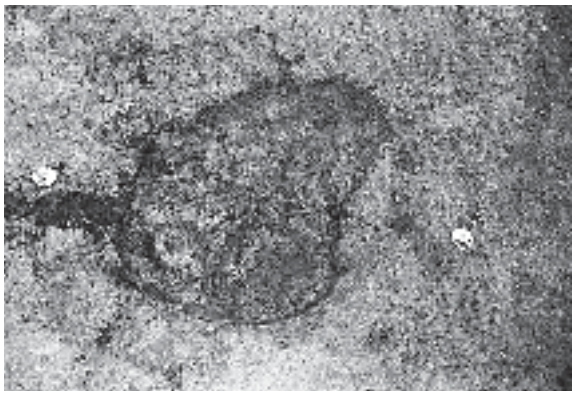

ＳＰ04完掘（西→）


ＳＰ05完掘（西→）


ＳＰ06完掘（北→）


ＳＰ07完掘（西→）


ＳＰ10完掘（南→）


ＳＰ11完掘（南→）

ＳＤ01完掘（西→）

写真13　葛野（3）遺跡　検出遺構（3）

28-1

28-2

（S＝1/2）

33-1

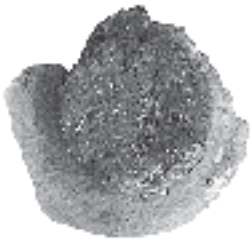
（S＝1/2）

30-1

30-2

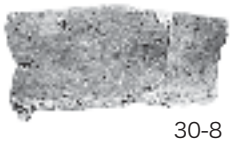
30-3

30-4


30-5

30-6

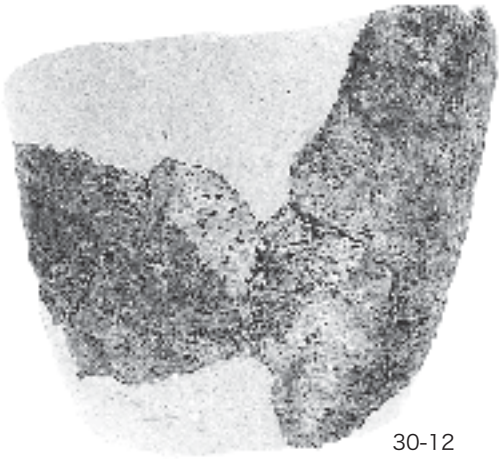
30-7


30-8

30-9

30-10

30-11


30-12

30-13

（S＝1/3）

写真14　葛野（3）遺跡　出土遺物（1）

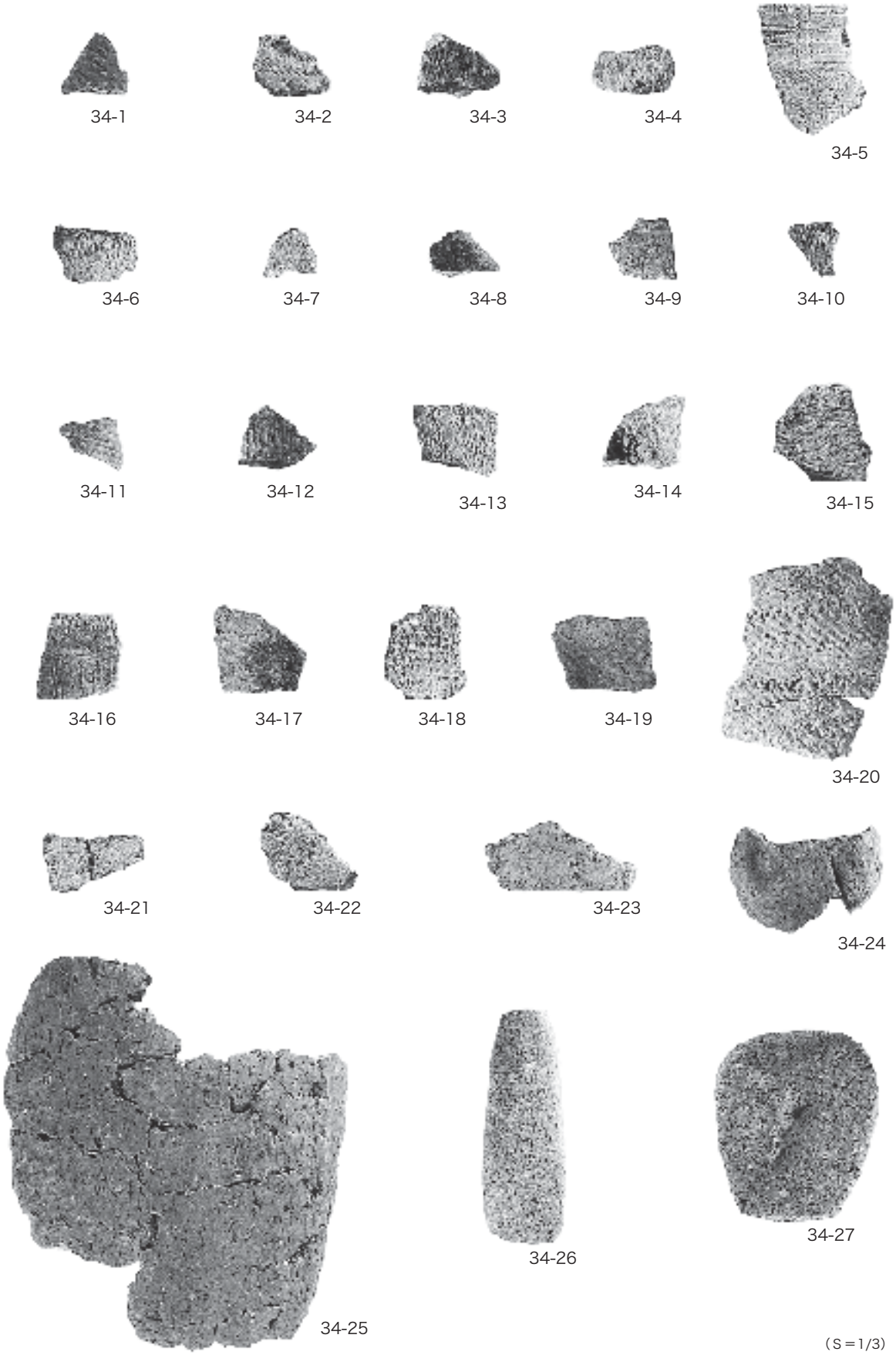


写真15　葛野（3）遺跡　出土遺物（2）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	くずのいせきぐんはっくつちょうさほうこくしょ
書 名	葛野遺跡群発掘調査報告書
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	青森市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第96集
編 著 者 名	設楽政健、野坂知広、稲垣森太
編 集 機 関	青森市教育委員会
所 在 地	〒038－8505　青森県青森市柳川二丁目１番１号　TEL017－761－4796
発 行 年 月 日	西暦2008年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）		所在地（ふりがな）	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
			市町村	遺跡番号	北緯	東経			
葛野遺跡群	葛野(1)遺跡（くずの いせき）	青森県青森市大字大別内字葛野（あおもりけんあおもりしおおあざおおべつないあざくずの）	02201	01217	40°45′26″	140°43′53″	20060912～20061027	589㎡	道路改良工事に先立つ事前調査
	葛野(2)遺跡（くずの いせき）	青森県青森市大字大別内字葛野（あおもりけんあおもりしおおあざおおべつないあざくずの）	02201	01218	40°45′9″	140°44′3″	20061030～20061130	711㎡	道路改良工事に先立つ事前調査
	葛野(3)遺跡（くずの いせき）	青森県青森市大字大別内字葛野（あおもりけんあおもりしおおあざおおべつないあざくずの）	02201	01308	40°44′44″	140°44′16″	20070925～20071106	2,887㎡	道路改良工事に先立つ事前調査

所収遺跡名		種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
葛野遺跡群	葛野(1)遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居跡　６軒 土坑　１基 小ピット　14基 溝状遺構　４条	土師器・須恵器 砥石・縄文土器	
	葛野(2)遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居跡　３軒 土坑　７基 小ピット　10基 溝状遺構　１条	土師器・須恵器	
	葛野(3)遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	竪穴住居跡　１軒 土坑　７基 焼土遺構　２基 小ピット　11基 溝状遺構　１条	土師器・須恵器 縄文土器・石器 土玉・銭貨	

要 約	１．葛野遺跡群は、青森市南部に広がる火山性台地上、標高約50～80mの地点に位置している。 ２．発掘調査は、市道金浜小畑沢線道路改良工事予定地内4,187㎡（葛野（１）遺跡：589㎡、葛野（２）遺跡：711㎡、葛野（３）遺跡：2,887㎡）を対象に実施した。 ３．調査の結果、縄文時代および平安時代の遺構・遺物を検出した。集落跡の主体時期は、平安時代（10世紀初頭～前葉）である。

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962	『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965	『四ツ石遺跡調査概報』
〃	3	1967	『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970	『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	1971	『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971	『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971	『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979	『蛍沢遺跡』
		1983	『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983	『山野峠遺跡』
〃		1985	『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986	『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1987	『横内城跡発掘調査報告書』
〃		1988	『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書			
〃	第16集	1991	『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第17集	1992	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第18集	1993	『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』
〃	第19集	1993	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第20集	1993	『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃	第21集	1994	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第22集	1994	『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第23集	1994	『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第24集	1995	『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第25集	1995	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第26集	1995	『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第27集	1996	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』
〃	第28集	1996	『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第29集	1996	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第30集	1996	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第31集	1997	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第32集	1997	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第33集	1997	『新町野遺跡試掘調査報告書』
〃	第34集	1997	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第35集	1997	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第36集	1998	『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第37集	1998	『新町野遺跡発掘調査報告書』
〃	第38集	1998	『野木遺跡発掘調査報告書』
〃	第39集	1998	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第40集	1998	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
〃	第41集	1998	『野木遺跡発掘調査概報』
〃	第42集	1998	『熊沢遺跡発掘調査概報』
〃	第43集	1999	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第44集	1999	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第45集	1999	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
〃	第46集	1999	『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
〃	第47集	1999	『稲山遺跡発掘調査概報』
〃	第48集	2000	『熊沢遺跡発掘調査報告書』
〃	第49集	2000	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第50集	2000	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
青森市埋蔵文化財調査報告書			
〃	第51集	2000	『桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡発掘調査報告書』
〃	第52集	2000	『大矢沢野田(1)遺跡調査報告書』
〃	第53集	2000	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第54集	2001	『新町野遺跡発掘調査報告書・Ⅱ 野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第55集	2001	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
〃	第56集	2001	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
〃	第57集	2001	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅲ』
〃	第58集	2001	『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第59集	2001	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第60集	2002	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅶ』
〃	第61集	2002	『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第62集	2002	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第63集	2002	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅳ』
〃	第64集	2002	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第65集	2003	『雲谷山吹(4)～(7)遺跡発掘調査報告書』
〃	第66集	2003	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
〃	第67集	2003	『深沢(3)遺跡発掘調査報告書』
〃	第68集	2003	『近野遺跡発掘調査報告書』
〃	第69集	2003	『市内遺跡発掘調査報告書11』
〃	第70集	2003	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅷ』
〃	第71集	2004	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
〃	第72集	2004	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
〃	第73集	2004	『新町野遺跡発掘調査概報』
〃	第74集	2004	『市内遺跡発掘調査報告書12』
〃	第75集	2004	『江渡遺跡発掘調査報告書』
〃	第76集	2005	『栄山(3)遺跡発掘調査報告書』
〃	第77集	2005	『赤坂遺跡発掘調査報告書』
〃	第78集	2005	『三内丸山(8)遺跡発掘調査報告書』
〃	第79集	2005	『市内遺跡発掘調査報告書13』
〃	第80集	2005	『合子沢松森(2)遺跡発掘調査概報』
〃	第81集	2005	『石江遺跡群発掘調査概報』
〃	第82集	2006	『三内沢部(3)遺跡発掘調査報告書』
〃	第83集	2006	『合子沢松森(2)遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第84集	2006	『新町野遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第85集	2006	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅸ』
〃	第86集	2006	『市内遺跡発掘調査報告書14』
〃	第87集	2006	『新町野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
〃	第88集	2006	『史跡高屋敷館遺跡環境整備報告書Ⅱ』
〃	第89集	2006	『篠原遺跡発掘調査報告書』
〃	第90集	2007	『月見野(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第91集	2007	『市内遺跡発掘調査報告書15』
〃	第92集	2007	『新町野遺跡発掘調査概報Ⅲ』
〃	第93集	2007	『合子沢松森(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第94集	2007	『石江遺跡群発掘調査報告書』
〃	第95集	2008	『野尻(4)遺跡発掘調査報告書』
〃	第96集	2008	『葛野遺跡群発掘調査報告書』
〃	第97集	2008	『市内遺跡発掘調査報告書16』
〃	第98集	2008	『新町野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

青森市埋蔵文化財調査報告書　第96集

葛野遺跡群発掘調査報告書

発行年月日　平成20年3月31日

発　　行　青森市教育委員会
〒038-8505 青森市柳川二丁目1番1号
TEL 017－761－4796

印　　刷　青森オフセット印刷株式会社
〒030-0802 青森市本町二丁目11番16号
TEL 017－775－1431